Z32-B88

金の星

国立国会図書館
8. 3. 2

第六卷　四月号　第四號

●(行證日一月四年三十正大 本誌納印日九月三年三十正大)●　●(行證日一月一第一月毎) 可郵物便郵種三第日三十月六年一十正大●

優秀なる圖畫成績は

色調正しき

王様クレオン
水彩繪具

を愛用せらるゝ兒童諸君の作品である。

各宮殿下御用

=キングクレオン新發賣=

合名會社 王様商會

東京市外西巣鴨町堀の内四

各地文具店書籍店ニアリ

野口雨情先生著

童謡集 青い眼の人形

裝幀 蕗谷虹兒畫伯
挿畫 寺内萬治郎畫伯
武井武雄畫伯

總絹表紙特製天金、紙數約二百八十頁、定價壹圓六拾錢、郵送料十五錢

青い眼をしたお人形
にアメリカ生れのセ
ルロイド
日本の港へついたと
き
一杯涙をうかべて
「わたしは言葉がわ
からない
迷ひ子になつたらな
んとせう」
やさしい日本の嬢ち
やんよ
仲よく遊んでやつと
くれ
仲よく遊んでやつと
くれ

「青い眼の人形」の出版に際して

童心性の欠けた藝術は、智識の藝術である。童謡の本質は智識の藝術ではない。智識の藝術でないから直に兒童と握手が出來るのである。兒童の生活は最も自由であり最も自然である。大なる自然は大なる藝術であると同時に、あらゆる智識を超越して眞、善、美の世界の上に立つてゐる。

童謡が兒童の生活と一致し眞、善、美の世界と一致するのも、童心性を有する自然詩であるからである。

童謡は全く自然詩である。概念詩人の考ふる如き加工的美術品ではない。

童謡集『青い眼の人形』は『十五夜お月さん』(大正九年發行)以後の作中から八十篇を撰擇して一卷とした私の第二童謡集である。(雨情)

内容目次ノ一部

赤い機ンぼ
乙鰹さん
十と七つ
一つお星さん
さらさら時雨
海ひよどり
月夜
川原の河童
赤い靴
磯の千鳥
くたびれごま
ひばり
田舎の狐
隣の夜鷹
秋の夜
五つの指
重い、重い、車
鈴なし鈴虫
舌切雀
踊る燕
お人形さんの夢
かなくぐり
牡丸
西吹く風
青い眼の人形
呼子鳥
おしやれ椿
つばめ
牧場の子牛
おぼろお月さん
ねむりぐさ
ふくろう
鼠の母さん
鼠の米搗き
砂の数
護りやんて
外數十篇を收む

三月二十八日製本出來
東京市外田端三五一
發行所 金の星社

雨情選作叢書

各大家の作曲入・定價各冊金十五錢・送料各冊金二錢

本居長世先生作曲
◇帝都復興の歌（童謠）
（帝都復興の歌・アンデルセン）

中山晋平先生作曲
◇須坂小唄（民謠）
（須坂小唄・かなしい海）

大和田愛羅先生作曲
◇雀遊び（遊技唄）
（雀遊び・南風北風）

佐藤千夜子女史作曲
◇野の唄・海の唄（子守唄）
（野の唄・海の唄）

藤井清水先生作曲
◇矢車草の咲く村（民謠）
（矢車草の咲く村・機織り虫）

宮崎琴月先生作曲
◇二つの蝶々（童謠）
（二つの蝶々・皆さん明日また）

雨情選作叢書は野口雨情先生作の童謠民謠中より素朴優麗の作品を撰み作曲大家の作曲を付して連續出版いたします。童謠と民謠の新しいパンフレットです。

野口雨情先生著
●童謠教育論　定價四十錢　送料二錢

「童謠の正風」とはどんなものか、教育上どれだけの効果があるか、といふ事を正確に知るには童謠教育の創始者である野口先生の述べられた本書に依るより外にありません。四六版七十頁の小冊子であるが、極めて平易に誰にもわかる樣に一々實例を擧て說れて有ります。

野口雨情先生著
●童謠作法講話　定價四十錢　送料二錢

童謠はどんなふうに作つたらよいかといふことを、尤も親切に、尤も判り易く說かれたもので、直接先生の御話を目のあたり伺ふ樣な感じがする。

大庭三郎先生著
●勤王の志士　定價五十錢　送料四錢

日本が今日、こんなに强く大きくなつたのは、みんな維新當時の勤王家達の賜である。本書はその勤王家達がどうして働いたかを史實に基いて書いたもので、今日の思想問題からして是非みなさんに讀んで貰らいたひのです。

發行所　東京神田錦町一ノ一　振替東京五二三三九　米本書店

坪内逍遙博士著　小川治平氏　尖戸左行氏　畫

附錄——書用紙で出來る假面の作り方（二十餘種）

四六判美本色刷口繪　假面圖及挿畫多數

家庭用兒童劇

破天荒の提供！　特價版八十錢　郵稅六錢

小學生全部に普及させたい爲めの奉仕的提供

兒童教育界に大評判の坪内博士の兒童劇は、博士の高遠な教育的見地から書かれたものです。それは單に無邪氣な遊戲を供するに止まらないで、品性の陶冶ともなり、藝術的修養ともなります。殊に手輕に手製の出來る澤山の假面を利用する趣向に至つては全く前例のない新新な考案です。

弘田龍太郎氏作曲

家庭用兒童劇　すくなびこな樂譜

同因幡兎樂譜

定價壹圓貳拾錢　郵稅六錢

近刊

早稲田大學出版部

東京市外牛込区早稲田　電話京橋三二一一番　東京市東京市京橋区古賀町一丁目六番地　電話京橋三二一一番　大阪市北区堂島二丁目九番地　電話大阪五四三八番

（實撮）東京堂・東京海堂・至誠堂・盛文館・北隆館・野屋

目次

（第六卷・第四號）

咲いたく櫻（表紙・原色版）……寺内萬治郎
鼠のお家（口繪・三色版）……泰西名畫
夢とり（童謡）……（四）野口雨情
同作曲……（二）小松耕輔
姉と弟の唄（童話）……（六）宇野浩二
三人片輪（童話）……（一四）小島政二郎
決死の使者（長篇）……（三）西條八十
雨の夜更け（推薦童謡）……（二九）岡本しな子
水滸傳（支那傳奇）……（三〇）宮島資夫
ホシローヒルム（熊狩の卷）……（三八）寺内萬治郎
十五少年漂流物語（長篇）……（四二）霜田史光
瞳の小人（童話）……（四九）豐島百合子
山の向う（童謡）……（五五）若山牧水
孫悟空と牛魔王（童話）……（五六）楠山正雄

◇アンデルセン傑作童話◇

小さなマッチ賣の娘……（六四）吉江孤雁
火打箱と兵士……（七〇）加藤朝鳥
大助小助……（八一）西川勉
豆の花……（八八）秋庭俊彦
甲蟲の自慢……（一〇五）中島孤鳥
親指姫……（一二八）齋藤佐次郎
赤い靴……（一三六）馬場孤蝶
羊よ來いく（童話）……（一四四）野口雨情
編輯室より……（一四六）
金の星社出版だより……（一四八）

鼠のお家（泰西童話名畫その二）

親指の大さしかない感歎者の親指太郎が地面の下の鼠のお家へとび込んで來たところです。（グリムの「親指太郎」より）

▼西條八十先生著
（四六判總布上製箱入）（金一圓六十錢送十五錢）

新らしい
詩の味ひ方

◎作詩上の參考書も少なくはありませんが本書の如く廣く精く而も詩人として天才的の著者が何人にも判り易く又極め易く說き明かされたる該博なる案内書は他に求め得られないだらう是非一卷を机上に飾られん事を御薦めする

四六判 金一圓六十錢 送料十五錢

▼吉屋信子女史新著
第四卷 花物語

▼あゝ東京の壞滅、百億の宮と數十萬の生命とを失滅した燒野ヶ原に吾詩人等は一齊に胸も裂けよと涙に顫ふ筆を執りて清き血と美しき涙の結晶たる本書は出づ！永遠不朽に傳ふべき記念詩集として忽ち大好評を得第八版いよ〳〵發賣さる

散文詩集
憶東京

□本書の眞價は既に世の定評の如く將に大正の文壇に特筆大書して後世に傳ふべきもの、いよ〳〵圓熟せる麗筆は讀者を恍惚の境に導き哀傷悲嘆盡くる處を知らず、一句一章苦心の傑作は世の高評と共に益〻光輝を增す。（定價金一圓卅錢送料十五錢）

四六判 金一圓送料十五錢

▼有名詩人の優れたる小曲に虹兒先生が特に吾社の爲に入念の逸筆を煩して得たる眞に美しき小曲畫集であります。小曲を作り畫を學ばむと欲する人々は是非本書を座右に備へて下さい。必ず得る處多大であらうと確信します……

小曲畫集
夢の跡

四六判 定價十錢 送料五錢

▼蕗谷虹兒先生新著
（四六判上製美本）（金一圓四十錢送十五錢）

虹兒畫譜輯
睡蓮の夢

◎何人の追隨を容さず天才獨歩の著者が吾國版畫界に一大驚異と白熱的の好評を以て迎へられ、諸君の既に知る通りである本書は著者の自信の作品の數多收めて愈〻世の多く識者の批判に俟つ爲の第一聲なる、三十餘枚の挿畫、七色の變りの優美印刷は目醒めるばかりなり也。……

東京市神田區南神保町十六番地
交蘭社
振替口座東京二〇七四番
振替口座長野六〇三番

天下の少年は何故に爭ふて大日本國民中學會に入會する乎

■講義が新いから
■會費が廉いから
■指導が良いから
■學制が正いから
■基礎が固いから
■講師が善いから
■卒業が早いから
■成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 道藤隆吉 理學博士 山内繁雄
顧問 新渡戸博士 三宅博士 井上博士 浮田博士 岡田前文部大臣

一人前の男となるには

どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケ敷しい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチヤンと出來てゐる創立以來二十二年の古い組織のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法がそれだ。

◉大震火災の爲め本會事務所燒失の厄に逢るも直に復興に着手し講義錄全部完成せり。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三
振替名古屋四二八〇番
東京振替貯金口座も焼失に付當分名古屋四二八〇番を使用す

新學期開講入會の絶好機

講義錄見本つき 規則書無料進呈

唯一の兒童藝術擁護雜誌

兒童の綴方

毎月十日發行 ●定價金貳拾五錢 ●郵稅金一錢 ●六ケ月分 共料 同 金壹圓四拾七錢 金貳圓八十錢

◆僕が「兒童の綴方」愛讀者になつた動機

神奈川縣三浦郡浦賀町鴨居　青木武二君投

僕らの受持であつた吉水先生が東京へ榮轉してゆかれたので、僕らはほんとに寂しくなつたある日、とつぜん先生から、級へ一册の雜誌を送つて下さつた。『兒童の綴方』といふのだ、口繪にすばらしい油繪がついてゐた。內容を見て皆驚いた。そして『いゝなあ』と感心した。ほとんど僕らのやうな少年少女ばかりの投書で創作、詩、童謠、和歌、俳句、繪、書方などいち〳〵高等師範の先生達のていねいな選評や文話がいれてあり、その上きもちのいゝさし繪があつてえらい先生達のお書きになつたものを見てゐるやうな氣がした。ことに投書家どうしの、きび〳〵した作品批評がどの位僕らの心をそゝりたてただらう、長いこと、ほしいほしいとのぞんでゐた雜誌がヤツトと見つかつたやうな氣がした。

『上品な本だ、この本なら教室で見てもいゝ』と校長先生がおつしやつた。僕らは爭つて買つて作文や童謠などを投書した。級長の川田君は小說なんか投書したつけ——當選するたびにメダルや珍らしい文房具などの賞品が來た。僕らはいつのまにか創作や、童謠などが自由に造られるやうになつてゐた。學校を卒業してから三年十七になる今日までまだ僕は投書をやめることができない。內容はあくまで兒童本位で、氣品のある高尚なつぶぞろひの藝術作品ばかり、月々新らしい、一大詩集や、文集を見てるやうな氣がする。創刊からそのまゝ二十五錢といふ定價は今の雜誌中まれに見るところでほんとに安い、この一つでもいかに本誌が兒童本位といふことを尊重してゐるかがよくわかる。云々—下略—

▲文話「おめだま」……東京高師　飯田　恒作
▲作文選評……同　千葉　春雄
▲詩、童謠、和歌、俳句……田中豐太郎　宮原　義德
▲詩話「雨から花へ」……佐々木英曲
▲童謠新曲「花壇の女王」……辻丸　次郎
▲口繪（油）海のほとり……
▲權五郎さまのお化け……吉松　祐一
▲創作函館ちどり……横田貴美衞
▲當選創作發表三篇……
▲作文、童謠、和歌、俳句……
▲誌友作品批評其他種々……
▲優秀作品には記念賞贈呈……

全紙開放自由に本誌を利用し、アナタはアナタの藝術を大きく育てあげて下さい。

發行所　東京銀座二ノ五　橋區　培風館　電話 三三二六六一　振替 東京三三八七

アンデルセンの傑作童話號

金の星・四月號

アンデルセンの肖像

三宅房子先生譯・寺内萬治郎畫伯裝幀並挿畫

家なき子

・四六判箱入總クロース美本・本文二百八十頁・挿畫十數葉入・

◇定價 金壹圓八十錢・送料十五錢◇

▽『家なき子』は世界的の名作として、世界各國語に飜譯され、如何なる少年少女も是非一度は讀んで置かなければならない本として推薦されてゐるものです。

▽原作は佛國の文豪エクトル・マローの作になり、一人の孤兒の生涯を書いたものです。名家の家に生れながら、不思議な運命にもてあそばれて、遂に旅役者に賣られ、村から村へ、さすらひ歩く哀れな物語りです。

▽また『家なき子』は一大教訓小説であります。主人公が悲しい身の上でありながら、一つ一つと人生を學んで行くあたり、讀者の涙をしぼらせるだけでなく、また大きな教訓を與へます。歐米の各學校がそつせんして、本書を推薦してゐるのも、これが爲めに外なりません。

▽果せる哉、わが國に於ても、出版以來熱烈な歡迎を受け、驚くべき賣れ行きを呈してゐます。本書はまた、裝幀の美しい點でも恐らく他にないといつて差支へないでせう。寺内萬治郎畫伯の苦心は美事に成功してゐます。金の星社はこれに使用するクロースを特に外國から取寄せました。

夢とり

小松耕輔作曲

♪=144

mf

呼びかけるやうに

やはらかに

pゆめとりさん　ゆめとりさん　p　お　ほ　し　さ　ん　の

p

お　ゆ　め　は　あ　な　い　ゆ　め　あをいゆめ

mf

mf

快活に

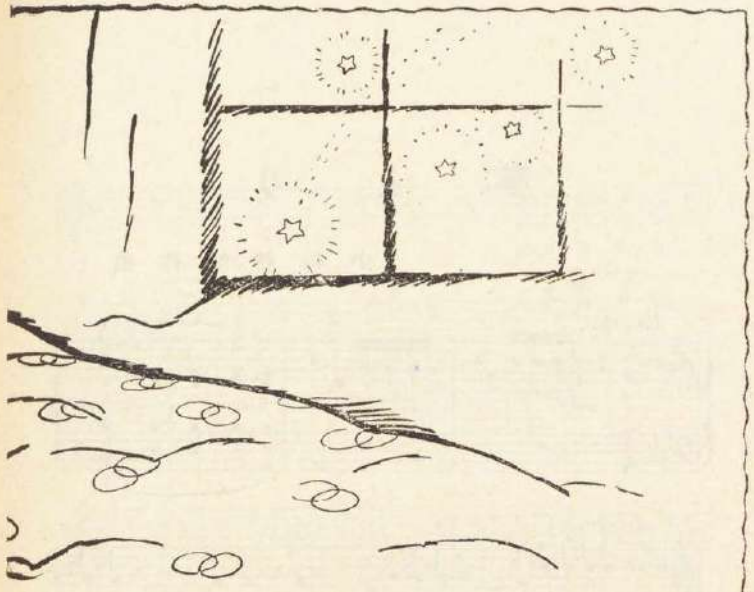
fお　ほ　し　さ　ん　は

f

ゆ　め　み　て　pお　ち　て　く　る　お　ち　て　く　る　お　ほ　し

p

さ　ん　の　お　ゆ　め　を　こ　つ　て　お　ー　く　れ



夢とり

野口雨情

夢とりさん
夢とりさん
お星さんのお夢は
青い夢
青い夢

青い夢
お星さんは夢みて
落ちて來る
落ちて來る
落ちて來る
お星さんのお夢を
とつておくれ

唄の弟と姉

宇野浩二

あるところに、お父さんも、お母さんもない、二人の姉と弟との子供がありました。お父さんもお母さんも、そして祖父さんも祖母さんもありませんでした。だから、二人はある日相談して、これから足にまかせて、廣い世界を見物して歩かうといふことになりました。世界といへば大變な廣さです。そこへ持つて來て、どこ迄行つてどこへ落ちつくといふ的がない上に、子供の足で行くのですから、何が長いと言つて、こんな長い旅はないわけでした。だから、二人の小さい姉と弟とは、住みなれた土地を離れると、それからといふもの、たゞ休みなしに歩いてゐました。何處で、誰が親切にひきとめてくれる人といふものもありませ

んでしたから、たゞ毎日休みなしに歩いてゐるばかりでした。

そのうちに、ある日廣い廣い、砂漠のやうな野原に出ました。何故といつて、それは何方を見ても果てのない砂原で、木もなければ、草もなければ、たゞ二人の歩くだけの小さな足跡が殘るばかりのやうな所でした。そして火のやうなお日樣がかん〳〵照つてゐるものですから、その砂原の熱さと言つたらありません。草履も何もはいてない二人の足は燒けつくやうな氣がしました。おまけにぢり〳〵と焦げつくやうに咽喉がかわいて來ました。それでも、朝早くのうちは未だ辛抱が出來ましたが、書頃になると、その暑さのきびしいのに堪えきれなくなつて來ました。

『姉さん、』と弟が言ひました。『咽喉がかわいて堪らない、水を飲みたいなァ。』

『もう少し行きませう、ね。』と姉は言ひました。『そしたら屹度井戸があるだらうから、そこ迄、ね。』

そして又歩きつゞけました。二人ともすつかり咽喉がかわいて、目がかすんで、まるで火鉢の中を歩いてゐるやうな思ひでした。

すると、突然弟がうれしさうな聲で叫びました。目の前の砂原の中に馬の足跡が一つぽつこりと附いてゐて、その中へ水が一ぱい、まるで小さい井戸のやうに、たまつてゐるのを見つけたからです。

『姉さん、姉さん、』と弟は言ひました。『馬がこんな井戸をこしらへてくれてるよ。ねえ、飲みませう、僕、ほんたうに咽喉がかわいちやつた。』

『いえ、いけません、いけません、』と姉が止めました。『そんな馬の足跡の水なんか飲んだら、馬の子になるから、いけません。』

『だつて、僕、咽喉がかわいてるんだもの、』と弟が言ひました。が、結局、姉の言ふことを聞いて、又もや日のかん〳〵照つてゐる中を歩き出しました。

ところが、又しばらく行くと、今度は牛の足跡があつて、そこに一ぱい水がたまつてゐるのが見つかりました。足跡の中で、水が日の光をうけてきらきら光つてゐます。

『姉さん、姉さん、』と又弟が言ひました。『牛がこんな井戸をこしらへてゐる。今度こそ飲みたいなァ。』

『いや、いけません、』と姉が言ひました。『若しそんなものを飲んだら、牛の子になつてしまふから、いけません。ね、本當の井戸のあるところ迄辛抱しませう。井戸のあるところなら、屹度木があつて、そしたら蔭もあるでせう、そしたら足を休めて、手や顔を冷やすことも出來るから。水だつて屹度綺麗で冷いだらうから。』

そこで、又二人の姉と弟とは、とぼ〳〵と砂の中に二人の小さな足跡を殘して、砂原の中を歩きつづけました。相變らず日がかん〳〵照つてゐるので、頭といはず、頸といはず燒けつくやうな氣持です。

まだ中々日は暮れさうにありませんし、砂原も盡きさうにありません。この分では、いつになつたら井戸のあるところになど着くだらう、と弟は心細く思ひました。

それでも仕方がないから歩きつづけました。弟はあんまり咽喉がかわいて、泣き出しさうになりました。然し泣かうと思つても、多分涙が目にたまるが早いか、流れ出さないうちに、それも日の光で乾いてしまつたかも知れません、それ程の暑さなのです。すると、ふと、又もや弟の目に何かの足跡が見えました。それは小さい可愛らしい足跡なんです。まん中で二つに割れてゐます。さうです、羊の足跡なのです。そして、その中には今迄よりも一層綺麗に見える水が、ぽつちりたまつてゐるのが、日の光にきら〳〵してゐるのが見えました。すると今度は弟は姉に何とも言はないで、姉が他所見してゐる間に、そつと手でそれを掬つて飲みはしました。と

ころか、どうしたといふのでせう。それを一滴飲んだか飲まないかのうちに、弟の身體は忽ち小さな羊になつてしまひました。

姉が氣がついた時には、その小さな羊が、小さな尾を振りながら、跳ねたり、飛んだりして、ちやれ付くやうに自分のまはりを廻つてゐます。

『おや？　弟はどうしたんだらう？』と思つて、そこらを幾ら見廻しても、弟らしいものゝ姿は見えなくて、その小羊が相變らず飛びついて來たり、顏をなめに來たりしてちやれ廻つてゐるばかりです。が、ふと、姉はそこに小羊のでない、それより大きな羊の足跡があるのを見付けました。

そこで、姉はすつかりその譯をさとりました。そしてわッと泣き出しました。ふと、見ると、傍に大きな岩がありましたので、それにもたれて、姉はいつ迄もいつ迄も泣いてゐました。例の小羊は、その女の子の泣いてゐるのを見ると、自分もその傍に立つて、悲しさうにしてゐました。だが、もう慰めることも、どうすることも出來ません。何故といつて小羊になつてしまつたのですもの。然し、相變らず尾を振つたり、姉の手をなめに行つたり、飛びついたりすることを止めませんでした。

姉はさうして、岩の上に顏をつけて、泣いてゐますと、ふと誰かゝ『もう幾ら泣いてもしやうがない。今に、お前たちが別れ別れになる時が來る。そしてこの小羊が人に殺されかゝる時が來る。その時に又元の人間に戻れることがあるだらうが、それ迄は幾らお前が泣いても追付くことではないのだから、あきらめなさい。』と言ふ聲が聞えました。それは夢に聞いたのか、本當に誰かゝさういふのを聞いたのか、少しも分らないのですが、言葉だけははつきり覺えてゐます。そこで、姉は泣き止んで、岩のところを離れて、又果の知れない旅をつゞけようと思つて立上ると、向うから一人の立派な男が、黑い馬に乘つて來るのに會ひました。男も丁度その岩のところへ來たので、馬からひらりと下りたところでした。男はそこに思ひがけなく、一人の美しい小娘が目を泣きはらして立つてゐるのを見て、吃驚した樣子でした。そればかりではなく、その傍に一疋の眞白な小羊が、あつちへ行つたり、こつちへ行つたりして遊んでゐます。かと思ふと小羊は時々娘の身體に飛びついて、その小さい桃色の舌で、娘の頰に傳はつてゐる涙をなめてゐます。男はその有樣を見て、たゞ事ではないと思ひましたので、

『どうしたの？』と尋ねました。『何か心配事があるの？　私に出來ることなら屹度助けて上げるから、心配のわけを話してごらん。』

『ありがたう存じます。』と娘は言ひました。『この小羊は、私の大事な弟だつたのです。そのわけは……』と言つて、娘はそこで自分たちの身の上を打明けました。

『それは何とも不思議な、だが氣の毒の話だ。』と男は言ひました。『ちやあ、兎に角私と一緒にお出で。そしたら綺麗な着物でも、珍しい指輪でも、何でも買つて上げよう。その小羊もお前のそんなに可愛がつてゐるものなら、一緒に連れて行つてやらう。』

そこで、娘はその弟の小羊を抱き上げて、その男に、一緒に黑い馬の上に乘せてもらつて、その場を出發しました。それは大變よく駈ける馬で、またゝく間にその砂原を通り過ぎて、とある川を渡ると、間もなくその男の家に着きました。その家といふのは素晴らしく立派な家で、大勢の召使などがゐて、丁寧に且那樣と、不思議なお客樣とを迎へました。そんな風でしたから、姉の娘と弟の小羊とはみんなの者に大事にされて、大變仕合せな日を送るやうになりました。そして、何年かの年月が經ちました。その間、たゞ一つ不思議なことには、小羊が何年經つても元の通りで、ちつとも大きくならないこ

とでした。が、いつでも姉の娘にぢやれついたり、そのまはりを廻つたり、どこへ行くのにも少しも傍を離れないことは昔の通りでした。

さて、或日のことでした。主人が姉の娘の着物を買ひに、例の黒馬に乗つて町へ出かけて行つた留守の間のことでした。一人のお婆さんが娘を尋ねて來

ました。娘がどんな人だらうと思ひながら、會つて見ると、それはそれは何とも言へぬ汚ならしい、凄い顔をしたお婆さんで、口の中に歯が一本、それも犬のやうな長い歯が一本生えてゐる切りでした。娘はこれが魔法使ひだとは夢にも知りませんでした。隨分恐いお婆さんだとは思ひましたが、元々心の優しい娘でしたから、顔は恐いが、屹度可哀さうなお婆さんだらうと思つて、お腹が空いてゐるといふので、食べ物などを出してやりました。

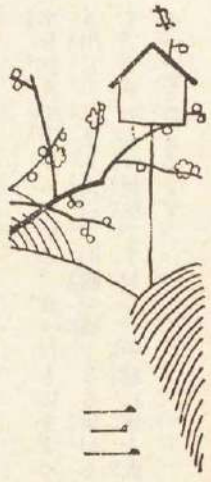
ところが、お婆さんは御飯を食べて、お茶を飲む時に、水をほしいと云つて、聞きません。娘はもういつかの事があるので、たとへ井戸の水でも何でも、水を飲むことは止めにしてゐましたので、お婆さんにも、どうしてもお茶になさいとすゝめたのですが、それでもお婆さんはどうしても聞かないのです。そればかりでなく、お婆さんは、「私は折角かうして御馳走をいたといても、外の人が後でお附合に

水を飲んで下さらないと、食べたものをすつかり吐き出してしまふ上に、お腹が痛くなる癖があるのです。ですから、後生ですから、一緒に水を飲んで下さい。」と言ふのです。

娘はさういはれて見ると、元より憐み深い性質でしたので、それに以前の砂原にあつたやうな足跡の水と違つて、別にそれを飲んだとて惡いわけのものではないと思つたものですから、心よくお婆さんに附合つてやりました。ところが、それが大變なことになつたのです。といふのは、お婆さんはいつの間にかその水にそつと何かお呪ひをしたのです。それを飲んだものですから、お婆さんが歸ると間もなく娘はひどいお腹痛を起しました。それが幾ら藥を飲んでもよくならないばかりか、だん〳〵惡くなるばかりで、夕方、町へ買物に行つた主人が歸つて來た時分には、もう雪のやうに眞青になつて、枯枝のやうに痩せてしまひました。

『まあ！』と親切な主人はその有樣を見ると吃驚して叫びました。『一體どうしたの？』

『別にどうもしたやうに思はないのですけど、直にこんな風になつたのです。』と娘は答へました。『ですけど、屹度明日になつたら癒るだらうと思ひますから、御安心下さい。』　（つゞく）



三人片輪

小島政二郎

一

昔、或大名が、

『片輪を召し抱へたいと思ふ。ひどい片輪には餘計に祿を與へる。早いが望みぢや。』

かういふ高札を、町々、村々、街道に至るまで立てました。これを見た片輪共が、さぞ喜んだらうと思ふと大間違です。その頃は、どこを探したつて、片輪なんといふものは容易にゐなかつたものです。鐵の草鞋を穿いて、

『片輪ヤーイ。』と日本全國を探して廻つても、やつと一人見つかるかどうかそれさへ判らなかつた位でした。ですから三日たつても、五日たつても、一人も片輪なんかやつて來はしませんでした。

ところが、その國に黑助といふ泥棒がありました。毎晩泥棒をして歩くのですが、いつも貧乏で、一文だつて懐にお金のあつた例がありませんでした。そのくせ大酒飲みで、とう〳〵昨夜などは、お酒を飲むお金がなかつたものですから、冬の寒い〳〵晩中だといふのに、着てゐる着物を脱いで賣り拂つてそのお金でグデン〳〵に醉ぱらひました。

『ハクショイ。』

寒いのに驚いて目を醒したのは今朝でした。見ると、畑の中で藁を引ッかぶつて寢てゐました。身には襦袢一枚しか附けてゐませんでした。

『おや〳〵これぢやア寒い譯だ。時に何かこの儘この體を動かさずにゐてお金を儲ける工夫はないかな。』

そんなことを考へてゐるうちに、ふと目についたのは、例の高札でした。

『ほほう、これは珍らしいものをお求めぢや。片輪となッ？　片輪となッ？　かうと知つたら、俺も片輪に生れて來るのであつた。片輪にさへ生れて來たなら、一生安樂に暮せたものを、なんだつて俺の兩親は滿足な人間に俺を生んだことか。親共が怨めしい。しかし、待てよ。よい思案がある。俺は生れ附いた片輪ではないが、人がよく俺のことを、よく目の利いた男ぢやと云ふ、これは一つ俄盲になり濟ましてやらう。』

で、そこらに落ちてゐた竹の杖を拾つて、それを杖に、ヨタ〳〵街道を大名の屋敷をさして歩いて行きました。やがて、お屋敷に着くと、表玄關から、

『頼まう。お頼み申します。』と案内を乞ひました。

『どうれ。何用あつて參つた？』

『片輪をお召し抱へになると伺つて參りました。』

『成程、其方は盲ぢやな。よし〳〵、こちらへ通れ、定めし殿樣にもお喜びになるであらう。』

で、奥へ通されて、殿樣にお目通りをしました。その上で、お部屋を戴いて召し抱へられることになりました。

すると、こゝにもう一人、白助といふ泥棒がゐました。初めは立派な商人の息子でしたが、大變な怠け者で、何をするのもいや、とう〳〵落ちぶれて、泥棒になりましたが、泥棒だつて夜働かなければなりません。殊に恐い思ひをしなければならないので、それがいやで、今日では泥棒もせず、たゞブラブラ遊ぶでゐました。しかし、生きてゐる以上、三度々々の食事はしなければなりません。食事をするには働いて食べるものを手に入れなければならな

い。それが面倒臭い。このまゝ日向ボッコをしてゐて、うまい物の食べられる法はないかといろ〳〵考へてゐる矢先、片輪を抱へるといふ話を聞いて、急にその氣になり

『さうだ。一つ片輪になつてやれ。だが、働かされてはつまらない。なるたけぢつとしてゐられる片輪がいゝ。待てよ、かうと……。よし〳〵、俺は不斷から足が達者だといふ評判だ。だから、あべこべに躄になつてやれ。躄なら足が不自由だから、召し抱へた方だつて用は云ひ附けまい。』

こんな自分勝手のことを考へて、躄を引き引き大名のお屋敷へ行つて、これもまた召し抱へられることになりました。

ところが、もう一人、呆助といふこれも同じ泥棒がありました。これは白助のやうに怠け者でもなく、黑助のやうにお酒飲みでもありませんでしたが、喋ることが好きで、折角骨を折つて泥棒にはひ

つても、一刻も喋らずにゐられないために、一人言をブツ〳〵云つてゐる暇に、家の者に目を醒されて、

『泥棒だ、泥棒だ。』と騒ぎ立てられるので、いつも旨く泥棒の出來た例がありませんでした。で、いつも〳〵食ふに困つて、乞食のやうな生活をしてゐました。その時聞いたのが、片輪召し抱への一條でした。で、早速決心をして

『が、さて、なんになつたものかしら。うん、それそれ。いゝことがあるぞ。俺は口が達者だと云はれてゐるから、一つ啞になつて行つてやらう。ところで、啞といふものは、短い竹を二本叩いて「わあゝ」と云つてゐればいゝのだ。』

やがて、大名の玄關に立つと、呆助は竹を叩いて

『わあゝ。』と喚きました。腹の中では『うまい〳〵なか〳〵うまいぞ、ほん物の啞のやうだ。』と思つてゐると、そこへ殿樣御自身出で入らしつて

『これは何者ぢや。』

『わあゝ。』

『さては啞か。』

『わあゝ。』

『抱へてやらうが、何も藝はないか。』

そこで呆助は弓を引く真似をして、

『わあゝ。』

『さては弓を射るか。』

『わあゝ。』

『まだ藝があるか。』

呆助はまた槍を使ふ真似をして、

『わあゝ。』

『槍を使ふか。さても〳〵重寶な奴ぢや。多分の扶持を取らせるぞ。』

『それはかたじけ……』

思はず呆助は圖に乘つて喋りかけましたが、慌てて口に手を當てゝ、『わあゝ。』

『これはいかなこと、啞が物を云うた。しかし、啞の

一聲と云つて、富貴の相を現すものと云ひ傳へられてゐる。よし〳〵、確に抱へてやるぞ。こつちへ通れ。』

『わあゝ。』

廊下を案内して、

『それにゐよ』と一部屋を指さすと呆助は心得て

『わあゝ。』

さて、思ひ通り片輪を三人までも召し抱へた大名は、得意でした。

『フフフ……』といかにも滿足さうに笑つて『天下廣しと雖も、片輪を某程多く召し抱へたものはあるまい。どれ、めい〳〵に役を申し付けて、隣國まで行つて來よう。』

かう一人言を云つて

『これ〳〵、盲。』

『はい〳〵、何御用でございます。』

『某は、四五日餘所へ行く。これ〳〵、こつちへ來い。こゝに立つてゐるのが、絹を一杯に入れてある藏ぢや。これを其方に預ける。よう留守をせい。』

『畏まりました。お留守はお氣遣なされますな。ゆつくり行つて入らつしやいませ。』

『心得た。これ〳〵蹇、某は四五日餘所へ行く。向うに藏が見えるだらう。あれは錢藏ぢや。あれを其方に預ける故、よう留守をせい。』

『はい〳〵、畏りました。ゆつくり行つて入らつしやいませ。』

『心得だ。やい〳〵啞。』

『わあゝ。』

『四五日餘所へ行く。よう留守をせい。其方には一番右の酒藏を預けるぞ。』

『わあゝ。』

そこで安心をして、大名はやがて屋敷を出て行きました。

二

大名が出て行つてしまつた後で、一番初めに口を利いたのは黑助でした。

『さて〳〵、目を塞いでゐるのは不自由なものだ。ちと目を開かう。』

すると、それに續いて、

『やれ〳〵、足を折つてゐるのは窮屈なものだ。ちと足を伸ばさう。』

さう云ひながら二人は顏を見合せて、

『黑助か。』

『うん。』

『白助か。』

『うん。お前も來てゐたのか。何をしても樂は出來ないなア。ハハハ……』

『ハハハ……。時にあつちの方で何やら呻く聲がす

る。行つて見ようぢやないか。』
『よからう。行つて見よう。』
『ホイ、こゝには啞がゐる。』
『ほん物か、俺達みたいな贋物か、試して見ようぢやないか。一二の三で嚇して見よう。』
『それ、一二の三。』
『やい〳〵やい。』
すると、呆助は相も變らず、
『わあゝ。』
二人『ハハハ……。どうやら本物らしい。』
と、その時、呆助が二人の顔を見て、
『やあ、二人は黒助に白助ぢやないか。』
『おゝ、さう云ふお前は呆助。やつぱり樂をしようと思つて來たか。』
『その通りぢや。ところが、知つての通り、俺はおしやべりだ。おしやべりが嗤られぬとなると、苦しいわ、苦しいわ。それはさうと、二人はなんになつて來たか。』
『黒助は盲、俺は躄』
『二人とも何か預りはせなんだか』
『預つたとも。預つたとも。黒助は絹物藏、俺は錢藏を預つた。』
『それは皆よいものぢや。』
二人『お主は何を預つた。』
『俺は酒藏を預つた。』
『それは猶よいものぢや。』
『それについて俺の思ふには、まづ俺の預つた酒藏を明けて一杯づつ飲んで、さて錢藏と絲物藏を明けて持てるだけ盜んで逃げ出さうと思ふが、どうだ。』
『成程、それは一段とよい考ぢや。』
『そんなら二人ともこつちへ來い。』
かう云つて啞の呆助は、二人を伴つて酒藏の前まで來て、預つて置いた鍵でガラ〳〵ピンと錠をはづして中へはひつて行きました。中に床も二階も壁も

そこら中一杯の甕でした。
『さても〳〵大分の甕ぢや。どれにせうぞ。』
三人は迷つてしまひました。しかしやがて啞の呆助が、
『まあ、手當り次第に蓋を明けて飲んで見よう。』と云ひながら、手近の蓋を明けて一掬ひ味はつて見て
『まづよささうな酒ぢや。さあ、俺が酌をするから二人とも飲め飲め。』
二人『成程、これはよい酒ぢや。』
だん〳〵醉が廻つて來るにつれて、三人とも唯飲んでゐるだけでは面白くなくなつて來ました。そこで啞の呆助が、
『どれ、歌でも歌はうか。』
二人『よからう。』
そこで呆助が、啞どころか、大きな聲を張り上げて、
田螺殿、田螺殿、
愛宕參りをなさらぬか。
いやで候、いやで候。
ちよろ〳〵川を渡る時
鷺と烏と梟奴が
あツちや蹴ツころばかしちや、こちや啄き
こちや蹴ツころばかしちや、あちや啄き
その疵が、その疵が
時節時候の來る毎に
ヅンガラ〳〵ヅンガラ痛みます。
何か良藥はござらぬか。
夏降る雪の黒燒と
山の中なる蛤と、海の中なる松茸と
それを練りて用ふれば
その効驗は現るゝ、
その効驗は現るゝ。
二人『やんや、やんや。』
おし『醉うた、醉うた。今度は我々二人が歌つて黒助

が、舞つたら一段と面白からう。』
『慰みぢや。舞はうか。』
そこで今度は黒助が立つて、二人の歌に合せて舞ひました。
二人『やんや、やんや。さあ、黒助一杯飲むがいゝ。今度は白助の番ぢや。蔓も舞へ、舞へ。』
『よオし、舞ふぞ。』
デン〳〵蟲々
……
三人が代りばんこに舞つては酒を飲み、酒を飲んでは舞つてゐるうちに、とう〳〵十甕も空けてしまひ、三人ながらフラフラする程酔ッぱらつて、絹物藏や錢藏のことなんか忘れてしまつて大陽氣にハシャいでゐました。

三

ところが、一方大名の方では片輪に留守を頼んで出たものの、考へてみれば心配になるので、用もないこ〳〵に濟せて急いでかへつて來ました。
『よう、これは不思議ぢや。屋敷内から酒盛の聲がする。』
急いで座敷へはひつて來てみると、こつちは今や酒盛の眞最中です。唖だと云つてゐた男が
田螺殿、田螺殿
愛宕參りをなさらぬか
と大口あいて歌つてゐるかと思ふ、蔓が立つて踊つてゐる　盲が大きな目をパッチリ明けて、

『面白いぞ、面白いぞ。』と、囃してゐるといふ始末です。大名は明いた口がふさがりませんでした。
『やい、この大騙詐め。』
トンと、床を踏んまへた音に初めて氣の附いた三人は、
『そりやこそお歸りだ。さあ、なんとせう。』と、慌ててまた素の片輪に戻りました。ところが、あんまり慌てたものですから自分の片輪を忘れてしまつて、蔓が盲になつて、唖が蔓になつて口を利きました。
おし、ゐざり『これは〳〵お早いお歸り。』
すると、盲が唖になつて、
『わあゝ。』

これを見た大名は
『おのれは盲であつたがいつの間にか唖になり居つた。』
めくら『わあゝ。』
『おのれは蔓であつたが盲になり居つた。』
『俄盲で難澁いたします。』
『やあ、おのれは、唖であつたが、物を云つて蔓つてゐる。』
『それなら、わあゝ。』
『こいつ、どこまで人を馬鹿にするか。よし、三人ながら斬り捨てるから覺悟せよ』と大名は腹を立てスラリと刀を引き拔きました。これ　見た三人は、
『それ逃げろ。』と、唖も口を利き、蔓ら立ち、盲もパッチリ目を開いて、雲霞と逃げ失せました。（をはり）

チエラール將軍武勇傳

決死の使者

（長篇童話）

西條八十

前號の梗概。チエラール大尉は、同僚の友シャルバンティエ大尉と共に、ナポレオン皇帝から大切な書面を預つて、パリーに駐屯してゐる皇帝の弟スペイン王へ屬けろ役目をいひつかりました。そこでチエラール大尉は、名馬「荒風」に跨り敵軍の中をパリーへ向つて進んで行つたのです。

三、袈裟掛けに斬り仆した

諸君！　シャルバンティエ大尉と別れて、獨り北への途を急ぎながら、僕は折々軍服の上から襯衣の胸衣匣をソッと押へて見た。そこには皇帝陛下の親書が藏められてゐて、觸る度毎にパリッと鳴つた。ああ貴重なるこの紙よ！　これがやがてはあの永年焦れてゐた銀の勳章と變るのだ。僕はブレーメからセルモ、アズまでと云ふものは、勳章を見せた時の、故郷の母の喜び顏のことばかり考へてゐた。

「荒風」に飼葉をやるため、僕はソアソンから遠からぬ小山の麓の一軒の宿屋に立寄つた。そこは天を突くばかりの槲の老樹で繞まれた場所で、鴉のギャーギアー啼く聲で人の言葉も聽きとれぬ位だつた。僕はそこの亭主から、つい向のマルモンの村が二日以前に敵軍の手に落ちたことを聞いた。

それから一時間後、黃昏の中に馬を進めてゆくと、僕は遠い右手の丘の上に普魯西兵の騎哨が二名佇んでゐるのを見かけた。やがて闇がだん〳〵濃くなるにつれ、北の方の空が敵の野營の明りで赤くかがやいてゐるのが分つた。

この時僕の胸にふと疑が湧いたのは、敵軍がすでに二日も以前から此邊を占領してゐることを、あの英邁な皇帝陛下が御承知ない筈は無いと云ふことだつた。もし御承知だとしたら何故こんな貴重な書類を持たせて、自分をわざ〳〵敵軍のゐる街道へ派遣されたのだらう？　だがその後で直ぐ僕は皇帝が最前シャルバンティエ大尉に云はれた言葉を憶だした。

「一軍人には命ぜられた一途あるのみだ。行け！」

さうだ、何も疑ふことはない、自分としてはこの「荒風」に蹄が一個でも殘つてゐるかぎり、手綱にこの指が一本でも掛つてゐるかぎり、命ぜられた途を突進すればいいのだ。――さう思つて僕は、セルモアズからソアソンの途々、或は小暗い樅の林を拔け、或は丘を上り下りする間も、佩劍の革帶をかたく締めあげ、手には短銃の曳金を放さなかつた。

ソアソンの町の入口に近い處で、僕は一軒の百姓家の若い女から、ソアソンの町には已に今日の午

后敵の槍騎兵が少數入り込んだことを聞いた。なんでもその大部隊は今夜の十二時までに到着する豫定ださうだ『寸刻も猶豫ならぬ』と思つて、僕はその話を聽き終るなり、荒風の横腹を拍車で蹴りとばした。五分間經たぬ間に、僕等はソアソンの町に疾風のやうに躍り込んだ。

大通りの兩側にさかんな篝火を焚いて、敵兵どもが賑かに話したり笑つたりしてゐた　どれも馬を傍につないで、僕のサーベルほど長いパイプを燻らしてゐる。僕の馬はその間を砂煙を立てて通つた。

ソレッ！　奴等は一目見て總立ちになつた。パンパン、忽ちひどく短銃の音。僕は鎧をしつかり踏みしめて佩刀を引ぬき、頭の上で揮り廻した。と、何者とも知れず矢庭に手綱持つ手に飛びついた奴がある。秋水一閃、僕はそれを美事袈裟がけに斬り仆した。ウームといふ凄い呻き聲を背後に聞いて僕はその場を駈けぬけ、と或る角を曲つた。と、蹄の音がして二人の騎馬武者が執念くもあとを蹤いて來る。振顧りざま、僕はその一人を斬つて落すと、ほかの一人は卑怯にも馬首を轉じて逃げ去つた。

かうして一分後には、僕はまつたくソアソンの町を離れた。さうして兩側にポプラが黒く影を落した夜の白い街道を、まつしぐらに馬を走らせた。しばらくの間追手の者らしい多くの蹄の音が背後に聞えてゐた。だが、それは次第次第に幽かになり、やがては自分の胸の鼓動の方が高く感ぜられるやうなつた。僕は馬をピタリと駐めて、耳を澄ませた。もう何の音も聞えなかつた。敵は追ふことを斷念めたものらしい。

さてそこで第一に僕は馬を下りて、「荒風」を傍の小さな森の中へ曳いて行つた。そこには潺々流れてゐる小川があつた。まづ水をのませ、身體中をやさしく慰つてやり、それから鞦のコニヤック酒でぬらした角砂糖を二つほど喰べさせた。なにしろひどく駈けつゞけたので、かれは弱り切つてゐたが、さすがに名馬の聞えをとつた丈けに、三十分ほど經つとすつかり元氣を回復して、僕はもう一ぺんその背に跨り、乘廻しをやつて見た上で、もしこれで巴里まで安全に着くことが出來ないなら、それは馬の罪では無いといふ確信を得た。

そこでまたポッ〳〵目ざす方へ歩きだしたが、進むにつれ今や自分はまつたく敵軍の重圍の中に居るのだといふ感じが次第に強くなつた。路傍の家の中からは醉拂つた普魯西兵の唄が聞えてくる。僕は人目にかからぬやう、野道の方を野道の方をと選つて行くのであるが、それでも一度は突然現れた二名の敵兵に誰呵をうけた。なにしろ獨逸語で、先方の云ふことは陳分漢であるが、僕は一向耳にとめぬ風で通り過ぎた。かれらは發砲したものかどうかとコツコツ相談してゐた體であつた。なにしろ月夜で僕の風體は頭の上から足の爪さきまでハッキリ見えるのだが、御方便なことに、我軍の驃騎兵と敵の驃騎兵

とは服裝がソックリ似てゐる。そのうちかれらは僕を匪の同僚位に判斷したのであらう。それなり默つて向へ行つてしまつた。

四、前には虎、後には狼

雲は悉く晴れて、カラリとしたいい月夜になつた。それからの途々、僕が幾度、あの最初ソアソンの町で出逢つたやうな敵兵の關所を危く潛りぬけたかと云ふことは、くだ〳〵しいから述べまい。なにしろ巴里までの道程の約半分來たと思ふころには、僕の劒の刄はすでにボロ〳〵になり、自分の身體も「荒風」の軀も敵兵の血で赤黑く染つてゐた。どんなに壯烈な鬪ひを僕がやりつつ進んだかは、それで大分想像がつかう。

森とした月夜の街道を「荒風」はスペイン娘の四つ竹踊のやうな蹄の音をさしてゆく。遠い夜空は、敵兵が今何處の村落を燒拂ひつつあるか炎々とした茜色で染つてゐる。前途を想へば千百の危難が横はつてゐるが、なんとなくしつとりしたい〻氣持だ。僕は軍人生活の樂しみは實にここに在ると思つた。そこで思はず右手に血刀を揮ひながら『佛蘭西國皇帝陛下ばんざアい！』とどなつて、カラ〳〵と獨りで大きく笑つた。

と、自分のその笑ひ聲の反響が終るか終らぬうちに、僕は行手の途の上にひとりの若い敵の士官が、馬に跨つて佇んでゐるのを認めた。それから士官の後手の四五間離れたところに、四五騎ばかり騎兵の影を見た。

『また來たなー一と思つてゐるうちに、今しがた自分の馬鹿げた笑ひ聲を聞きつけたらしいその士官は、先に立てヂリ〳〵と自分の方へ馬を近付けて來た。僕は計略を用ひて、わざとひどく萎れ切つた風を見せて、動かずにぢつとそこに立つてゐた。

（つゞく）

雨の夜更け（推薦）

岡本しな子

雨の夜更けは淋しいな
母さんぼんぼにねんねする
お猿の子供も淋しかろ
遠いお山の山奥は
雨と木の葉の音ばかり

水滸傳

妙な占者

宮島資夫

盧俊義は十臺の車に色々な貨物を積ませ、四五十人の人を連れ、李固を添へて先に家を出させてから燕青に向つて、

「お前は私の留守中に、何事もなく嚴重に取締つてゐてくれなければいけない。」と云ひつけました。盧俊義の夫人も出て來て、涙を流してその門出を送りました。

盧俊義は多くの人と一緒に車について諸所の景色を眺めて、大變喜びながら毎日進んで行きました。するとやがて燕青の云つたやうに、梁山泊の麓近く來ましたので、そこの宿屋へ泊りますと、その晩宿屋の人が來て、

「明日お立ちになるなら、これから先き八里で梁山泊の下になります。山陣の大將宋江と云ふ人は仁義の心の深い人ですから、無暗に人を殺すことはありませんが、然しなほ注意してお出でになる方がよろしいと思ひます。」と盧俊義に話しました。すると盧

俊義は笑つて、供の人にいひつけて、箱の中から四つの旗を出させて、宿屋の人に見せました。それには大きな字で、

『亂れた世を慨く北京の盧俊義が、貨物を携へて遠く故郷を離れて來た。思ふ所はたゞ惡者を捉へようとするにある。その時まさに男兒の志を表す事が出來るだらう。』

と太々と書いてありました。宿屋の主人はこれを見て、たゞ〳〵驚いてゐるばかりでした。

翌日盧俊義が、その四つの旗を前の車に立てさせて出發しようとしますと、李固が進み出て、

『こんな事をなさつては、必ず梁山泊の者におそはれます。もし强ておいでになると云ふなら、私をどうか先に故郷へ歸して下さい。その方が東岳泰山にお詣りなさるより、よつぽど功德になります』と恐る〳〵云ひました。

『腰拔の弱蟲が、何を云ふのだ。私は元來武藝を修めて萬夫不當の勇があると自分でも思つてゐるが、今日まで功名を現すときがないのを嘆いてゐたのだ。今梁山泊の者共が押よせて來たら、日頃の手並を現して自分の武藝を試して見たいと思つてゐる時に、汝のやうな弱音をふく者があれば、一刀の下に切り捨てゝ衆人の見せしめにするからさう思へ』と盧俊義が怒りましたので、李固も仕方なくしよぼしよぼとあとについて出發しました。

その日も午頃になると、漸く梁山泊の道にさしかかつて來ました。向うの方にはこんもりした林があり、四邊は狹い道で妙に寂しい所に來たと皆がびくびくしてゐますと、その林の中から怪しい口笛が、『ぴゆーッ』と聞えて來ました。

『そらつ』と云つて皆はもう青くなつて慄へ出した時、こんどは金鼓の聲がとう〳〵と響くと同時に、四五百人の小賊が『わーつ』と押しよせて來て、車の周圍をかこんでしまひました。するとまた林の中

で、合圖の響きらしい火藥の音がどーんと聞えたと思ふと、黑旋風李逵が二つの斧を廻しながら飛び出して來て、

『盧俊義先生、先日の可笑な童子の顏を覺えてゐますか』と云ひました。盧俊義は李逵を見ると大いに怒つて、

『私は久しく梁山泊の賊を捉へようと考へてゐて、今日漸くこゝに來たのだ。早く宋江を出して降參させればよし、もしさうでもない時には、汝等の首を一々刎ねてやるがどうだ』と怒鳴りつけました。

李逵は大口を開いて、『あはゝ』と笑つて、『あなたは吳軍師の計に中つて、とう〳〵こゝまで來たのに、まだ氣がつかないのですか。それが判つたら早く山陣に上つて、皆の仲間におなりなさい』と云ひました。

盧俊義は益々怒つて、物も言はずに鎗をふるつてつきかゝりますと、李逵は二つの斧をふるつて、しばらく戰つたと思ふと、すぐに林の中にぱつと飛び込んで姿を隱してしまひました。盧俊義はなほもたけつて小賊を追ひ散してゐると、一人の大きな和尙が、少しの手下を連れて向つて來ました。盧俊義はこれを見て、

『貴樣はどこから來た坊主だ』と云ひますと、

『私は梁山泊の豪傑花和尙魯智深です。今日軍師吳用の命を受けて、あなたをお迎ひに來たのですから、早く私と一緒に山陣に上つて下さい』と云ひました。

『何を無禮な事を云ふか』と盧俊義がついてかゝると、魯智深は鐵棒を持つて二三度相手になりましたが、すぐとまた逃げ出してしまひました。盧俊義は、

『えゝ弱蟲共ばかりだな、相手にならうと思ふ者は早く出て來い』と怒鳴りますと、行者武松が兩刀を振つて馳けて來て戰ひましたが、これも二三度でどこかへ逃げてしまひました。盧俊義は尙も賊を追ひかけて山上に上つて行きましたが、心附てふと振り返つて見ると、自分の車も人も、どこへ行つたか影も形も見えなくなつてゐました。流石の盧俊義も驚いて、小高い山に登つて四邊を見廻しますと、遙かの坂の下の方を、小賊共が多勢して奪ひ取つた車をどん〳〵押して行くのが見えました。李固をはじめ數十人の者共はもうすつかり縛られて　その後から

追ひ立てられてゐるそばで、小賊は鑼を鳴して面白さうに歩いてゐるのです。盧俊義はこれを見ると火のやうにくむつと怒つて、猛獣のやうに吼りながら坂を下つて追つて行き、やがて追ひつきさうになりますと、兩側の松林から、二人の大將が進み出て、

『盧俊義先生、何處へ進んで行かれますか』

と、叫びました。これは美髯公朱同と挿翅虎雷横の二人です。盧俊義は、

『汝等盗賊共、急いであの車と人を返せばよし、もし返さなければただ一鎗に突殺すがどうだ』と罵りました。

すると朱同は大いに笑つて、

『先生はもう、軍師吳用のために計の中に落ちてゐるのです。假令二つの翼があらうとも、免れることは出來ません。早く山陣に上つて、共に大義を行はれたが好いでせう』と云つたので、盧俊義は怒つて突きかゝりますと、二人はすぐに馬を飛ばせて逃げ出しました。今度こそこの一人でも殺さずにおくものかと、盧俊義はあくまで追つて行きますと、いつの間にか二人の姿が見えなくなつたと思ふ時、山の上で鑼や大鼓の音がするので、ふと振り仰いで見ると、黄い布に『天に代つて道を行ふ』と太々と書いた旗が現はれて、その下には宋江、吳用、孫勝などが、二百餘人の軍勢を從へて馬を並べて立つてゐました。これを眺めて盧俊義が益々怒つてゐる時に、吳用は一人進み出て聲を高く、

『盧俊義先生、先日は大變失禮しました。然しその時から今日まで、かうして苦心してあなたをお引よせしたのも、山陣の者が皆あなたの德を慕ふが故です。どうぞ怒りをやめて山に留まつて下さい』と熱誠をこめて云ひました。

けれども盧俊義は、

『汝等賊輩よくも我を欺いたな。必ず汝の首をはねてやるぞ』と怒り立てゝ進み寄つて來ました時に、

小李廣花榮　宋江の後から進み出て、

『盧俊義大人、さうみだりに自分の武勇にばかり誇るのをやめて、私の神箭を試みてごらんなさい』と云ふより早く、弓に矢をつがへてひようと放ちました所が、その矢は盧俊義の笠の纓を切り放しました。流石の盧俊義もこれに驚いて馬を回して走つて行くと、東の山の上に太鼓の聲が轟き渡つて、豹子頭林冲、霹靂火秦明が人馬を引いて切つて出で、これと同時

に、西の山蔭からも双鞭將呼延灼、金鎗平除寧が旗を振り喊をつくつて攻めよせて來ました。

盧俊義はこの勢ひに驚いて、いよ〳〵慌てゝ四方に馳けめぐりましたが逃げ出すやうな道もありませんでした。此時、漸漸日は暮れて、險しい山路はことに暗く、晝から食事もしない盧俊義は餓ゑ疲れて、へと〳〵になりながら、漸く小道を尋ねて走つて行きますと、林は深く露は滋く、益々苦しみは身に迫るばかり

でしたが、やがて林の中も辛うじて通り抜けると、前は芦や蘆の茂つた鴨嘴灘と云ふ水の邊りなので、盧俊義はいよ〳〵困つて、徒らに水の面を眺めて呆然としてゐるばかりでした。

その時向うの方の芦の茂みから、一人の漁夫が舟をこいでだん〳〵岸邊に近づいて來ましたが、盧俊義が呆然として暗い所に立つて水の面てを眺めてゐるのを見ますと、いきなり聲をかけて、

『あなたはまあ何と云ふ無茶な人でせう。こゝは梁山泊の麓で强賊共の棲です。夜中にこんな所をうろうろしてゐるのは、まるで災難に會ふ事を待つてゐるやうなものです』と云ひました。盧俊義は自分が梁山泊の者と戰つて來たことなどはかくして、

『私はつい道に迷つてこんな所へ來た者だが、私をお前の舟に乗せて、どこか安全な所まで連れて行つてくれないか』と賴みました。

『さうですね、陸を行けばこれから五六里行かなければ人郷はありませんが、船路で行けば一里位なものです。もしあなたが十貫文拂つて下されば、船に乗せて行きますが』と漁夫が答へました。

『それはお前が私を舟で渡して人家のある所へさへ連れて行つてくれゝば、十貫文よりもつとお禮をする』と盧俊義が云つたので、漁夫はすぐに船を岸につけて盧俊義をのせると、棹を張つてこぎ出しました。船は暗い水の面を悠々とすべつて行つて、やがて二十丁ばかり來たと思ふと、向うの蘆の茂げた中からまた一艘の船が出て來ました。船の上には二人の男が乗つてゐましたが、その中の一人は棹をさしながら、

『生れてこのかた詩書を讀む事を知らない。
それでも梁山泊の仲間に入つて暮してる。
いつでも弓矢を備へて猛虎を射るし、
香しい餌をまいて大きな魚を釣る。』

と聲も高らかに歌つて來ました。盧俊義は自分を虎か魚にたとへてゐる歌の心を察して、驚いて聲も出さずにゐました。するとまた一艘の船が漕いで來て、それにも二人の男が乗つてゐましたが、

『天と地とが私の丈夫な身體を作つてくれた。
生れつき人を殺すことが好きに出來てゐる。
一萬兩の黃金も欲しいとは思はないが、
たゞ玉麒麟を捉へる事ばかり希つてゐる。』

と大きな聲で歌ひました。盧俊義はますます驚いて、とんでもない船に乗つたと後悔してゐますと、また一艘の船が近づいて來て、こんどはたつた一人の男が船首に立つてゐましたが、

『蘆の花のこかげに漂ふ一艘の舟。』

と吳用が盧俊義の部屋の壁に書いた詩を、聲高に歌ひましたので、盧俊義は膽を冷して、舟底に小さくかゞんでゐました。さうして、自分は元來、水の中では思ふやうに働くことが出來ないのに、こゝでもし押しよせて來られては大變と考へると、漁夫に向つて、『おい〳〵、早く岸につけてくれ』と賴みました。すると漁夫は俄かに大きな聲で笑ひ出して、

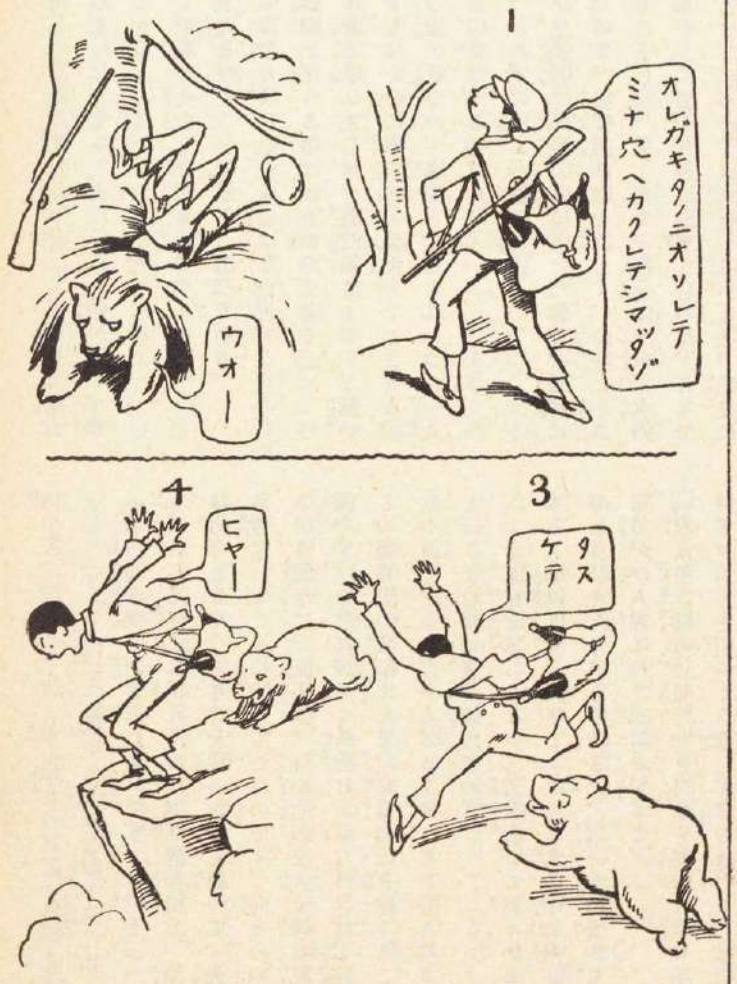
『盧俊義先生、何を云れるのです。本當を云へば、私は昔し潯陽江に住んでゐた混江龍李俊で、漁夫ではありません。あなたを捉へようと思つて、先刻から皆なしてこゝに待つてゐたのです。向うの船にゐるのも阮小二、阮小五、阮小七の三人で皆な私の仲間です。あなたが早く降參なさらなければ、空しくこの鴨嘴灘の底に沈んで、非業の死を遂げることになつてしまふのだから、よく考へてごらんなさい』

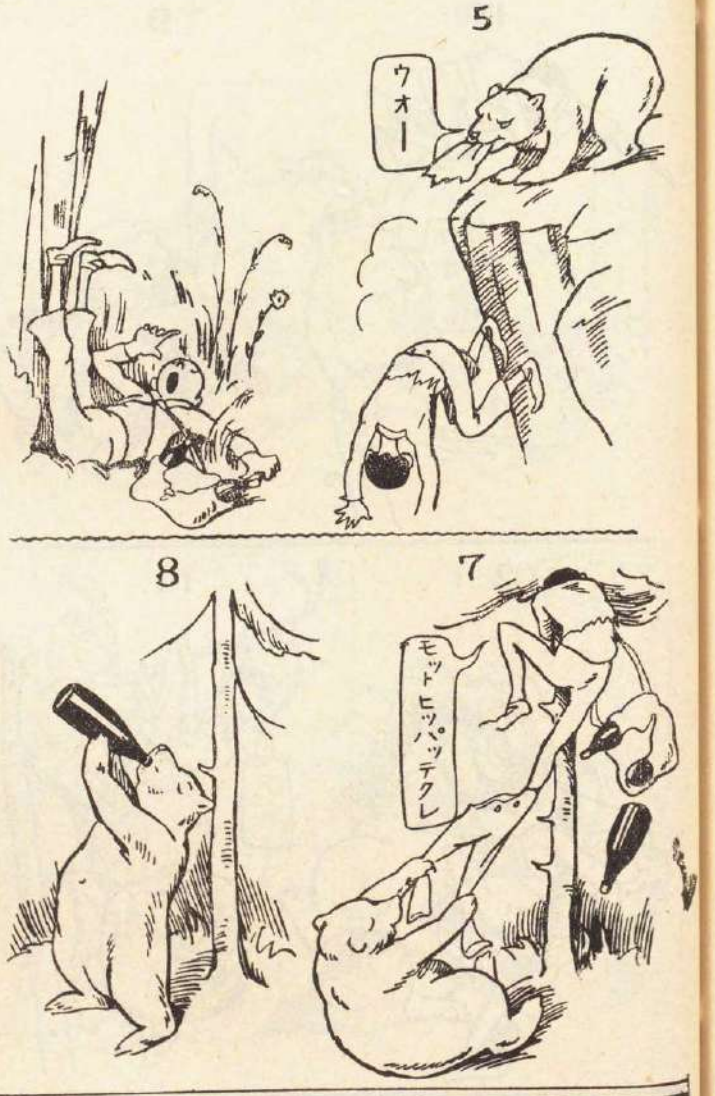
と云ひました。盧俊義は怒つて、

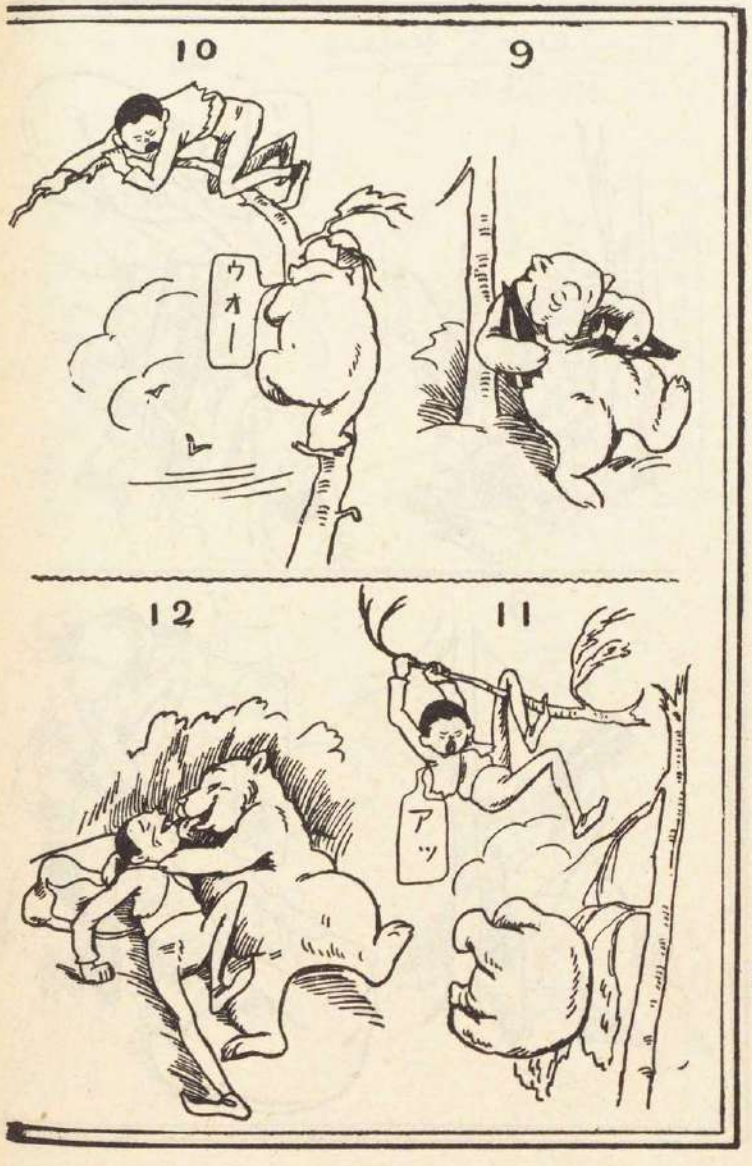
『よくも私を誑したな』と刀を拔いて斬りかゝりますと　李俊は身を飜してざぶんと水の中に飛び込んでしまひました。その時また、暗い水の底から眞白な男が一人現はれて來たと思ふと、

『私は浪白跳の張順だ』と叫ぶと同時に船に手をかけてざぶんと引つくり返して了ひました。（つゞく）

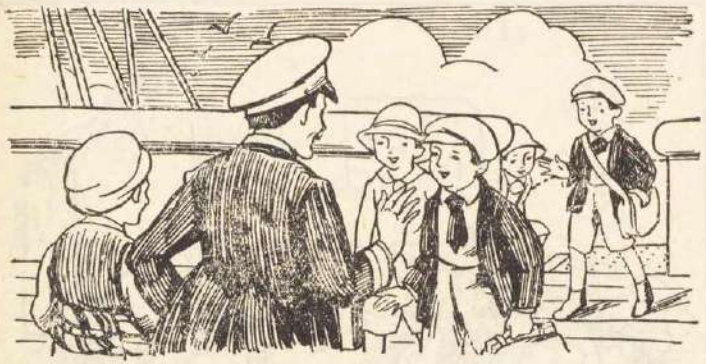
ムルヰフーロシホ
（巻の狩熊）






9
10
ウオー
11
12
アッ

13
グーグー
14
ジタバタスルナイ
15
マツ一ップクダクマ公モコブゴロダンスヲオボエタノカイ
イケドッタンダヨ
クマウナイチル
16
ホシチヤンコッチウチ
ホロークンバンザーイ
エライネー
バンザーイ



十五少年漂流物語

霜田史光

十五少年は何故船に乗つたか

太平洋と云つても隨分廣いけれども、それを北と南に分けてゐるその南太平洋で、一番大きな濠洲の南西の方に、かなり大きな二つの島があります。これをニュージーランドと云つて、氣候は恰度私達の日本のやうに穏やかで、緑色のよい處です。これはイギリスの領分であつて、その都のオークランドと云ふ街に、チエイマン學校と云ふのがあります。これは中々名高い學校で、その先徒はイギリス、フランス、ドイツ、アメリカなぞの白人種の子に限つてゐました。それもオークランド市の地主や銀行員や大きなお店の子ばかりでした。

このニュージーランドは、北島と南島の二つの大島の外に小さな幾つもの島があります。が、この二つの大島の間には狭い海峡があつて、こゝを通る船乗達は誰しも忘れることの出來ないほど景色のよい處で、これをクック海峡と云ひます。

北島のはづれは細長い牛分島のやうな形で、その頸の處は幅が僅かに二三マイルよりないのです。オークランド市はそこにあるので、この市のことを「南洋のコリンス」と云ふのは、ギリシヤのコリンスとその場所がよく似てゐるからです。

一千八百六十年一月十五日の午後、百幾人と云ふ生徒は、めい〳〵その親達につれられて、恰度籠の戸を開かれた小鳥のやうに嬉しさうに、チエイマン學校の門を飛び出しました。

この日はこの學校の暑中休暇の始めでしてこれから二ヶ月の間は生徒は思ひ〳〵に樂しく遊び暮せるのであります。中でも大層喜んだのは、十四人の生徒が長い間の願が叶つてニュージランドのぐるりを船で一廻りする事がいよ〳〵出來ることになつたことです。少年達の乘組うとするのは、その中の一少年の親ガーネット氏の所有であるスクーナー型のスロー號で、その美しい船に乘ることは少年達の胸をどんなに躍らせたことでせうか。

このイギリスの學校は生徒に自分達で何事もさせるやうな教へ方をするので、生徒はその心もその體も、ちきに立派に大人のやうにしつかりと育つてゆくのです。

チエイマン學校では級が五つに分れてゐて第一級第二級はほんのお坊ちやんですが、三級になると、もうイギリスの少年らしいしつかりした所が見えて來ます。そして上級の者は下級の者をよくいたはる代りに、下級生は上級生の爲めに朝飯を運んだり、着物にブラシをかけたり、靴も磨けば、用達しもずると云ふ風になつてゐます。若しこの習慣に從はないものがゐると、皆んなに憎まれて、一日も安心して學校にゐる事が出來ないのです。

スロー號に乘組んだのはこれらの生徒達ですが、その中へは五級生もゐれば第一級のお坊ちやんもゐるのでした。

ドノバンとクロースは二人共五年生で十四歳、そのお父さんはいづれも市の金持の地主で、二人は從兄弟同士です。ドノバンは生れつき怜悧で學問もよく出來るし、その上貴族のやうな勿體ぶつた所と偉がりの性質とがあつて、いつも人の上に立ちたがるので、皆は彼を殿樣ドノバンと云ふ綽名で呼ぶ位でした。でドノバンは自分と同級であるブリアンが皆の者から敬はれてゐるのを見て餘りよい氣持はしないのでした。クロースはその從兄ドノバンのすることに從つたり賛成したりするばかりで少しも目立たぬ少年です。

バクスターも同級同年で、市の大きな商家の子でした。もの靜かで考へ深く、勉强であつて、そして中々利口です。

ウェップとウキルコクスとは十三歳と十四歳、共に四年級で頭の點から云へば中位です。

ガーネットとサーゲキスは共に十三歳で三年生、ガーネットのお父さんは元は海軍の將校をしてゐた人で、サーゲキスのお父さんは外國から來た金持でした。ガーネットは手風琴が好きな上に上手で、暇さへあれば彈いてゐます。この航海に出かけるにも離さず持つて來た位です。サーゲキスは元氣のよい少年で危いことが大好きなのです。いつもロビンソンクルーソーの漂流記を讀んでゐるのでした。

次の二人は共に十歳で、センキンスはニュージランドの科學協會々長の子、イバーソンは牧師の子です。センキンスは三年生ですがイバーソンは二年生、二人とも歳こそ小さいけれども中々學問の出來るしつかり者です。

ドールとコスターは二人とも九歳ですが二人共中々の働り者です。ドールは頑固だし、コスターは大食ひです。二人共軍人の子で、一年生です。

この外にフランス人の子が二人とアメリカ人の子が一人ゐます。アメリカ人の子はゴルドンと云つて、歳は十五歳、一番の歳上です。五年生でドノバン程利口者ではないけれども級中での優等生です。幼ない時に父母に別れて他人の手に育てられた爲めか、考へ深くて落付いてゐます。フランス人の子は兄弟でプリアンとジャック、兄は十四歳、弟は九歳、そのお父さんは有名な工學士でいま北島で排水工事の監督をしてゐます。二年前にニウジーランドに來たのです。兄のプリアンは非常に利口で物覺えがよく、そして元氣で、友達に親切です。殊に下級生を可愛がるので皆から尊敬されてゐます。それとは反對に弟のジャックは三年生の中で一番學問の出來ない子です。サーヴキスと負けず劣らずの悪戯者で、級中での茶目公です。いつも次から次へと悪戯のことばかり考へてゐるのでした。けれども不思議なことには、スロー號が陸地を離れてからはさすがのジャックも性質が變つて、まじめになり餘りむだ口も利かぬやうになりました。一體ジャックはどうしてかうも急に變つたのでせう。

出帆の前の夜の出來事

スロー號は始めから十五人の少年達ばかりで海へ乘り出す筈ではなかつたのでありました。その乘組の船員は次のやうでした。

副船長　一人
水夫　六人
料理番　一人
給仕　一人（モコー）

そして船長としてはこの船の持主であるかーネット氏が自分でやることになつてゐました。ゴルドンが可愛がつてゐたフハンと云ふアメリカ產の獵犬も特別に乘せてありました。そして出帆は二月十五日の午前と決められてゐました。

その前の日の十四日の夕方には十四人の少年達はうち揃つて船に乘り組みました。船には副船長と給仕のモコーがゐて少年達を喜び迎へて呉れました。船長のかーネット氏は明朝の出帆の時に來ることになつてゐたので、人夫等は港へ遊びに行つて留守でした。やがて副船長は少年達を寢床へ送つてから、自分もお酒でも飲むつもりで水夫達の後を追つて上陸してしまひました。後にはモコーがぐつすりと寢込んでしまつたのであります。

所が、一大事が起りました。どうしてこんなことになつたのか解りませんが、船を結び付けてゐた纜がいつの間か解けて、潮の引くにつれて船はだん〳〵と沖の方へ辷り出してしまつたのです。所が夜が深くなつて月もない闇夜の中を陸の方から風が吹いて來ましたので、船は潮の力と共に益々沖へ〳〵と流されて、いつの間にか幾十町となく港と離れてしまひました。

モコーはふと眼が覺めた時、妙に船が搖れるなと、不審に思ひました。そして甲板に駈け出て見ると、この有樣に吃驚して大聲を上げました。その聲に驚いて、ゴルドン、プリアン、ドノバンその他の少年が寢床から飛び

起きて、モコーと一緒になつて聲を合せて助けを呼びましたけれども、その時はもう船は港を三マイル以上も離れて、オークランドの街の灯は暗に隱れて見ることも出來ません。

仕方がないので少年達はプリアンの云ふ事とモコーがそれに賛成したことゝで、帆を上げて岸の方に返さうとしましたけれども、帆は馬鹿に重くて少年達の力では中々掛けられませんでした。それにその爲めに船は却つて陸から遠ざかるやうな始末でした。やがて船は岬を廻つてニウジーランドを五マイルも離れた太平洋に出て了ひました。若しこのスロー號の流れ出したことを知つて探しに來る船が追ひかけて來たとしても、こんな闇の中では中々見つかりさうもありません。その上、さうした船が追ひかけて來る間にはスロー號はもつと先へ流されてゐるでせう。たゞ望みとするのは外國からニウジーランドに向つて來る船に出遭つて助けて貰ふことです。それで、モコーは前甲板の上に燈火を掲げて、遠くからこれが見えるやうにしました。

その時前の方に、一點の光が見え出しました。その光の白いのは航海中の汽船であることの證據です。間もなく青い光と赤い光とが見え出しました。それは汽船が眞直にスロー號に向つて走つて來るものと思はれます。少年達はもう助かつたと云ふ氣でどんなに喜んだでせう。少年達は摩を限りにその汽船に向つて助けを喚びましたけれども、風や浪の音と、蒸氣機關の音とでとても聞えさうもありません。その上、どうしたはずみか、モコーが掲げて置いたランプの綱が切れてランプは海の中へドブンと落ち込んでしまひましたので、その汽船はすれ〳〵になる程近くスロー號に近づきながら、一時間十二三マイルの速力で通り過ぎてしまひました。

少年達はどんなに落膽したことでせう。船は益々東の方に吹き流されました。夜が明けると天氣は前の晩よりもモット荒れ模樣で、風と浪は益々激しくなつて來ました。船はどん〳〵東の方に流されます。

この少年達の中で、プリアンは少しばかり航海のことを知つてゐましたので、年に似合はず勇氣を出して皆の者の運命を背負つて立

つほどの役目に立ちました。彼ぼ船がひつくり返らないやうに防いだり破れた所を直したり、また日も夜も甲板に立つて海の上を眺めては助け船を見出さうとしてゐたのでした。それに幾度となく嵐の中へ自分達の災難のことを書いては海に流したりなぞしました。

かうして幾週間となく海の上を流され歩いたのであります。けれどもいつまでたつても止まない西風は、スロー號を東へ〳〵とどんどん流してしまひました。

その上ニウジーランドを出てから幾日もたぬに、大暴風雨にあつて船はさん〳〵な目にあはされました。

それから後のことは、始めの方で皆さんが讀んだ通りであります。

ボートを見つけた！

お話し更つてスロー號の船の上でブリアンがやつと皆の者をなだめて、自分はしきりに望遠鏡で陸の方を見てゐた時でした。

舳の方にあたつて、皆の者を吃驚させるやうな叫び聲が起りました。ブリアンは何事かと思つて駆け寄つて訊れますと、見慮にゐたバクスターが、前の晩浪の爲めに浚はれたと思つてゐたボートの一隻が、舳のやり出しの柱の間にはさまつてゐたのを見つけたのでした。ボートは僅かに五六人の人を乗せるに過ぎないほどの小さなものでしたけれども、今これを見出したことはブリアン達をどんなに喜ばせたことでせう。

所がこれの爲めにドノバンとブリアンの間にまた爭ひが起つてしまひました。

ドノバンはボートの無事であるのを見るとすぐ、ウキルコクス、ウエッブ、クロースの三人と共にそれを海の上に下さうとしました。それを見たブリアンは駆け寄つて、

『君達は何をするんだい。』となじりました。

『何をしようと僕達の勝手だ。』

『君達はこのボートを下さうと云ふのか。』とウキルコクスが云ひました。

『さうだ。それがどうした。君にそれを止める權利があるとでも云ふのか。』と今度はドノバンが角だゝて詰めました。

『大ありだ。君達は他の諸君を振り棄てゝ自分達だけとは——』とブリアンも同きになつて云ひ寄りました。

『何も振り棄てゝなんか行くもんか。僕達が上陸してから一人だけ漕ぎ歸つて、他の諸君を乗せて行けばいゝぢやないか。』とドノバンの言葉の終らぬ中に、ブリアンは早口に、そして荒々しく、

『だけど君、漕ぎ歸ることが出來なかつたらどうする。岩に打當つて碎けたらどうする。』

所へウエッブが出て來て、

『君は退きたまへ。』とブリアンを壓し退けようとしました。

『何、退くもんか。ボートはまづ小さい者から乗せてやらなきやいかん。』と云つて決して負けようとはしませんでした。

若しこの時ゴルドンが出て來て仲裁しなかつたら、ドノバンの組とブリアンの組とは喧嘩をしてしまつたに違ひないのです。然しゴルドンは一番年上であり、また考へ深いので心の中ではブリアンの說に贊成しましたけれども、ドノバンをなだめて、このやうな光浪の時はボートを下してもボートが危いばかり

でなく、命まで危いと云つて聞かせましたので、ドノバンもやつとボートを下すことを思ひ止まりました。

『潮が滿ちて來るのは何時頃だらう。』

『さうさ、十一時頃だらうかね。』

『ぢア恰度いゝ、今から食事をして、上陸の用意をしよう。事によると氷がなければならぬ所もあるかも知れない。食べたら少し休んでからでないと泳ぐには工合が惡いからね。』

二人はかう云つてやがて皆の者を集めてジャムとパンを少しづつ朝飯をやりました。食事の間もブリアンはセンキンス、イバーソン、ドール、オスターなぞの年下の者を見守つて餘り大食ひをしないやうに注意しました。

ゴルドンはブリアンに訊れました。

『スロー號の座礁したのは六時頃だつたと思つたね、ブリアン君。』

『さうだ。』

ブリアンの冒險

潮の退きかたは隨分のろいやうですが、でもだんだんと減つてゆくやうで、船の傾きはだん〳〵ひどくなりました。然し、モコーが測量綱を垂れて測つて見た所によると、船側の所がまだ八尺も海水がありました。

ブリアンは考へました。風が潮の退くのと反對に吹いてゐるから、事によると潮はすつかり干るやうなことはないかも知れない。しかし、若し明日の干き潮の時まで待つとすると、船はその間に滿ち潮に遭つてひつくり返るか、碎かれるかしないとも限らない。だから、今一番よい方法は誰かが綱をもつて岸に行き、濱の石にそれを結へてこの船を滿ち潮の時引きよせるのがよい。——かう思つたのでブリアンはゴルドンにその考へを話しました。そしてゴルドンも贊成しましたので、ブ

リアンは進んでそのむづかしく危い役目を自分が引受けたのでした。

それをする前プリアンは、船中の浮蟲を皆とり出してそれを年下の少年達に渡しました。それは若しも船がひつくり返つたり碎かれたりした時に助かる用意なのです。

十時を十五分も過ぎた頃となりました。もう一時間もたてば潮はこれきりと云ふ所まで退いてしまふでせう。しかし舳の下ではまだ海水が四五尺の深さはあります。たとひこれから一時間たつたにしてもこの上五六吋も退く位なものでせう。見ると船から三十間も先の方は海の水が黒すんでゐるし、所々に岩の頭が出てゐるのは淺くなつた證據と思はれます。だから若し今行くとして一番むづかしいのは、船からその三十間ばかりの間です。

プリアンは意を決して外衣をぬぎ、可成太い綱を自分の胸の邊に結びつけました。ドノバンなぞの反對連も、プリアンがこの危い所を行つて皆の者の爲めにならうとするのを見ては流石にぢつとしてもゐられず、その綱を繰り出す役目を引受けました。

用意は出來た。これでプリアンは海の中へ飛び込みさへすればよいのです。

『兄さん、行つちや嫌だよ、嫌だよ。』と弟のジヤックは泣き聲を立てながら云ひました。

『心配することはないよ、ジヤック。』と云つてプリアンはもう海の中へ身を躍らしてゐました。そして拔手を切つて泳ぎ始めました。

所が、まだ大分强い風は干き潮に逆つて吹いてゐるので、水の上に凸凹に頭を出してゐる岩に激しく當り碎けて、渦を卷いてゐる所さへありますので、プリアンは綱を引いてゐるし、泳ぐにはむづかしいので、だん〳〵と身が疲れて來たものか、一つの大きな渦の中に卷き込まれたと見えましたが、

『助けて――助けて――』と云ふ聲を遺したきりで船からは、もう姿も見えなくなつてしまひました。

これは大變、と思つたゴルドンは皆んなと一緒に綱を手ぐり寄せて、氣を失つてゐるプリアンを船の上に上げました。間もなくプリアンは息を吹き返しましたけれども、その爲めに海岸へ行かうとした事はとても出來ないと云ふ事になつてしまひました。

神樣、助けて

やがて午頃になつてしまひました。潮は今度は反對にだん〳〵滿ち出して、浪も荒くなりました。すつかり潮が滿ちた時には船は今の暗礁から浮び出してそれよりも高い岩につき當つてひつくり返るか、碎かれるかしてしまふでせう。あゝ困つたことだ。どちらにしても少年達の命は助からうとは思はれません。けれども今はもう、どうしようもありませんので、少年達は船尾に集つて潮がだんだん滿ちて來るのを、冷々しながら見てゐるより外仕方がなかつたのであります。

所がそれにも增して不幸なことは一度北に廻つた風がまた西に戻つて、滿ち潮の勢と共に岸の方に船を投げつけようとしてゐます。もう駄目だ。――と思ふ心は少年達の皆の胸に起りました。そして今はたゞ神樣に萬一の助けを祈願ひするより外ないと、泣いて祈る聲は風や浪の音と一緒に天にまで響くかと思はれました。（つゞく）

瞳の小人

豐島百合子

支那のある町に士方棟といふ人がゐました。或る朗らかな日のことで、士方棟は書物を讀んでゐましたが、倦きがきたので、本を投げやつて、ぶら〳〵郊外へ散歩に出懸けました。

途中で、美しい刺繍のしてある幌をかけた小さな車に出逢ひました。その傍には、二三人の婢が馬に乘つてついてゐましたので、方棟は貴夫人の車だなと思ひました。で、いつもの物好き癖が出て、どこの夫人がのつてゐるのだらうと思ひ乍ら、車の傍近く寄つて行きました。すると丁度その時、幔が開いてゐましたので、中を覗いて見ますと、十六位の美しい女が坐つてゐました。

方棟はその女があんまり美しいので、ぼんやり眺めてゐますと、中の女は嫌な顏をして、傍の婢を呼びました。

『お前、簾をおろしておくれ。へんな人がわたしをじろ〳〵のぞいて見てるから……』と云ひました。

婢はすぐ籠をおろしましたが、大變腹を立てゝ、方棟の傍に來て云ひました。

『一體このお方を誰だと思つてるんだえ。このお方は、芙蓉城の七郎さまのお嫁さまだよ。こゝいらの田舍娘と同じやうに思つて、ぶしつけに失禮なことをすると、そのまゝにはして置かないから。』

さう云ふが早いか、砂をつかんで、パッと方棟の顏へ投げつけました。

方棟は驚いて顏をそむけましたが、砂は一ぱい顏にかゝつて、眼も口も開けられませんでした。方棟はすぐ手で拂ひのけましたが、眼に何か入つてゐるらしく、痛んで開けられませんでした。しばらくして眼を拭ひますと、左の眼がうすうす開きましたので、見るともうその時は、車も馬もどこへ行つたか見えなくなつてゐました。方棟は、

『馬鹿な目にあつたもんだ。』とたいへん後悔しました。

しかし、どうも眼が痛むので、散歩をやめて家へ歸りました。方棟の奥さんは、方棟が眼をつぶつて痛さうにしてゐるので、

『どうしたんです？』と心配さうに訊ねました。

『いやなに、今そこで砂を浴せられたので、眼が痛んでたまらないのだ。』と方棟は答へました。

『一寸見て上げませう。どうなつてゐるか。』

奥さんは方棟の瞼を開けて見ました。と、瞳の上に小さな翳が出來てゐました。

『あなた、瞳の上に小さな翳がかゝつてゐますわ。痛むでせう。』と云ひました。

『うん！』方棟はうるささうにうなづきました。

『明日になると治るかも知れませんよ。』

奥さんは慰めるやうに云ひました。

方棟は痛みをこらへて、その晩は眠りました。あくる朝になりましたが、よくなるどころか、痛みはます〳〵ひどくなつて、涙がボロボロとこぼれ出して來ました。

『どうです？』と奥さんが心配して訊きました。

『痛くつてたまらん、どうしたのだらう。』

また瞼をひらいて見ると、翳はだん〳〵大きくなつて行くやうでした。

『困りましたね。水で冷して見ませうか。』

奥さんが云ふので、水で冷してみましたが、痛みはとまりませんでした。三日ばかりたつと、翳は五厘錢位の大きさになりました。そして右の瞳にはいつぱい旋螺が出來てゐました。方棟は困つて、いろんな眼藥を買つて來てつけてみましたが、一寸も効能がありませんでした。そして痛みは強くなるばかりで、死ぬかと思ふ位苦みました。

方棟は途方にくれてゐますと、或る時友達が來て、光明經を唱へると、よくなるといふことを教へてくれました。方棟はたいへん喜んで、お經の本を買つて來て、教へて貰ひ乍ら唱へました。はじめの間は、お經を誦むどころではなく、痛みのためにいらいらして、落着きませんでしたが、根氣よく誦んでゐるうちに、だん〳〵氣が鎮まるやうになり、痛みに耐へられるやうになりました。

方棟は一日坐つたきりで、たゞ珠數をつまぐり乍らお經を誦んで日を過しました。さうして一年ばかり經つたときには、すつかり落着いて、すべてが靜かに思はれて來ました。

或日、方棟がぢつと坐つてゐますと、右の眼の下で小さなつぶやきが聞えました。

『まつくらでたまらん。くるしい、くるしい。』と誰か云ひます。するとすぐ左の眼の中で、

『君、一寸散歩しに行かないか。僕も氣持が惡くつてたまらん。』と返事をしました。

間もなく、兩方の鼻の中がむづ〳〵して、何か鼻の穴から出て行つたやうです。が、間もなく歸つて來て、また鼻から瞼の中に入りました。

しばらくすると、
『惜しいことに、庭の珍珠蘭が枯れてしまつたね。』
と眼の中で聲がしました。
――方棟は珍珠蘭が大へん好きだつたので庭へたくさん植ゑて毎日水を灌いで大切にしてゐましたが、眼が見えなくなつてからは、しばらく關はずにゐたのでした。――
方棟はそれを聞くとびつくりしました。そしてあわてゝ奥さんを呼びました。
『どうして蘭を枯してしまつたのだ。あれは私が大切にしてゐたのぢやないか。』
方棟は怒つてさう云ひますと、奥さんは何も知らないものですから、めんくらつてしまつて、
『あなた、どうしてそれがおわかりになります。』と不思議さうに訊ねました。
『どうもかうもない。ひとが折角大切にして育てゝゐたものを枯してしまつて…』
と、方棟はぷり〳〵怒つて、返事も碌にしませんでした。
奥さんはさういふことはない筈だがと思ひ乍ら庭へ出て見ました。すると方棟が云つたとほり、蘭は枯れてゐました。奥さんはどうして知つてゐるのか不思議に思つて、丁寧に詫びてそのわけを訊ねました。すると方棟は、やつと機嫌を直して話しました。
奥さんはわけを聞いて、大變不思議がりました。
『こんど出ましたら、一つどんなものか見てやりませう。』さう云つて、部屋のうちにかくれて待つてゐました。
すると間もなく、鼻の中から小さい〳〵豆よりも小さい人が二人出て來ました。そしてちよこ〳〵と門を出て、どこかへ行くやうでしたが、すぐ親しさうに腕を組み合せて歸つて來ました。それから顔へ飛び上つて、鼻の穴へ入つてしゃひました。
二三日經ちますと左の方が右の方へ云ひました。

『ねえ君、隧道は廻り遠くて困るね。そして非常に不便だよ。だから門を開いて二人一緒にならうぢやないか。そしたら始終一緒にゐられていゝと思ふがね』
すると右が云ひました。
『それはいゝ。だが僕の方は壁が厚くてね。』
『ぢやあ、僕が君の方へ行かう。』『さうかうするうちに、左の瞼がひつかくやうにちかッ！ と痛みました。
『おゝお……いたい。』
方棟はぼろ〳〵涙をこぼして思はず叫びますと、奥さんが飛んで來て心配さうに、『どうしました？』と訊ねました。
方棟はひよいと眼を開けて見ました。とどうしたことでせう、今まで何も見えなかつたのに、今ははつきり机の上のが見えます。方棟は喜びました。
『おゝ、左の眼が開いたよ。』と云ひますと、奥さんもうれしさうに、
『さうですか、それはよござんすわ。』と云つて、方棟の眼をのぞいて見ました。すると左の脂膜に小さな穴があいて、黒い瞳が熒々と光つてゐました。
あくる日になると、翳がすつかり消えてしまつて左の眼の瞳が二つになりました。が、右の眼はもとの通り翳がかゝつてゐました。
方棟は一生涯片目でしたが、二つ瞳があるので、兩眼の人よりはよく眼がきゝました。（をはり）

山の向う

若山牧水

山の向うは
越後の國か
うちの婢やの
うまれた國か

越後ゆきたや
雪見たや

孫悟空と牛魔王（つゞく）

楠山正雄

前號の梗概。悟空は三藏法師のお伴をして西の方印度へ行く途中、火焰山の麓まで來ますと、山中一面の焰で通ることが出來ませんので、火を消す芭蕉扇を羅刹女のところへ借りに行きましたところが、羅刹女の怒にふれて、芭蕉扇で大空高く吹き飛されてしまつたのです

悟空は山の上に落ちしなに、したゝか岩角にうちつけた腰をさすりながら、

『あゝ痛い、あゝ痛い。あの化け女めひどいことをしやがつた。こんなひどに目に會つたことはない。一體こゝはどこなのか知ら。』

かういつてそこらを見まはしますと、そこに石の柱が立つてゐて「小須彌山」と書いてありました。

『何だ、恐しく遠いところまで來たものだな。小須彌山といへば、靈吉菩薩のおいでになる山だ。よしあの菩薩をたづねて芭蕉扇を取る工夫を聞いて見よう。』かうひとり言をいつてゐると山の下から鐘の音がかん〳〵響いて來ました。悟空はその音を目あてに山をおりて行きました。

靈吉菩薩のお寺をたづねて、菩薩にお目にかゝつて、羅刹女のために芭蕉扇で扇とばされたことや、こゝから火焰山までの道のりをたづねますと、菩薩

はお笑ひになつて、

『あの芭蕉扇は大昔宇宙が開けた時、混沌の中からひとりでにでき上つたものだ。天地の水が一つに凝つて出來た寶物だから、よく火を消す力がある。そして一度扇げば八萬四千里の先まで吹きとばす。それを火焰山から五萬里のこの山で止つたのは、お前に雲を止める技があるからだ。』と仰しやいました。

『どうも弱りましたね。何か工夫はないでせうか。』と悟空が云ひますと、菩薩は考へて、

『さあ、釋迦如來から昔わたしが頂ておいた寶物の中に定風丹といふものがある。あれを持つてゐれば、いくら扇がれても吹きとばされる氣遣ひはない。』といつて定風丹を出して悟空にお授けになりました。

悟空は押頂いて襟の中にしつかりぬひこんで、菩薩においとま乞ひをすると、觔斗雲に乘つてまた〳〵く中に翠雲山にとつて返しました。

さて羅刹女は、『あの惡猿め、あゝして吹きとばしてやつたから、いま頃はどこぞの海に溺れてゐるか、谷底に落ちて岩に頭でもぶつつけてゐるだらう。』と思つてゐますと、急に表ががやがやしだして、そこへ腰元があたふた駈けこんで來て、

『奥さま、大へんでございます。きのふの猿がまたやつて來ました。鐵の棒で御門をいまにも、うちこはしさうに叩いて、あけろ〳〵芭蕉扇を借りに來たぞとどなつてをります。』といひました。

羅刹女はぎよつとしました。

『またどこまでしぶといわる猿だらう。八萬四千里の道をよくも一晩で歸つて來たものだ。よし〳〵こんどは、二三度つゞけて扇いで二度と歸れなくしてやらう。』かういひながら身づくろひして、また二本の寶劍を振り〳〵出て行きました。でも洞の外にとび出して行つて、二太刀三太刀わたり合ふが早いか、もうさつそくかなはなくなつたので、芭蕉扇を取つて一扇ぎしましたが、どうしたものかこんどは、

悟空はびくともいたしません。これはいけないと思ひながら、二度扇ぎますと、やはり平氣で笑ひながら棒を持つてうつてかゝらうとします。羅刹女はあわてゝ五六べんつゞけざまにばた〳〵扇ぎましたが、てんで手ごたへがないので、驚いて芭蕉扇をかついだまま洞の中に逃こんで殘らずの門をぴし〳〵閉てしまひました。

悟空は門をしめられてしまつたので、まづ大切な定風丹を襟の中にしまひこんで、一ゆすり體をゆすると小さな蟭蟟蟲になりました。そして門の隙間からくゞつて中へ入つて見ますと、羅刹女は額から湯氣を立てゝはあ〳〵息を切りながら、

『あゝのどがかはいた。早くお茶を持つといで。』とどなつてゐました。やがて腰元が持つて來た茶椀を見ると泡がういてゐましたから、悟空はいち早く泡の下にとびこんで泡と一しよに羅刹女ののどの中にすつ〳〵とはひつて行きました。そして羅刹女のお

なかの中に飛込とさつそく本身を表して大きな聲で

『ねえさん、芭蕉扇を貸して下さい。』とどなりました。羅刹女はびつくりして青くなりながら、腰元に向つていひました。

『お前表の門はしめたらうね。』

『はい。』

『門をしめたのにどうしてあいつは内の中に入つて來たらう。』

『まあ奥さま、内の中どころかあなたのお體の中から聲が出るやうですよ。』

するとその時、悟空が腹の中から、

『全くそのとほりあなたの腹の中にゐるのですよ。ゆうべは一晩中風に吹きとばされてゐて、おち〳〵休めなかつたから、これからゆつくり手足を伸ばすつもりです。』といひながら大きなのびをして、手足をうんとつつぱりました。羅刹女は痛い〳〵と叫びながら、ころげまはつて苦しみますと、悟空はよけい面白がつて腹の中で逆立をしたり、蜻蛉返りをしたりあばれまはります。とう〳〵羅刹女は情ない聲を出して、

『あゝ苦しい、死んでしまふ。芭蕉扇は上げますからどうか命だけは助けて下さい。』といひました。そこで悟空は羅刹女が腰元にいひつけて芭蕉扇を持つて來させるところを咽喉の穴からのぞいて見ておいて

『よし、それでは出てやらう。』といひながらまた蟭蟟蟲になつて口からとび出しますと、また元の姿にかへつて芭蕉扇を受取るが早いか、さつさと雲に乗つて、もとの村へ歸つて行きました。

悟空のもつて來た芭蕉扇を見て、おぢいさんも芭蕉扇はたしかにこれだといふので、これさへあればもう大丈夫だとみんな大よろこびで出立しました。やがて四十里ばかり行きますと、どん〳〵あつくなつてもう意地にも我慢にも足の裏が燒きつくやうで一足も歩かれなくなりました。悟空は三藏に向つて

『お師匠さま、しばらく馬をおりて待つてゐて下さい。わたしがこれで扇ぎますから、やがて火が消えて、風が起つて雨が降り出したら、その山を越えて天竺に向つて行くことにしませう。』

かういひ〳〵悟空が芭蕉扇を出して、一扇ぎしますと、どうしたことか火は消えるどころかよけい大きくなつて、一度扇いで十丈の高さになり、二度扇いで百丈の高さになり、三度めには千丈の高さになつて、頭の上から長いまつ赤な舌をべろ〳〵出して見る〳〵四人をなめつくさうとしました。悟空は兩方の股の毛をのこらず燒かれて、あッつ〳〵いひながら三藏たちに『早くおにげなさい、早くおにげなさい、火がもえて來ます。』と叫びました。みんなはあわてゝ三藏を鞍の上に押し上げて、あたふたもとの道へ二十里あまり引ッ返しました。そして、ほつと一息をつくと、悟空はいま〳〵しさうに扇を地びた

にはふり出して、

『やあ、おどろいた。やあ、おどろいた。うま〳〵あいつにだまされたぞ。』といひました。

『おい一體どうしたのだ。』と八戒はいひました。

『どうもかうもない。扇げば扇ぐほど火が大きくなつて、もう少しで體中の毛を殘らず燒かれてしまふところだつた。』と悟空はくやしさうにいひました。

『かう火が大きくなつては、西へ行く道はまるつきりふさがつてしまつたが、どうしたものだらう。』と沙悟淨はいひました。

『まあ火のないところを探して行くことにするのだね。』と八戒はいひました。

『どつちへ行つたら、火がないだらう。』と三藏がたづねました。

『東の方も南の方も北の方もみんな火はありませんよ。』と八戒が答へました。

『お經をもらひに行くのは、どの方角だつたつけね。』と三藏がたづねました。

『それはお經は西の方にあるにきまつてゐます。』と八戒がいひました。

『わたしは何でもお經のある方へ向つて行かうと思ふのだよ。』と三藏がいひました。

『お經のあるところには火があるし、火のないところには、お經もないし、これでは行くことも歸ることも出來ないぢやないか。』と沙悟淨がいひました。

こんなことをみんな、がや〳〵いひあつてゐますと、ふとうしろで聲がして、

『皆さん、さうやきもきなさるには及びませんよ。それよりかまあお齋飯でも上がつてゆつくり御相談なさいまし。』といひました。四人が振り返つて見ると、一人のおぢいさんが、赤銅の鉢を頭にのせた子供をつれて出て來ました。おぢいさんは丁寧にお辭儀をして、

わたくしはこの火焰山をあづかる土地神でござい

ますが、皆さんにお齋飯をこしらへて持つてまゐりました。どうぞ召し上がつて下さい。』といひました。

悟空はその時鉢に入れた御飯を受け取つてたべながら、『それは有難う。ところで一體この火はどうしたら消せるだらうね。芭蕉扇を借りれば消えるといふから、やつとのことで借りて來て扇げは、却つて火が大きくなつて、ひどい目にあつた。』といひました。そして往來にすてた扇を拾つて見せますと、土地神が見て笑ひながら、『はゝは、これは本物の芭蕉扇ではありませんよ。』といひました。

『何だ、にせか。するとどうしたら本物の扇が手に入るだらう。』と悟空がたづねました。すると土地神はまた笑つて、『さあ、それには、大力王をお頼みにならなければなりません。』と申しました。

大力王といふのは誰のことをいふのでせうか。お話はこれから面白くなるのです。（つゞく）

アルデルセン傑作童話

小さなマツチ賣りの娘……吉江孤雁
火打箱と兵士……加藤朝鳥
大助小助……西川勉
豆の花……秋庭俊彦
甲蟲の自慢……中島孤島
親指姫……齋藤佐次郎
赤い靴……馬場孤蝶

小さなマッチ賣の娘

吉江孤雁

何といふ寒さだらう、それに雪はしつきりなしに降つて來る。ちら〳〵、ちら〳〵と雪片はせはしさうに地面へおちないうちに、互につかまへようとして、追掛つこをしてゐる。そして、とう〳〵互につかまへると、一緒になつて、うすい雪の幕となつて暗い冷い世界の上を覆ひつゝむ。

實際、寒いことも寒いが、また暗さも暗かつた。

『何といふ暗い、そして寒いことだらう』と可哀さうな小さなマッチ賣の女の兒は、冬の町を彼此此處上へ下へ歩き廻りながら思つてゐた。

その兒は、自分の家だと呼んでゐる冷たい屋根裏の部屋を出た時は、上靴を足にひつかけてゐた。その上靴は母親のものだつたので、この兒にとつては大きすぎた。二臺の荷馬車が來たので、それを避けるために、急いで路を横切つた時に、その上靴はぬげてしまつた。

片方は何處へいつたかつひにわからなかつた。もう一つの方は、或る男の子が拾つて行つてしまつた。その男の子は、これは人形の搖籃にはもつて來いだと思つた。

そこで、最早やその女の兒はまつたく跣足になつてしまつた。そしてその足のまた冷たいことゝいつたらなかつた。それを見つめても、自分の足だか人の足だかわからないくらゐだつた。寒さがくひ込んで足は赤く青くなつてゐた。

大晦日の晩だといふのに、その兒はまだマッチを少しも賣つてはゐなかつた。一箱も賣つてはゐなかつた。思ひ切つてその屋根裏の家へ歸ることも出來なかつた。まだ一文もまうけてはゐないので、父親がきつとなぐりつけるにきまつてゐた。

可哀さうなその兒は、腹がへつて、凍えて、身をひきづつて歩いてゐた。

その兒の綺麗な長い頭髪は兩肩にまつはりつき、雪片はその悲しげな小さな顏のまはりを花冠のやうにくまどつた。けれどその小さなマッチ賣りの娘は自分の卷き毛のことも、雪片のことも考へなかつた。

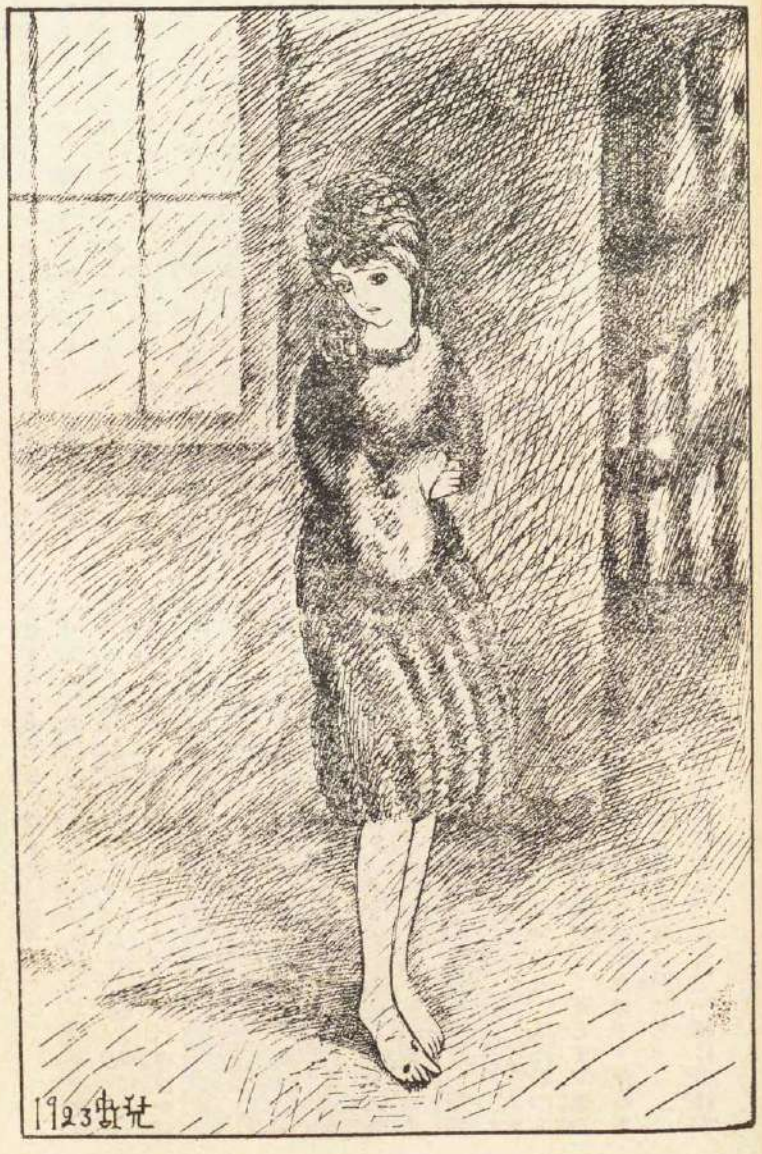
それは大晦日の晩であつた。美しく輝く家々の前をそろ〳〵悲しげに通つて行きながら、その小さなマッチ賣りの女の兒の考へたことはそれであつた。

大晦日の晩！　彼女は窓々を透してちら〳〵輝く火の光を見た。彼女は香氣を嗅いだ——それは燒鳥だらうか。彼女はひもじさにそんなことを思つた。たゞ一目でも、火光と御馳走とを見ることが出來ただけでも、彼女は滿足したでもあらう。

彼女は手に、マッチの小さな一束をもつてゐた。そのぼろ〳〵の前垂の中にはもつと澤山はひつてゐた。その兒はどんなにか、それで火を點して見たかつたことだらう。

その小さな女の兒は二つの家の間に、ちよつとして身を隱くす場處を見つけた。そして其處へ坐り込んだ。彼女はその兩足を、その哀れな小さな、赤く青くなつた兩足をそろへて、ぼろ〳〵の衣物の下で重ねて、どんなに溫めようとしてもだめであつた。

兩手もまた寒さでほとんど凍えてゐた。その兩手を暖めるために、一本のマッチで、ほんのたゞ一本のマッチで火を點すことが出來たならば、どんなに



よからうか。

彼女はその一本をとり出した。そして壁へ擦つて火を點した。まあ、何といふ悦しいことだらう！明るい赤い炎が輝き出した。彼女はその上へ小さな冷たい兩手を差しのべた。そのちッちやな炎がその兒には大きな火焔のやうに思はれた。これは魔術のマッチだらうかとその兒は思つた。

それぱかりではない！　それが燃えつゞけてゐる間、彼女は大きな爐の前に坐つてゐた。その爐の中には美しい火が燃えたり、炎はその小さなマッチ賣りの娘を歡び迎へるやうに、をどり上つた。

彼女はその小さな冷たい足を、輝く火焔の方へ伸ばした。と思ふと、その時、炎は消えてしまひ、爐はなくなつてしまつた。その小さな女の兒は、手に燃えつくしたマッチを持つて、冷たく、陰氣さうに坐つてゐた。

彼女は、可哀さうに、またさうせずにはゐられなくなつて、もう一本のマッチをとつて、そして壁へ擦つた。

それがゆら〳〵と燃え上がると、まあ何といふ不思議なことだらう。その火の光の射すところは、壁が紗のやうに薄くなつて、その女の兒は、内の部屋をすつかり見透すことが出來た。

雪のやうに眞白いテーブル掛けをかけた、光つてゐる陶器の皿をならべた食卓が見えた。燒き鳥が、それこそほんとの燒き鳥がほか〳〵と溫いいきを立てゝ、食卓の一方に置かれてあつた。

そしてその時、まあどうだらう！　その燒き鳥は脊に肉を截るナイフとホオクとを立てたまゝ、食卓から跳びおりて、床の上をよた〳〵歩いて、その小娘の方へずつと寄つて來るではないか。あゝ、その時も時、恰度マッチは燃えつくしてしまつて、彼女の傍には、厚い、固い壁しか殘つて居らなかつた。

彼女はもう一本の、第三番目のマッチを擦つた。炎

が明るく燃え上つた。そして今度はその小娘は一本のクリスマスの樹の下に坐つてゐた。いかにも大きな木で、それが美しく飾られてゐた。

幾百もの小さな蠟燭が綠の枝々の間から輝いて、ちか〳〵、ちか〳〵と彼女の上を照した。幾百ものちッちゃな色彩した人形が見おろして、小さなマッチ賣りの娘を見ると笑ひかけた。彼女は心からそれ等の方へ兩手を差し伸べた。と、その時、彼女のマッチは燃えつくしてしまつた。

けれど、やつぱりその澤山の蠟燭は燃えつゞけてゐて、それが高く、高く次第に登つて、大空の星のやうに輝くのを見た。たしかにそれは星であつた。

「ちか〳〵、ちか〳〵、輝く小さな星よ、お前はいつたい何だらうか！」

彼女は眠さうにつぶやいた。

じつと見つめてゐるうちに、一つの明るい星の落ちるのを彼女は見た。そしてその星が落ちた時、空を横ぎつて光の長い尾を曳いた。

『何人かゞ神樣のところへ行くのだ』と、その兒は思つた。この小娘にとつて只一人の親切な人であつた祖母さんが、星の落ちる時は、何人かの靈魂が神樣のところへ昇つて行くのだと、彼女に話してきかせたことがあつた。

その兒はまたもう一本のマッチを、その束のなかから引き出した。そのマッチの火の中で、彼女は、もうとつくに彼女から別れて神樣のお側へ行つた祖母さんを見た。おばあさんはいつものやうに柔しく、親切な樣子をしてゐた。けれど、以前よりは一層樂しさうな樣子を見せてゐた。

『おゝ、お祖母さん、私のお祖母さん、もう行つちやいやよ』と、その兒は聲を擧げた。そして、祖母さんが見えなくなつては困ると思つたので、急いで束の中にあつたマッチを皆な一時に點した。

『一緒につれて行つて下さい、ねえ、一緒につれて行つて下さい』と、その兒は一生懸命で願つた。

そのマッチは華かに燃え上つた。眞晝時でもそれ以上に明るくはなれないくらゐであつた。

祖母さんがこんなに身長たかく立派で、こんなに美しく、そして親切に見えたことはこれまで嘗てなかつたことであつた。

祖母さんはその兒を腕にかゝへて、そして二人は一緒にふわつと舞ひ上つた。悅しさうに、樂しさうに、上の方へ、地面から離れて高く、もう寒さも、飢さも、涙もない國の方へ、上へ、上へと、神樣のお側へ行くやうに昇つて行つた。

そして、雪の降つた元日の朝、人々がマッチ賣り娘の冷えきつた小さな遺骸を見つけた時、『可哀さうな兒だ、あの兒は寒さで凍え死んだのだ』と言つた。

けれど、さうではない。人々は、彼女が大晦日の晩に見た不思議な幻を知らないのだ。人々は、その兒がどんなに幸福に、神樣の樂園の中で、元日を迎へてゐるかを知らないのだ。（をはり）

火打箱と兵士

加藤朝鳥

火打箱のお噺ですつて？

さうです。けれどこれは餘つぽど不思議な火打箱のお噺なんですよ。たしかに此の火打箱には魔術が籠つて居るのですからね。

この火打箱はもと魔女のお婆さんが持つて居たのですが、もうそのお婆さんは死んでしまつて、今は此の不思議な火打箱が大きな樹の幹のなかにいれてあるまゝになつて居ります。だからその魔女の孫娘にあたる婆さんが、それを欲しがつて居るのですけれど、手にいれることが出來ません。でも此の孫婆さんは、不思議な火打箱の事をよく心得て居ますから、どうしても手にいれたいものだと思つて居ました。

さうかう思つて居るうちに、たうとう其の機會が參りました。

一二ッ、イチニ！　右向け――右、左向け左。お婆さんの耳もとには勇ましい足音が響いて來ました。婆さんは眼をあげて見ると、一人の兵隊さんがやつて來るのでありました。腰に劍をぶらさげて、背に背囊を負つて、何とも云へぬ立派な姿でした。この兵士は今戰場から故郷に歸つて來るところです。

兵士が近くに來ると、すぐと魔女の婆さんが、

『今晩は。たいへん良い晩で御座います。まあ貴方の劍のお立派だこと――あなたの背囊の大きなこと。貴方には欲しいと思はつしやるだけのお金をあげたいと思ひますよ。』

と申しますと、兵士は

『有難うお婆さん。』

と云ひましたが、それはほんの口先だけの挨拶と云ふもので、兵士の眼には、こんなみすぼらしい婆さんが、何うして乃公の欲しいほどの金をよこして呉れることが出來るものか、と思ひながら、たゞ『有難う。お婆さん』と申しただに過ぎませんでした。

すると魔女の婆さんは、道ばたに聳えて居る巨きな樹を指して、

『兵隊さん。あの樹で御座いますがね。あの樹の幹は内側が空洞になつて居ります。あの樹の梢まで攀ぢのぼると一つの穴があいて居て、その穴は貴方が這入れるくらゐな大きさですよ。そこから貴方が這入り込んで、樹の根の方におりて行きなさい。貴方の腰に繩を結びつけて、わたしがその繩の端の方を持つて居りますから、なかから大きな聲を張りあげてさへ下されば引きあげてあげます。』

『だが、婆さん。乃公は樹の根の方に這入り込んで何をするんだえ？』

と兵隊さんが訊きますと、

『何をするんだつて、兵隊さん。さ　きから私はお金を存分にあげると云つたぢやありませんか。お錢がたんと樹の根の下にあるんですよ　銅も白銀も黄金も……黄金も』と婆さんは嗄れた聲ですが、熱心を罩めて語り出したのです。『樹の根のところま

でお出になると大きな廊下があつて、それは明るく煌々として居ります。百も蠟燭を點火したよりもまだ明るい程です。そしてその廊下に沿うて三つの戸口がついて居りまして、それぞれの鍵はちやんと鍵穴に差し込んであります。その鍵で扉を開いてなかにお這入りなさい。一番手前の室の床のまんなかに、大きな箱があつて、その箱の蓋の上に犬が坐つて居て、その犬の眼が皿の樣にギラ〳〵輝いて居るかも知れませんが、決して驚いたり怖れたりすることはありません。わたしが此の辨慶縞の前掛を持たせてあげますから、これを床に擴げ、すぐとその犬をつかまへて、此の前掛の上にのつけなさい。そしてからその箱の蓋をとつて、なかから欲しいだけのお錢をとりだしなさい。其の箱のなかには、銅のお錢ばかりしかないのですけれど、もし銀のがお望みだつたら、すぐと次ぎの室の鍵を開いてお這入りなさい。そこにはもう一つ別な箱の上に別な犬が居て、

その眼はそれはそれは巨きくつて――恰度水車の輪くらゐあるかも知れぬが、決して驚いちやなりません。わたしの辨慶縞のエプロンの上に犬を乘せて、箱のなかから思ふほど銀を掴み出しなさい。銀よりも金の方がよいとなら、その次ぎの室に行きさへすればよいのです。そこにも矢つ張り箱の上に犬が居て、今度のは途徹もない巨きな身體でもつて、殊に眼の玉の大きなことと云つたら、まるで塔に火が燃え附いたやうに爛々として居ます。これが犬かと思はれるほど恐しい形相ですが、やつぱり怖れることはありません。わたしの辨慶縞の前掛に乘つけさへすれば大丈夫ですよ。さうして箱のなかから、山吹色の黄金を思ふ存分にとり出しなさい。』

『そりや素敵だ。』

と兵士は叫びました。何しろ此の兵隊さんは、今まで戰爭に行つて居たところなんですから、生れながらの勇士である上に、氣があらつぽくなつて居り

ます。そして婆さんに、

『そりや全く素敵滅法な話だね。だが、婆さん。お前さんには何をあげたらいゝんだね。お前さんだつて何か望みがあるんだらう。どんな望みでも、乃公が叶へてあげようと思ふが。』

『わたしにかえ。わたしは錢は一文も要らない。ぢやがわたしの欲しいのは火打箱だけですよ。わたしの祖母あさんが、最後の際で樹に這入つてしまふ時、火打箱をわたしに遺して呉れたのがあるでなあ。』

『よろしい。ぢや乃公の腰に繩を結びつけて呉れ。』と兵士がいひました。

すると婆さんが、

『さうれ。これが繩で、これが辨慶縞の前掛ですよ。大切な前掛だからね。』

兵士はすぐと樹に攀ぢのぼり、梢にあいて居る穴からはひり込んで、だん

だん下の方に行つて見ると、成る程大きな廊下があつて、魔女の婆さんが云つたとほり、蠟燭を百燈したよりもまだ煌々とあかるくなつて居るのでした。

兵士はまづ第一に、一番手前にある扉を開いてなかに這入りますと、箱の上に一疋の犬が皿の様に大きく眼を視開いて、びつくりした顔つきで兵士を睨みつけました。兵士は『こゝだな、魔女の婆さんの云つた通りにしなきやならないのは。』と考へながら、例の辨慶縞のエプロンを床に敷いて、勇敢にもその犬を抱いてその上に置きました。

それから箱の蓋をとつて見ますと、なかに銅の錢がいつぱい這入つて居ます。さつそく出來るだけ澤山に衣嚢のなかにその錢を掴み込んで、その蓋をもとどほりに箱の上に置き、犬もちやんとその上に坐らせて、次ぎの扉の方に行きました。

兵士は此の扉も鍵で開けて見ますと、成る程また別な箱の上に別な犬が水車の輪のやうな巨大な眼玉を剝いて居るのでした。兵士は

『何だと。乃公をそんなに睨むと眼がつぶれてしまふぞ。』

と怒鳴つて見たが、心のうちで、怒鳴つたところで駄目なことだ。こりや失敗つたと考へなほし、すぐと辨慶縞のエプロンを廣げてそれに犬を乗せ、箱の蓋を開きました。

銀だ。みんな銀の錢だ。兵士は先刻つめこんだ衣嚢の銅の錢を、大急ぎですつかり投げだしてしまひました。無論銀の方を持てるだけ持たねばなりませんから、衣嚢にも背嚢にもいつぱい詰め込んで、鳥頂天になつて手を叩いて悦びました。もう彼は大變な富限者になつて居るのですから。

ですがもつと先きの第三番目の部屋に行つて鍵を開けて見ますと、そこにも箱があつて、犬が乗つかつて居ましたが、今度の犬の怖しい形相！　流石の剛膽な兵士の眼も、くらくらッとしたのでした。犬

の巨きな眼玉がぐるぐると廻つて、まるで塔が火事になつたやうに爛々として居ます。眼玉がぐる〳〵まはるのが實に物凄い。

だが兵士は矢張り剛勇でありまして、戰爭から歸つたばかりの沈着な心でもつて、

『や。犬君。今晩は。』

と云ひながら、膝の緒きつて始めてでつくわした此の巨大な怪物の樣な犬に對し、大に敬意を表して、それから犬を抱きはじめました。何しろ巨大な犬ですから、抱きあげられさうにも思はれませんでしたが、不思議にも犬は魔女のエプロンの上に運ばれて行つて、箱の蓋を開くことが出來ました。

金だ。黃金ばかりだ。これだけの黃金があるなら都のもの殘らず買占めることが出來よう。町ぢうの砂糖菓子はおろか、世界中の葉鐵の兵隊さんでも、乘り馬でも、鞭でも買ひとることが出來るだらう。

もう兵士は無我夢中に悦んでしまつて、今まで持つて居た銀を投げ出してしまひました。銀なんぞ何になるものか。金だ。金だ。黃金があるんだ！

兵士は衣嚢にも背嚢にも張り裂ける程詰込みましたが、まだそれだけでは思ひきれないから帽子にも詰め込み、深靴にまでも詰め込んだものですから、歩くことが出來ない位でありました。もうこれで眞實大富豪になつたので、兵卒はちやんと箱の蓋をして、その上に巨きな犬を置いて廊下に出て、樹の上の方に口を向けながら、

『オーイ。婆さん。繩を引いて呉れ。』

と叫びました。

『火打箱を持ちましたか。』

と婆さんの聲が聞えて來ました。

『おゝ。さうだ。全く忘れて居た。』と兵士は云ひながら、火打箱を探して來て、それからやつと婆さんの引く繩で幹をつたひながら、安全にもとの窖で街道の上に出て來たのですが、今度は何しろ大金持ち

になつてしまつて居るので、氣持ちがすつかり傲慢になつて居るのでありました。

衣嚢にも、背嚢にも、帽子にも、深靴にもいつぱい黄金が詰め込んであるのですから、傲慢になるのも無理はありません。婆さんに

『いつたいこんなケチな火打箱で、お前さんは何をするんだね。』

と聞きますと、婆さんは

『そりやお前さんの知つたことぢやないよ。お前さんにや黄金がうんと持てたんだから、わたしにその火打箱だけお呉れ。』

『何だと』と兵士は婆さんの言葉の荒いのに怒つて、黄金ずくめになつた氣の荒さから『さあ、云へ。いつたい此の火打箱で何をしようつて云ふのだ。云はないと劍を拔いて貴樣の頸をぶちきつてしまふぞ。』

『でも、わたしは云ひたく無い。』と婆さんは皺枯れ聲を出しました。

すると兵士は婆さんの頸を斬つたので、可哀さうに魔女の婆さんはそのまゝ仆れて呼吸が絶えてしまひました。でも兵士は振り向きもせず、さつさと辨慶縞のエプロンで黄金をしばつて、それを肩にかけ、衣嚢に火打箱をいれて都の方に進んで行きました。

如何にも意氣揚々です。肩の黄金の重さと云つたら、何とも云はれぬ愉快な重さで、たまらない程うれしいのでした。

兵士は都に着きますと、一番立派な旅館に行つて、一番立派な部屋に這込み、大好きの菓物や布頸饌やを注文して食べました。

此の旅館の下足番は、すぐと兵士の深靴を磨きましたのですが『こりやまた、あんなお金持ちにしては粗末な靴を穿いたものだなあ。』と驚いたさうですが、しかしその翌る日は兵士は自分でそれはそれは立派な新しい靴を買つて來ました。その上華美な着

物なども一つさい調へましたから、もうだれだつて此の兵士を粗末などとは言はなくなりました。

粗末どころぢやない、もう今では立派過ぎる大紳士なのですから、都の方々から大勢の人々が此の富豪の身のまはりに蟻の樣に集まつて來て、やれ何處そこは面白い遊山の場所だなど云つて聞かせ、序にその都の王樣の噂話なども出て、王樣の美しい姫君の事までも云つて聞かせて呉れるのでした。

『さうか。そんなに美しい姫君があるのか。是非會つて見たいものぢやなあ。』と兵士は云ひ出しました。すると相手の人は、

『でも姫君に會ふことは出來ません。あの美しい姫君は、ぐるりが塀や塔やで嚴重に圍まれた大きな銅のお城のなかにいらして、たゞ王樣だけがそのお城に御這入りになることが出來るに過ぎません。何んでも豫言とか申すものがありまして、姫君樣は普通の一兵卒と結婚なされると云ふ運命が出たさうで御座いますが、王樣がそれを御好みになりませんので、とても嚴重に警戒をしてあるので御座います。』

『でも一度でもいゝから見たいものだね。』と兵士は心のうちで考へました。だが何うしたら、その銅のお城のなかに這つて行くことが出來るか、それが大問題です。

さうかう思ひながらも彼は、隨分と愉快な日ばかりを過しました。王樣の大公園のなかに自動車を馳せたり、お芝居を見に行つたり、また自分が貧乏だつた時、どんな哀れだつたかを思ひ出して、可哀さうな貧乏人達にお錢を呉てやつたりしたのでした。

兵士は絶えず華美な着物ばかりを着て居て、彼をとりまく大勢の人達は、みんな彼を眞當に立派な大紳士であると云ひ、彼もさう云はれる事が無上に悦しかつたのでした。

かうして兵士は毎日々々儲けると云ふ事はしないで、たゞたゞお錢を散らしてばかり居るのでしたから、とうとう莫大な黄金も無くなつてしまひました。もうあとに殘つたのは銅錢が二つきりで、兵士はまた昔の樣に貧乏人になつてしまひました。

で、廣大な旅館を出て、むさくるしい小さい部屋に移りました。それは屋根裏の狹い狹いところで、階段を幾つも幾つものぼつて行かねばならないところでした。その狹いところで、兵士は自分で破れた着物を繕つたり、自分で靴を磨いたりして居るのでした。もうかうなつては、訪ねて來る人もありませんでした。

お腹が空いてひもじい。ひもじい上に蠟燭一本買ふだけのお錢も無いのですから、眞闇いなかにしよんぼりして居らねばなりません。が、ある晩のこと、兵士は不圖あの魔女の婆さんの火打箱の事を思ひ浮かべました。――さうだ。あの火打箱のなかには火の燈るものがあるかも知れない――。

で、急いで火打箱を開きますと、ちやんと燐寸箱が出て來ました。で一本燐寸をとりだして火打箱で磨つて見ました。すると火がつくがはやいか、突然に戸口がぱつと開いて、すぐとその場に一疋の犬が眼を皿の樣に見張つて兵士を見ながら、『御主人の御用向を承ります。』と申すのでした。

『成る程、これならあの魔女の婆さんが此の火打箱を欲しがつたのも無理はない。』と兵士は思ひながら大きな聲で、

『お錢を持つて來い。』と犬に命じますと、すぐと犬は何處かに姿を搔き消しました。が、すぐとまた現れて來たので、見ると口に大きなお錢のいつぱい這入つた袋を咥へて居るのでありました。

兵士は驚きながら、

『こりやまつたく魔術の犬だ。乃公は寶物を得たわい。』と悦んで、またもうひとつ火打箱を打つて見ますと、最初は皿のやうな眼の犬が出たのでしたが、二度目には水車の輪のやうな大眼玉の犬が出て來、

三度目を打つて見ますと、塔が燃えたつて居るやうな煌々の眼をまはしながら巨大な怪物のやうな犬が出て來るのでした。此の三つの犬は、何んでも兵士の思ふとほりの事をして呉れました。

かうなれば、またもや兵卒は黄金でも何んでも思ふ存分に手にいれることが出來ました。

彼はもう一度、あの廣大な旅館の一番立派な部屋にうつり、華やかな着物を纏ひました。

すると或る晩の事、兵士の考へは例の大きな銅のお城のなかに閉ぢ籠めてあると云ふ美しい美しい姫君の方に馳せて行きました。『いつたい誰もその姫君を見たことがないと云ふのが不思議なことぢやなあ。どうしてもこりや見とゞけてやりたいものだ。』と、思ひました。

で、またもや火打箱をとりだして火を磨つて見ますと、不思議や、またも皿の樣に大きな眼を見張つて居る犬が現れて來ました。で兵士は、

『もう夜も更けてしまつて居るんだが、乃公はほんのちよつとでもいゝから姫君が見たくてならなくなつて來た。』と申しますと、犬はすぐと戸の外に飛び出して、まだ兵士が、どうだか知らん、ほんとにそんな不思議なお姫樣があるのか知らんなとゞ思つてゐる間に、もうちやんとお姫樣は兵士の眼前に現れて居るのでありました。

さう。姫君はちやんと犬の背中の上に眠つたまゝでありまして、それはそれは綺麗で、氣品が崇高くつて兵士は一目見ただけで、これはほんとうの姫君であると云ふことが疑へませんでした。兵士は此の眠れる姫君の前に恭しく蹲まつて、姫の手に接吻をいたしました。無論兵士はそんなことをするのは失禮なことだとは思ひましたものの、姫君があんまり美しく綺麗なものだから、つい心ならずもさうしてしまつたのでした。そしてすぐとまた犬に姫を連れて銅のお城に歸るやうに命じたのです。（つゞく）

大助小助

西川勉

ひどく紛はしいことだ、ほんとにひどく紛はしいことだ！　同じ村に同じ名前の人間が二人もあるなんて。いや、紛はしいといふよりは、厄介千萬なことでした。

一人の方は金持ちで、馬を四頭も持つてゐたのに、もう一人の方はたつた一頭しか持つてゐないのです。けれど、それぐらゐのことでは、紛はしさがなくなるたしにはなりませんでした。

それはさて、一人はのつぽで、丈夫さうでした。そしてもう一人の方は、小さくて、瘠せこけてゐました。

『おい、みんな、のつぽの方を大助と云つて、小さい方を小助と呼ばうぢやないか。』

村人の間で、かういふ話が出來ました。それから

後は、いつでも、二人の區別がはつきりつくやうになりました。

小助は月曜日から土曜日まで、大助のところの畑を耕してやつて、自分の馬も大助に貸してやることになつてゐました。

然し、日曜日には、小助には幸せな日が來ます。日曜日には、大助が四頭の馬を一日ぢう、小助に貸してくれるのです。小助はどんなに自慢さうでしたらう？　どんな樣子で五頭の馬に鞭をあてたと思ひます。まるつきりみんな、自分の馬のやうに見えました。

日曜日に、日が晴やかに照つて、教會堂の鐘が樂しげに鳴りひゞくと、村の人達は一番きれいな着物を着て、教會へ行きました。

村の人達は小助が耕してゐる畑のそばを通つて、小助と立派な五頭の馬とを眺めました。

小助はいゝ氣持さうに馬に鞭を呉れながら、

『どうどう！　おらが五頭の立派な馬よ！』と、うれしさうに叫びました。

大助はその言葉を聞くと、たいそう腹を立てて、『お前はそんなことを云つちやならねえぞ。お前の馬はたつた一頭だといふことは、判りきつた話ぢやないか。』といひました。

けれど、すぐ次の日曜日になつて、誰か畑のそばを通ると、小助は大助の云つたことなんぞすつかり忘れてしまつて、いゝ氣持さうに馬に鞭を呉れながら、

『どうどう！　おらが五頭の立派な馬よ！』と、うれしさうに叫びました。

大助は前よりも腹を立てて、『もう一度そんなことを云つて見ろ。お前の馬を撲り倒して、すぐ殺してしまふから』といひました。

『もう決してそんなことは云ひません。』と小助は云ひました。そして、また實際、約束を守るつもりでゐました。

ところが、大變なことが起りました。

通り懸りの田舍の人が四五人、立ちどまつて、小助に物を云ひかけて、馬を賞めました。

その時、小助はいゝ氣持さうに馬に鞭を呉れながら、また、

『どうどう！　おらが五頭の立派な馬よ！』と、うれしさうに叫びました。

大助はそれを聞いて、たいそう腹を立てました。大助は大きな石を抱へて來て、小助の馬の頭にぶつつけましたので、馬は死んしまひました。

『ああ！　おらにはたつた一頭の馬もなくなつてしまつた。』

小助は悲しさうに涙を流しました。

けれど、さう長く泣いてはゐられませんでした。小助は涙をふいて、死んだ馬の皮を剝いで、それを吊して風に乾かしました。

やがて、皮は乾きました　小助はそれを背負袋に入れて、次の町へ賣りに出かけました。

小助は長い間歩きました。道は陰氣な大きな林の中を通つてゐました。したが、暗い樅の木立が暴風に吹かれて、枝がが〳〵と鳴つてゐました。

暴風のために、小助は道に迷つてしまつたのです。その内に日がとつぷりと暮れてしまひました。小助は町へ行くことも出來ず、家へ歸る道を見つけることも出來ませんでした。物凄い森の中で道に迷つてしまつてゐました。

けれど、だんだん行つて見　と、まるつきり道を見失つたわけではなかつたのです。遠くの方にいくつか燈火が見えて來ました。小助は燈火の方へ歩いて行きました。と間もなく、大きな百姓家の玄關に出ました。戸はみんな閉めきつてありましたが、その隙間から、燈火が漏れてゐました。

『多分ここに泊めて貰へるだらう。』

小助はかう考へて、思ひ切つて戸を叩きました。

百姓のおかみさんが、戸を開けて呉れましたが、小助の頼みを聞いて、どこか他の家へ行くがいゝ、あひにくと主人が家にゐないから、客を家に入れるわけには行かないと言ひました。

『それぢや、外のこの寒いところにゐなきやなんねえ。』と、小助が云ひました。

ところが、そこからすぐ近くに、乾草を積み重ねたところがありました。そして、それと母家の間に平屋建ての小舎がありました。

『あすこで寢られらぁ。』と、小助は考へました。『もしか鶏が飛び降りて來て、おいらの足を突ッつくやうなことさへなきや、ほんとに氣樂な寢床になるべえ。』

ちよつとさう考へて見たといふのは、百姓家の屋根の、ちやうど小助の上あたりに、ほんものの鶏が、巣のそばに立つて、夜だといふのに、大きな眼をしてゐたからです。

然し、小助は小舎の屋根にのぼつて、横になつて、からだを休めました。

ところが、小舎の屋根にのぼると、戸の隙間から百姓家の一間の樣子がはつきり見えました。

小助が見たのはかういふ有樣です　――大きな食卓に、葡萄酒と燒肉と魚がのつてゐました。食卓に向つて、百姓のおかみさんと寺男が坐つてゐて、外には誰もゐませんでした。おかみさんは杯に、一ばい葡萄酒を注いでゐました　そして寺男は勝手に魚を食べてゐました。小助はひもじくなりました。

『何て御馳走だ！』かう叫んで、小助が首を窓の方へ伸し　見ますと、立派な大きいお菓子が目にはひりました。

『何て御馳走だ！』と、小助はもう一度叫びました。

その時、馬の蹄の音が聞えました。誰かこの家の方へ駈けて來たのです。それはこの百姓家の主人でした。主人は親切な人でした。けれど、ひとつ癖がありました。それは寺男を見ると、我慢が出來なかつたことです。また實際腹を立てるのも無理がないのです。といふのは、自分がよそへ行つた留守に、寺男がおかみさんを訪ねて來るからです。

寺男は主人の馬の蹄の音を聞くと、恐しくて震へ上りました。おかみさんは寺男に隱れて呉れと云ひました。

『あの空箱の中におはひりよ。お前さんあすこならきつと目つかりこないから。』

おかみさんはかう云ひました。寺男はあわてて箱の中へ轉がり込みました。

それから、百姓家のおかみさんは、晩餐の後を片

づけて、それを臺所の大釜の中へ隠してしまひました。そして主人がはひつて來た時には、御馳走は少しも出てゐませんでした。

小助は小舍の屋根の上から、おかみさんのすることを殘らず見てゐました。

『おや、おや！』

御馳走が大釜の中に隠されるのを見て、小助は溜息を吐きました。

『おいおい！　そこにゐるのは誰だい？』と百姓家の主人が云ひました。小助の溜息が聞えたからです。がやがて、上の方を見て、そこに誰かゐることを知りました。

『何だつてそんなところに寢てゐるのだ？　降りて來て俺と一緒に家へおはいり。』

小助は降りて來て、森の中で道に迷つたことから、一晩泊めて貰ひたかつたことなどを話しました。

『一緒に家へはひつて、晩飯を食べなさい。』と、百姓は云ひました。

おかみさんは元氣よく二人を迎へて、食卓に布を懸けて、それから大きな鉢に雜煮を盛つて二人の前に出しました。

しかし、小助は雜煮を食べることが出來ませんで

した。始終、釜の中に隠されてゐる御馳走のことを考へてゐたからです。けれど、百姓はお腹が空いてゐましたので、がつがつして雜煮を平げてしまひました。

小助は干した馬の皮を入れてある背負を卸して食卓の下の足もとに置きました。それからその上を足で踏みますと、乾いた皮が、きゆッ　きゆッと鳴りました。

小助はうまいこと　思ひついたものです！　皮が鳴ると、小は『しッ、しッ！』と、云ひました。それがちやうど誰かに話をするやうな調子なんです。然し、それと同時にまた袋の上を踏むもんですから、皮が前よりも高く、きゆッ、きゆッと鳴りました

『あんたは袋の中に何を入れてゐなさる？』と、百姓がたづねました。

『はあ、魔法使ひだんべえ。』と、小助が云ひました。『それが雜煮なんか食はなくても好い。まじなつて見ると、釜の中に燒肉や魚や菓子なんかが、一杯はひつてるんだから、と云つてやがるんで。』

『ほんとにさう云つてるですかね』

百姓はかう云つて、立ち上つて、釜の蓋を開けて見ました。百姓はどんなものを見たと思ひます？

無論魚と、燒肉と、そしてお菓子！　魔法使が云つた通りのものが、そこにありました。

百姓のおかみさ　は一言も口が利けませんでした。おかみさんは釜の中から食物を持ち出して來て、主人と小助の前に置きました。二人はどんなにその御馳走をうまさうに食べたことでせう！　またたくうちにみんな平げてしまひました。

それから小助はもう一度皮を踏みました。

『今、魔法使ひが何と云ひました？』と、百姓がたづねました。

『釜の中に葡萄酒の瓶が三本あると云つたがね。』と小助が尤もらしくいふので、百姓はおかみさんに云ひつけて、釜の蓋を開けて、葡萄酒を持つて來させました。おかみさんは、前よりももつとびつくりしてゐました。しかし、三本の葡萄酒は持つて來なければなりませんでした　百姓はそれを飲むと、たいさう上機嫌になつて、

『あんたの魔法使は惡魔でも出して見せますかね。』と、百姓がきゝました。

『そんなものは譯なしだ。おいらが賴むと、何でもして呉れるだが、そいつはとてもみつともなくて、ふんとに、とてもみつともねえ野郎で、多分あんたは見なかつたら好かつたと思ふべえ。』と、小助は云ひました。

『心配するにや及びませんや。』と、百姓が云ひました。『では、ちよつぴりでいゝから話して下さいよ。惡魔はどんなものに似てるか？』

『さうさなあ、寺男そつくりといふ風だね。』

『寺男。』と、百姓は繰り返しました。『そりやまつぴらだ。私は寺男の姿を見ると癪に觸つてならねえ。が、つまりは、そりやほんものの寺男ちやなくて、惡魔なんださうだから、ひとつ勇氣を振つて、見せて貰ひませう。』

『よろしい。もう一度魔法使ひに話して見るとしよう。』

かう云つて、小助は、前よりもずつと大い聲でゆッ、きゆッと、鳴るまで、袋を踏みつけました。

小助はうつむいて耳を傾けてゐました。

『何と云つてゐますか？』と、百姓がたづねました。

『かう云つてますよ。もし見たいとなら、あすこの隅の箱の蓋を開けろと云つて居りやす。しかし、蓋を堅く抑へてゐないと逃げ出すかも知れないよ。』

『蓋を抑へてゐるのには手傳つて貰はなくちやならない。』と、百姓が言ひました。

二人は一度に箱のところへ行きました。そこは、おかみさんがほんものの寺男を隱して置いたところです。寺男はびつくりしてしまつて、髪の毛から足の爪先まで震へてゐました。百姓はちよつぴり蓋を開けて覗いて見ました。

『ああ、何て恐いことだ！』と、叫んで、百姓は背後へ飛び退きました。『惡魔はこの町の寺男にそつくりだ。』

『あんた是非その魔法使ひを俺に賣つて下さらんか』と、百姓が賴みました『お金はいくらでもお望み次第出すから。』

『どうして〳〵賣る譯には行かない。』と、小助は云ひました。『ごく〳〵大事な奴なんだからね。』

然し、百姓は魔法使ひが欲しいと云つて、いくども、いくども賴みますので、とうとう、小助はかう云ひました。

『よろしい。お金を二斗桝一杯呉れるなら、賣りますべえ。恰好な値段ですせ。銀貨で二斗桝一杯だ。』

『好えとも　好えとも。』と、百姓は云ひました。『拂ひませうとも　しかし、あんたは是非あの箱だけは持つて行つて下さいよ。あれが家の中にあると、俺は暫くでも我慢が出來ないんだから。』

そこで小助は、百姓に馬の皮のはひつた袋をやつ

て、それから手押車に箱をのつけて、それを引きながら二斗桝一杯の銀貨を身につけて出かけました。『さやうなら。』と、小助は氣持ちよささうに挨拶して出かけました。箱の中では寺男が、この先どうなるんだらうかと案じて、縮み上つて居りました。

小助はどんどん歩きました。森を抜けて、大きな河に架けた橋のところまで來ました。

小助は手押車をひいて橋の上に差し懸りました。恰度小助は橋の半分ほど渡つた時に、箱の中の寺男に聞えよがしに叫びました。

『こんなつまらねえ箱なんかどうして臭れべえ？大變重いが、石ころでも一杯つまつてるんだらう。河の中へ投り込んでやれ。』

小助は、ほんとに河の中へ投り込むやうに、箱を抱へ上げました。

『待つて臭れ、待つて臭れ！』と、寺男が夢中で叫びました。『待つて下さい。どうか先に私を出して下さい。』

小助はわざとびつくりした風を見せて、

『これやア大變だぞ。まだ惡魔が中にゐるな。早く川の中へはふり込んでやるべえ。』と、いひました。

『とんでもない、とんでもない。私を出してくれた

『はい、はい。出して上げ　すべえ。』と、云つて、小助は箱を卸して、蓋を開けました。寺男は這ひ出しました。箱から出てどんなに喜んだことでせう！寺男は河の中へ箱を突落して、それから、小助を伴れて家へ歸つて、錢を二斗桝で一杯はかつて小助に渡しました。

『おいら馬の皮のお陰でお大盡になつたわい。』と、といひながら小助は家へ歸りました。歸ると、お金をみんなぶちまけて、山のやうに積み上げました。

小助はそれを計つて見て、その周圍で踊りを踊つて、掌を拍きながらさも氣持ちよささうに『小助、今ぢや、お前も金持ちだな』と、ひとり言を云ひました。

『おらが、馬の皮のおかげでこんなに金儲けをしたのを見て、大助の奴め何て云　だらう？

かう考へましたので、小助は小供に賴んで、大助の家へ二斗桝を借りに遣りました。

ら、二斗桝に一ぱいお金をあげるから、どうか助けて下さい。』

『錢を二斗桝一杯！』

小助はにつこりしました。

『小助の奴め桝をどうするつもりなんだらう？』と大助は不思議がつて、智慧をしぼつたあげく、桝の底に牛の油を塗つて渡しました。

『小助が桝の中に何を入れやうとも、ちつとばかりは木脂につくだらうから、さうすると、あいつが桝をどうしたのか直ぐに判るわい。』と、大助は考へたのです

さてそれからどうなつたでせう。

桝が返されて來ると、大助は鵜の目鷹の目で調べました。ところが木脂にくつついてゐるものがあるどころか　しかも綺麗な銀貨が三つです　おや／＼小助の奴め、金持ちになつたに違ひない、と思つた大助は、直ぐさま小助の家へ出かけて行きました。

『一體、お前、この金をみんな何處から持つて來たんだ？』と大助がきゝました。

『これはおいらが馬の皮を賣つた金なんだよ。』と、小助が云ひました。

『なにッ！　それではみんな儲けたんか？』と、大助は目を圓くして四斗の銀貨を見つめました。『一頭の馬の皮が銀貨で二斗桝二杯になつたんか。』

大助は家へ駈けつけて、すぐさま斧を振り上げて、四頭の馬の頭を打つて、みんな殺してしまひました。

大助はその皮を剝いで、やがて馬車に乘つて、町へそれを賣りに出かけました。

『皮や！　新皮！　皮は要りませんか？』と、大助は町のあちこちで叫びました。

靴屋や鞣皮屋が急いで飛び出して來て、皮の値段をたづねました。

『一枚について二斗桝一ぱいのお金を頂きます。』と大助が云ひました。

『この氣狂ひめ、値段は金を二斗桝一ぱいだつて。』と、皆な驚いて自分の店へつてしまひました。

大助はそれから又、『皮や！　皮や！』と怒鳴つて

歩いて、値段を聞かれる度に、『二斗桝一杯お金をいたゞきます。』と答へましたので、誰も彼も『こいつ人を馬鹿にするな。』と云ひながら、靴屋は木型を、皮屋は革前掛を取つて、大助をびし／＼打のめしました。それから皆なして、『革やあ、革やあ。』と眞似をして囃し立てて、『悪圖々々してゐると、お前の皮を柴と黄色の斑になるやうになめしてやるぞ。早くこの町から出て行け、出て行け。』と叫んで、大助を町の外へ突き出しました。

大助は大層腹を立てました　大助はこれまで、こんなにひどく打たれたことがありませんでした。

『小助の奴が悪いんだ。』

と、大助は不機嫌な顏をしていひました。

『仕返しをしてやるぞ。この先あいつを生かして置いてたまるもんか。』

さて小助には年を老つたお祖母樣がありました。ちやうどこの時分に、お祖母樣は小助の狹い部屋の中で死にました。お祖母樣はなかなか氣むづかしくて、小助には親切にして呉れませんでしたが、それでも、今は死んでしまつたものですから、小助はたいそう悲しみました。

『お祖母樣を自分の溫かな寢床に寢かせて置かう。今晩中はさうして置かなくちやならない。』と、小助は考へました。そして小助自身は、部屋の隅の椅子に腰掛けて眠りました。

すると、夜中に戸がそつと開きました。大助が手に斧を持つて、はひつて來たのです。大助は部屋の隅に寢床があることを知つてゐました。まつすぐ寢床の方へ行つて、大助は死んだお祖母樣の額に、やつ！　と斧を打ち下しました。小助を打ち殺さうと思つたのです。

『さあお前はもう決して俺を瞞すことは出來ねえぞ。』と云つて、大助は家へ歸つて行きました。

『あいつは何て悪い人間だらう！』と、小助は考へました『あいつおれを殺さうと思つたんだな。』

あくる日の夕方、大助は村はづれの小路で小助に出會ひました。大助は眼を見はりました。

『えつ！　お前死ななかつたのか？　俺あ昨夜お前を殺した積りなんだが。』

『お前は惡黨だ！』と、小助が云ひました。『お前は昨夜斧を持つて、おいらの家へはひつて來て、おいらを殺さうとしたんだ。だが、ありやお祖母樣だつたんだ。寢床にはひつてゐたのは、おいらぢやなかつたんだ。お前は罰を食ふぞ。』

それから大助は心配になりました。といふのは自分が惡いことをしたことを小助が喋舌るに違ひないと思つたからです。

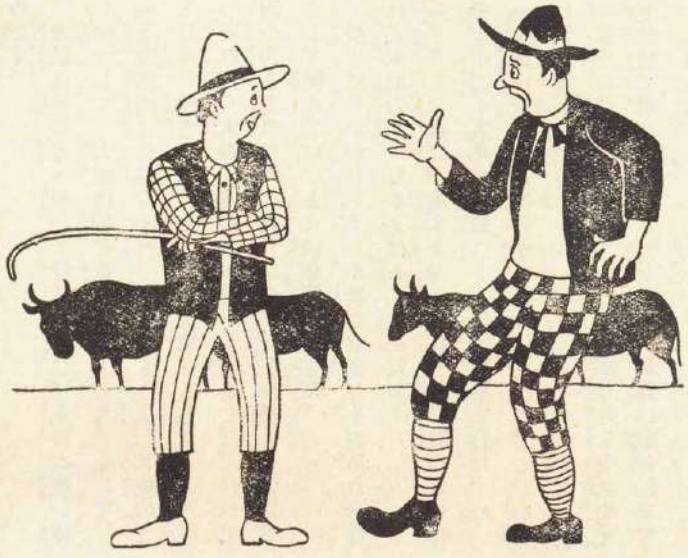
そこで大助は、小助を摑へて、自分の持つてゐた大きな袋の中へ投り込んでしまひました。

『お前をこれから直ぐさま河の中へ投げ込んで溺れさしてやるぞ。』と、大助が叫びました。『さうなつたら俺のことを喋舌る譯にも行くまい。』

然し、河へ行くのはかなり遠い道のりがありました。それに小助もさう安々と持つては行かれませんでした。おたばたもがくので、大助は間もなく疲れてしまひました。

途中に教會がありました。人がたくさん集つて歌を歌つてゐました。オルガンを彈いてる音も聞えました　大助は教會の入口へ袋を卸しました。ちよいとはひつて、オルガンでも聽いてから、また出かけようと思つたのです。それに小助は袋の中でかたく縛つてあるから逃げ出すことは出來ないと、大助は安心して教會へ入つて行きました。

『助けてくれ、助けてくれ。』と、小助は袋の中から叫びました。そして、轉がつたり、もがいたりしましたけれど駄目でした。すると、ちやうどそこへ、髪のまつ白な、年寄りの牛追ひが、手に長い杖を持つて通りかゝりました。牛追ひは牝牛や牡牛の群れを追つて、そこへ來たのでした。ところが一匹の牛



が小助のはひつてゐる袋の方へ駈けて來て、蹴飛して袋をひつくり返しました。

『おいらはまだ年も若いんだから、天國へ行くやうな年ぢやないんだがな。』と、小助は袋の中で溜息をつきました。

牛追ひの年寄りはその言葉を聞いて、

『わしなんぞは、この年になり乍り、まだ天國へ行けさうもないんだ。』と、いひました。

『そんなに天國へ行きたいなら、この袋の口を開けて、おいらの代りにお入りなされ。』と、小助がいひました。

すると、牛追ひは喜んで袋の口を解いで呉れました。そこで小助が中から出て、牛追ひが喜んで袋の中へはひりました。

間もなく、大助が教會から出て來て、また袋を肩に荷ぎ上げましたが、袋が大層輕くなつたやうな氣がしました。牛追ひの目方は小助の半分もなかつた

のです。

大助は河の方へ歩いて行きました。それは廣い深い河でした。大助は袋を投り込みました。そして、『土左衛門になつちまへ。お前はもう決して俺のことなんか喋舌れねえぞ。』と、怒鳴りました。

それから大助は家の方へ戻つて來ました。けれど四つ角まで來た時、立ち止つて、眼を磨りました。そして眺めては、また眼を磨りました。

夢ではないかしゝ？　小助が立派な牛の群れを伴れて大助の前にゐるではありませんか？

『どうした事だ。俺はさつきお前や水に溺れさせたのだが。』と大助が呆氣にとられていひました。

『お前はおいらを河の中へ投り込んだよ。』と、小助は云ひました。

『ぢやお前はどこから、こんな立派な牝牛や牡牛を見付けて來たんだい？』と、大助が澁い顔をしてたづねました。

『なに、こりや海牛だ。何もかも打ちまけて話しちまはうか。』と、小助は云ひました。『ほんとに難有う。おいらを河の中へ投り込んで呉れたことを心の底からお禮を云ふよ。といふのは、今、おいら金持ちになつて、も一度陸地へ歸つて來たからよ。ああ、お前がおいらを袋の中に縛りつけた時にや、ほんとに恐かつたよ　おいらまつつぐに河の底へ沈んだけれど、怪我はしなかつたよ。大變柔かな草が生えてゐたからな。娘が出て來て袋を開けて呉れたんだ。白い長い着物を着てゐただ。美しい髪の上には綠色の花の冠をのつけてゐたつけ。その娘がおいらの手を握つて、かう云ふんだ。――

「小助つて、あなたですか？　あなたに上げる家畜があります。河下へ一哩ほど行つたところにみんなゐるのです。それをみんなお土産に上げさせう。」

といふんだ。――それから、河の底には海の人間がゐるんだよ。おいら見たよ。綺麗な花の中に棲んで

ゐるんだ。草は生々と綠色をして生えてゐるんだ。丘の上や、谷間には、牛や馬が草を食べてゐる。ちやうどここにおいらが伴れてるやうなやつなのだ。』

小助はかう云つて、自慢さうに、自分の家畜を指さしました。

『だけど、お前は急いで、こんなに早く歸つて來たちやないか。』と、大助が云ひました。『そんなに立派なところなら、なぜ河の底で海の人たちと一緒にいつまでもゐなかつたんだい？』

『ああ！　おいら今、近路をして陸を突つ切つて行くところなんだよ。これから一哩の河下の、海の家畜のゐるところへ行くんだよ。』

『お前は何て幸せな野郎だらう。どうだね、俺が河の底へ行つても、海の家畜を呉れるだらうか？』

『きつと呉れると思ふよ。だが、おいらお前のやうに重い人間を入れて河まで持つは行けやしねえ。お前が若しそこへ自分で歩いて行つて、おいらの袋の中へはいりや、河の中へ投り込んでやるがね。』

『よし。』と、大助は云ひました。『若し俺が海の家畜を貰へなかつたら、歸つて來た時に、お前を殺してしまふぞ。』

『いや、きつと、お前はおいらを殺したりなんかしやしねえよ。』と、小助は云ひました。

二人はつれ立つて河へ行きました。

やがて、大助は大きな袋の中にはひりました。

『大きな石をひとつ入れて呉れ。さうしないと沈まないかも知れないから。』と、大助が云ひました。

『ああ、好いとも。』と、云つて、小助は袋の中へ石を入れて、一押しに突落しました。

どぶん！　と河の中へ大助は落つこちて、またたくうちに底へ沈んでしまひました。

『海の家畜なんか見つかるもんか。』と、云つて、やがて小助は、村の方へ家畜を追ひながら靜かに歸つて行きました。（をはり）

豆の花

秋庭俊彦

一つの莢の中に、五つの豆がぶらひつてをりました。豆達は綠色をしてをりました　莢も綠色をしてをりました。ですから全世界もやつぱり、綠色をしてゐるにちがひないと豆達は思ひました。それは無理もない考へです。莢がだん〳〵大きくなるにつれて、豆達も大きくなりました。豆達はそれ〴〵自分に都合のいゝ場所をとつて、一列に坐つてをりました。外側には太陽が照りかゞやいて、莢を溫めました。

雨は莢をきれいに洗つて、つや〳〵した色にさせました。たいてい何時も、晝間はぽか〳〵して溫かく、夜は眞暗でありました。

豆達はぢつと莢の中に坐つてゐるうちに、一日ましに前よりずつと大きくなり、前よりずつと利巧になりました。自分達も今にきつと何か、役に立つやうになれるに違ひないと思つたのです。

『私達はいつまでもこの莢の中にぢつと坐つてゐなければならないのか知ら？　あんまり長い間坐つてゐると、莢が堅くなつてしまやしないかねえ。もう誰かちぎりに來てくれる人がありさうなものだね。あゝ、今にきつと誰かちぎりに來るよ。』と一つの豆が云ひました。

それから一週間すると、豆達は黃色くなりました。莢も黃色くなりました。

『きつと全世界が黃色くなつたんだよ。』と豆達に云ひました――本當にさう思つたのに違ひありません。

不意に誰かゞ莢を引つぱりました。豆達はすぐそれに氣がつきました。莢は瞬く間にちぎれて、人の手に握られました。それから他の莢といつしよに誰かのジャケツのポケットに入れられました。

『私達のうちで、誰が一ばん遠くへ旅に出るか知りないものだね、もう直ぐにわかるんだね。』と五つのうちの一ばん小さい豆が云ひました。

『私は何處でも神樣のおやりになるところへ行くまでのことだ。』と一ばん大きな豆は云ひました。

かさ〳〵と云ふ音がして、莢がわれました。そして五つの豆は眩い太陽の光のなかへころがり出ました。豆達は子供の手のひらへ入れられたのです。一人の小さい子供は、豆達をしつかりと握りながら、豆鐵砲の彈丸にするのに丁度いゝ豆だよと云つてゐました。そして直ぐに、一つの豆を筒の中へ入れて、ぱちんと發射しました。

『そらこの通り、私はいま、廣い廣い世界へ飛び出したぞ。捕まへられるものなら捕まへて見ろ。』とその豆は云ひ乍ら忽ち何處かへ行つてしまひました。

一私は眞直ぐに太陽を目がけて飛んで行かう。あの通り眞圓い坐り場所のある莢だから、私が入ればよく似合ふだらうよ。』と二ばん目の豆は云ひました。そして飛んで行きました。

『私達は何處か行けるところまで行つて眠っちやないか。どん〳〵前の方へ轉がつて行つて見ようよ』

と次の二つの豆は云ひながら、床板の上へ落こちました。そして豆鐵砲へ入れられるまでころ〳〵轉がつてをりましたが、とうとう筒の中へ押しこめられました。

『ぢや、他の豆より遠くへ行つてやらう。』と二つの豆は云ひました。

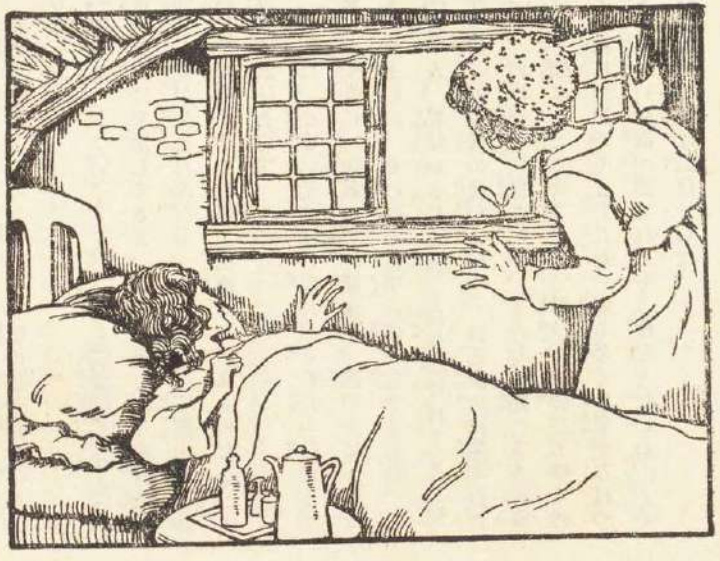
『私は何處でも神樣のおやりになるところへ行くまでの事だ。』と、一ばんお終ひの豆は、豆鐵砲から飛び出した時に云ひました。そして飛んで行きながら、或る屋根裏部屋の窓の下の古い羽目板にぶつかつて、やはらかな土と苔とが一ぱいつまつてゐる、小さな隙間へ落ちました。

それから暫くする中に、苔はすつかり豆を包んでしまひました。豆はそこへ捕虜になつたまゝ、ぢつと坐つてをりましたが、神樣はちやんとそれを知つておいでになりました。

『神樣がいまにどうかして下さるだらう。』と豆は思ひました。

そこの小さい屋根裏部屋には、可哀相なひとりの女が住んでをりました。その女は、元氣のいゝ働きものでしたから、よそへ行つて煖爐の掃除をしたり、薪を小さくわつたり、いろ〳〵な手荒い仕事をやつてをりました。でも、いつも貧乏な暮らしをしてをりました。屋根裏部屋の家には、まだ大人になりきらない、よわ〳〵しい、痩せほそつた、女主人のたつた一人の娘がをりました。もう一年ばかりと云ふもの、娘は病氣で寢てをりました。母親は、いつも優しく看病してをりましたが、娘の病氣は、すこしもよくなりませんでした。さうかと云つて、惡くなる容子も見えませんでした。

『あの娘は死んだ姉さんのそばへ行くつもりなのか知ら、私はたつた二人子供を產んだのだけれど、私には、二人いつしよに育てるだけのお金がないものだから、神樣は私をお助けになつて、姉娘はご自分のところへ連れていらしつた。それで今、私はあとに殘つた一人の娘を、大切にそだてゝゐるのだけれど、あの娘は、姉さんと離れてゐるのが厭なのかも知れない。そして今にもう、天にゐる姉さんのそばへ行つてしまふのかも知れない。』と母親は云ひました。



けれど、病氣の娘は、やつぱりぢつと毎日寢てをりました。母親は、看病のひまを見ては、よそへ働きに行つてをりました。

春が來ました。或る朝早く、そこの小さな窓から太陽の光があか〳〵とさして、部屋の床を一ぱいに照らしました。母親はこれから仕事に出かけようとしてをりました。その時、病氣の娘は、窓の下框を眺めながら、

『母さん、窓の下からのぞいてゐる、あの小さな綠色のものは何でせう、風にゆれてゐるわ。』と云ひました。

母親は窓のところへ行つて、窓の硝子戸を半分あけました。

『おや〳〵、こんなところへ小さな豆の苗が生えて、青い葉つぱを出してるよ。どうしてこんな狗目板の間から豆が生えたんだらうね。これは丁度い〳〵、お前に樂みな小さいお庭が出來たと云ふものだよ。』と母親は云ひました。

母親は、小さい葉つぱの出た、その豆の苗がよく見えるやうに、病氣の娘の寢床を、窓のそばへ寄せてやりました。それから仕事に出て行きました。

『母さん、私はいまに、きつと病氣がなほりますわ。今日は、お日樣の光がまばゆいほど暖かに照りわたつて、あの小さい豆の木が、どんなに嬉しさうに葉つぱを顫はしてゐたでせう。勢ひよく伸びてゆくのが、私にはわかりましたわ。私も早く病氣がなほつて、溫かい日向へ出られるやうになりたいわ。』とその晩病人の娘は云ひました。

『あゝ、もう直ぐに癒るよ！』と母親は云ひました。

母親は娘が云つたやうに、さう早く快くなるとは思ひませんでしたが、窓からのぞいてゐる豆の木のお蔭で、自分の娘にこんな晴れ晴れとした元氣が出て來たことを思ふと、嬉しくつてなりませんでした。で、可愛らしい豆の木が風に吹き折られないやうにと、小さい棒を立てゝやりました。それから窓框には細い糸を結へつけて、豆の蔓がそれへ捲きつくやうにしてやりました。豆の木は蔓を出しました。そして一日ましにすん〳〵伸び上つてゆきました。

『おや、豆が蕾を出したよ。』と或る朝母親は云ひました。

今では、娘の病氣の快くなつてゆくのが、母親にも分つて來ました。娘は時々何か嬉しさうに物を云つてをりました。そして此頃では、朝になると、寢床の上に坐つて、たつた一本の豆の木しか見られない、そこの小さなお庭をうつとりと眺めてをりました。

やがて一週間ばかりすると、病氣の娘は、開け放した窓から射し込む暖い日光を浴びて、いかにも氣持ちよささうに、初めて一時間ばかり坐つてをりました。窓の外側では、大きくなつた豆の木に、赤い豆の花が咲き出してをりました。小さい娘は窓から顔を出して、その和かな花瓣にそつと接吻しました。

『天にゐらつしやる神樣ほ、お前とわたしに望みと樂しみを與へて下さるために、此處へその豆をお植ゑになつて、花をお咲かせになつたのだよ。』と母親は嬉しさうに云つて、その豆の花を天使のやうに思ひました。

ところで、他の豆達はどうなつたでせう。廣い廣い世界へ飛び出して、『捕まへられるものなら捕まへて見ろ。』と云つてゐた豆は、或　家の樋の中へ落ちました。そして鳩の胃袋へ呑みこまれてしまひました。なまけ者の二つの豆は、これも前の者と同じ樣に鳩に食べられて、何の役にも立ちませんでした。

太陽を目がけて飛んで行つた豆は、下水溜へ落こつて、大きな粒にふくれ上るまで、幾日も幾日も汚ない水につかつてをりました。

『俺の素晴らしく大きくなつたことは、どうだ。何だか體がはち切れさうだ。どんな豆だつて、こんなに大きくなれやしまい。あの莢に入つてゐた五つの豆のうちでは、俺が一ばん偉くなつたな。』とその豆は云ひました。下水溜はその豆の云ふことを本當だと思つてをりました。

ところが、こつちの屋根裏部屋では、小さい娘が窓のそばに立つて、もうすつかり病氣の癒つた薔薇色の顔を見せ、嬉しさうな眼付をしながら、その細そりした手を豆の花の上に重ねて、神樣に感謝のお祈りを上げてをりました。

『私はこの豆を大切に養つてやらう。』と下水溜は云ひました。（をはり）

甲蟲の自慢

中島孤島

天子樣の馬は黄金の沓を穿いて居ました。四つの足へ一つづつ黄金の沓を穿いて居ました。天子樣の馬は、どうして黄金の沓を穿かせられたのでせう！

その馬はすらりとした脚と、まるで人間のやうな悧巧さうな目容と、ふさふさと頸のまはりへ垂れかかつた絹糸のやうな鬣をもつた、世にも美事な動物でした。御主人のお伴をして戰爭に出た時には、シユッシユッと風を切つて飛んで來る彈丸の中を、勇ましく突き進み、大砲の火と煙で包まれた戰場を、縱横に駈け廻つて、向つて來る敵を蹴倒し、嚙み殺し、敵の死骸を乘越え、踏越えながら、御主人を保護して、あの立派な黄金の冠と、またそれよりも大切な天子樣のお命を守りました。

かういふ手柄があつたので、天子樣の馬は、黄金の沓を穿かせられたのです。四つの足へ、一つづつ黄金の沓を穿かせられて居るのです。

その時、一匹の甲蟲が厩の中から這ひ出して來ました。

「あゝあゝ、大きな者が先で、小さな者はいつでも後廻しにされるのか。」と甲蟲はいまいましさうにひとりで愚痴をこぼしました。『けれども圖體ばかり大きくたつて何だ！』

かう言ひながら、甲蟲は細い脚を擴げて、伸びをしました。

すると其處に居た鍛冶屋が、この獨語を聞いて、

『おいおいお前は何が不足で、そんな愚痴をこぼすんだ？』

と尋ねました。

『黄金の沓さ！』と甲蟲が答へます。

『なに、黄金の沓が欲しいつて？』と鍛冶屋は目を圓くして言ひましたが、『笑談ぢやあない。お前は氣でも違つたんぢやないか？』

『黄金の沓が欲しければ、惡いのかい！』と甲蟲は本氣になつて、言返しました。『あの大きな獸類にはちやんと人がついて居て、刷毛で擦つてもらふやら色々な御馳走を運んでもらふやら、あんなに大事にされて居るけれど、私だつて、何もあいつなんぞに見くびられる理由はない！　かうして天子樣の厩に居るからには、身分に變りはないぢやないか？』

『だが、あの馬は何故黄金の沓をいただいたのか？お前はまだその理由を知らないんだね？』

と鍛冶屋に言はれると、甲蟲はいよいよぷりぷりして、

『知らないつて？　私はちやんと知つてるよ。私に恥辱をかかせるつもりなのさ！』と言ひましたが、

『本當にこんな恥辱をかいたことはない。――だから私はもうこんな處を出て、廣い世界へ行かうと思つてるんだ。』

『行きやあがれ！』

と鍛冶屋は荒々しく呶鳴りつけました。

『何て失禮な人だらう！』

と甲蟲は鍛冶屋に言返して置いて、そのまま翅を

擴げて、ぶうんと飛んで行きました。そして少時行くうちに、色々な花の咲き滿ちた美しい花園へ來ました。

甲蟲は花園へ降り立つて、翅を休めて居ると、薔薇や百合の匂ひが、ぷんぷんと鼻へ入つて來ます。

その時赤い楯のやうな恰好をした翅に、眞黑い斑點のある瓢蟲が、小さな身體をして、盛んに花の間を飛び廻つて居ましたが、その一匹が甲蟲を見つけて話しかけました。

『ねえ、君、綺麗だらう？』と言つて、瓢蟲は愉快さうに飛び廻つて居ます。どうだ、いい匂ひぢやないか――ねえ、この綺麗なこと！』

『私はちつといい處から來たんだ。』と甲蟲は自慢顏に答へました。『君たちはこんなのを美麗だつていふのかい？　だつて、此處には肥堆一つないぢやないか。』

かう言つて、甲蟲は又花園を出て、一つの大きな枯草の堆の蔭まで來ると、一匹の芋蟲が這ひ廻つてゐました。

『世界は何てまあ美麗なんだらう！』と芋蟲は獨語を言つて居ます。『日がこんなにぽかぽかして、何もかもこんなに美くしくつて、これでぐつすりと睡込んで、死んだやうになつて、今度目が醒めると、蝶になつて飛出すのだ。』

甲蟲は芋蟲の獨語を聞くと、驚いたやうな顏をして話しかけました。

『おいおい、そんな出鱈目を言ふもんぢやない！お前が蝶になつて飛廻はるんだつて！　そんなことを誰が本當にするものか。私は天子樣の厩から來たのだか、あすこに居る者で、誰だつて、そんなことを思ふ者はありやしない。あの天子樣のお氣に入りの馬だつて――お前は知るまいが、あの馬の穿いて居る黃金　沓は、私が脫いで來たものなんだよ。――あの馬だつて、そんなことは知りはしまい。さあ、翅があるなら出してお見せ！さあ、早く飛んでごらん！私のやうにかうして飛んでごらん！』

かう言つて、甲蟲はいきなり翅を擴げて、元氣よく飛び上りました。飛びながらも、何かむしやくしやしてたまらないといつた風に、ぷつぷつと獨言を言つて行くのでした。

『何もこんなに氣の揉める筈はないのだけれど、それでも腹が立つて、腹が立つてたまらない！』

こんなことを言つてゐるうちに、一つの廣い芝生へ來たので、甲蟲は芝の上へ下りて、一休みすると、急に疲れが出て、うとうとといゝ心持に眠つてしまひました。

その間に、急に空模樣が變つて、大變な夕立になりました。甲蟲は雨の音で、目が覺めたので、直ぐに土の中へ潛り込まうと思ひましたが、その暇もなく、瀧のやうに落ちて來る大雨に洗ひ流されて、ころころと轉がりながら腹這ひになつたり、仰向けになつたりして、夢中になつて泳いで行きます。勿論飛ぶことなぞは、考へる暇もなかつたのです。甲蟲はもうとても助かる見込はないと思つて、じつとして流さ

ゐて居りました。

そのうちに身體がふわりと浮上るやうな氣がした いで、甲蟲は眼の緣へたまつた水を拂ひ落して見ると、眼の前に何かきらきらした、白い物が見えました。それは雨に洗はせるために擴げてあつた襤褸片でした。甲蟲は直ぐにその上へ這ひ上つて、水じみた布の折目の中へ潛り込みました。

雨は夜中降り通しました。びしよびしよした布片は、溫かな脛から見ると、決して氣持のいゝ住居ではありませんでした。それでも外にどうしようもないので、甲蟲は、一晩中、じつと布片の上へかおりついてゐました。

夜が明けて、甲蟲は少し這ひ出して見ましたが、昨日からの天氣には、もう腹が立つて、腹が立つてたまりません。布片の上には、二匹の蛙が、嬉しさうに、四つの目を光らして、坐つて居ました。

『どうだい。豪氣な陽氣ぢやないか。』と一匹の蛙が

元氣よく話しかけます。何ていい心持だ！布片がまあこんなに水を吸ひ込んでさ。僕の後趾は、自然と浮きあがつて、まるで泳ぎ出すばかりだ。』

『まつたくだよ。』ともう一匹の蛙も言つてました。

『僕はあの燕にでも聞いて見たいくらゐだ。あの燕は世界中を廻つて歩くけれども、こんないい陽氣は何處の國へ行つたつて、滅多にあるもんぢやない。この降りはどうだい！この濕り工合はどうだい！これでなくつちや、溝の中にゐるやうな氣持はしない。これがいやだなんていふ奴があつたら、其奴は自分の生れた國にゐられない奴だよ。』

かう話してゐるのを聞いて、甲蟲は側から口を出しました。

『君たちは天子樣の脛へ行つたことはあるまい？あすこの濕り工合と來ちや、そりや暖かくつて、いい氣持だが、あれなら僕も陽氣なんだが、持つて歩けないから仕やうがない。此處には、僕のやうな、身分のある者が、ちよいと脚息めをするやうな肥堆はないのかい？』

かう言ひましたが、蛙には何のことだか、よく解らなかつたので、目を光らして默つてゐました。で甲蟲は疊みかけて三度尋ねて見ましたが、やつぱり返事がなかつたので、

『僕は同じことを二度聞直したことはないんだ！』

と忌々しさうに言つて、角を振立てて、飛んで行きました。

少し行くと、其處には壞れた植木鉢があつて、その下に挾蟲の一族が住んでゐました。この蟲は澤山の家族が一しよになつて、ごたごたと一つ處に住むのですから、廣い場所はいりません。女親はみんな子供自慢で、てんでに自分の子が、一番美麗で、敏捷いやうに思つてゐます。

『うちの子を見て下さい。本當に可愛い、罪のない子ですよ！小つぽけな身體をして、何かやり出すともう夢中になつてやつてるんですよ。わたしはもうあの子の大きくなるのが樂みで、樂みで仕やうがないんですよ。』

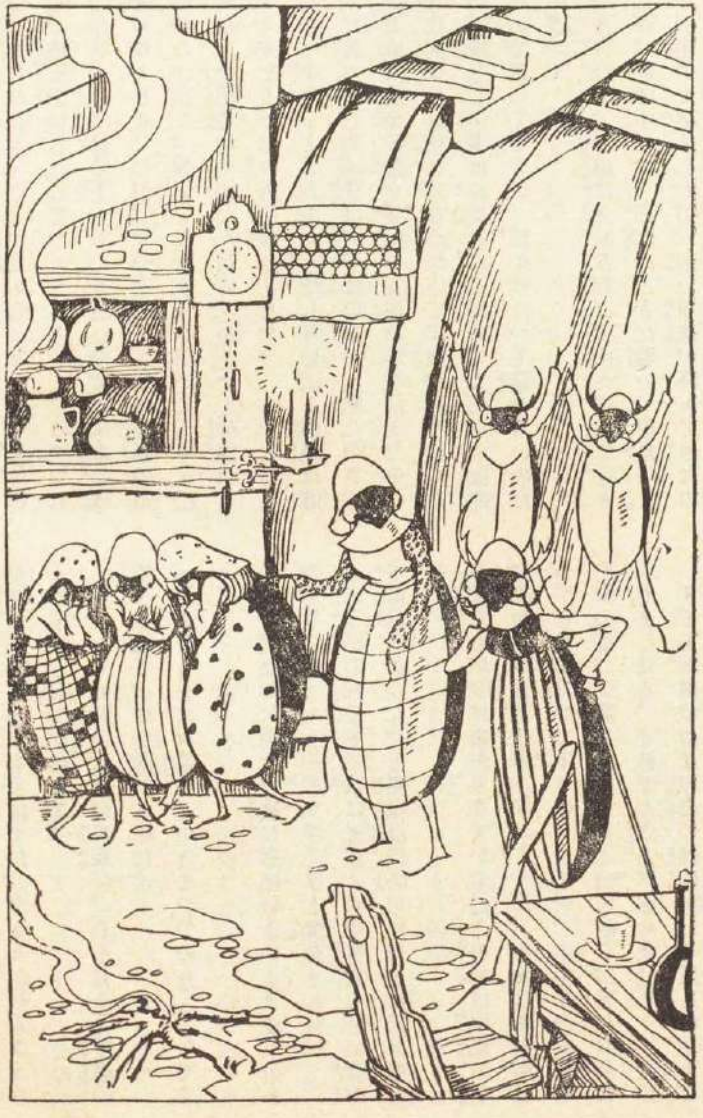
と一人が言ふと、他の一人も負けない氣になつて

『うちの子を見て下さい。卵から這ひ出すと、もう直ぐ遊びに出かけましたよ。あんなにちよこまかして、今に角を振落さなければいいと思ふくらゐなんですよ！わたしはもう樂みで、樂みで仕やうがないんですよ！ねえ、甲蟲さん、さうでせう？』

と話しかけるのです。甲蟲は返事に困つて、

『本當にあなた方は仕合せだ。今にみんな立派になるでせう。』

と言ふと、挾蟲の母親は、めいめいに自分の子をほめられたと思つて、一生懸命に甲蟲を引留めて、鉢の缺片の下へ引張り込まうとするのです。甲蟲は體を小さくして、植木鉢の下へ這ひ込んで行くと、澤山の挾蟲が寄つて來て、



『どうかわたしのうちの息子を見て行つて下さい。それは可愛らしい、小つぽけな身體をしてゐながら本當に賢いのですよ。お腹でも痛くなければ、泣くなんてことは滅多にないんですが、…それでもあのくらゐな年頃には、よくお腹を痛くするものですからね。』

と、みんな同じやうなことをいつて、子供の自慢をします。その間に子供たちは、お互にしやべつたり、戯け合つたり、尻尾についてゐる小さな挾で、甲蟲の鬚を挾んだりします。それを見て、母親たちは、

『あれ、あの通り、一寸の間でも、じつとしてはゐないのですよ。本當に困つた惡戯さんだよ！』

といつて、目を細くして、子供たちの遊ぶのに見とれてゐます。

だが、甲蟲はもうそんな自慢話にも聞き倦ぐねて此處からどのくらゐ行つたら肥堆のあるところへ出られるだらうかと尋ねると、挾蟲は、びつくりした顏で、

『それは大變ですよ。その溝を渡つて、彼方の大きな世界へ出なければならないんですもの。わたしたちは、どんなことがあつても、この子供をあすこへやらうとは思ひません。行くまでには、死んでしまひますよ。』

といふのを聞いて、甲蟲は角を振りながら、

『それでは僕は試しに行つて見て來よう。』

と言ふや否や、挨拶もせずにその場を立去りました。

溝の縁で、甲蟲は四五匹の仲間に會ひました——自分と同じやうな甲蟲の仲間に——。

『僕らは此處で不自由なく暮して居るんです。』とそのうちの一個が言ひました。『まあ、この泥の中へ降りて休んでいらつしやい。旅をして來たのでは、嘸くたびれたでせうから。』

『全くくたびれた！』と甲蟲が言ひました。『布片の上で、終夜雨に打たれて、もうへとへとになつてしまつたり、植木鉢の下へもぐり込むので、片方の翅を痛めたりしましたが、やつとのことで、仲間のゐるところへ來て、蘇生つたやうな心持がしますよ。』

『君は多分肥堆から來たんだらうね？』と仲間のうちでも年をとつた一人が尋ねました。

『そんな下等なところから來やしない。』と甲蟲は偉さうに答へました。『僕は天子樣の厩から來たのさ。僕は其處で黄金の沓を穿いて、生れたんだよ。そして今は大切なお使を言ひつかつて、旅をしてゐるんだが、併しこの事は秘密なんだから、これだけは聞かないで置いて下さい。聞かれたつて話せないのだから。』

かう言つて、甲蟲は立派な泥々の中へ降りて行きました。泥の中には、三匹の、まだ若い、甲蟲の女の子が坐つて居ましたが、若い甲蟲が降りて來たのを見ると、なんにも言はずに、きまりがわるさうにくすくすと笑つて居ます。

するとその背後にゐた母親が、じろじろと甲蟲の樣子を見て、かう言ひました。

『三人ともまだお婿さんがきまつてゐないんですよ。』

かう言はれたので、娘たちはいよいよきまりがわるくなつて、もう一度くすくすと笑ひました。

『天子樣の厩でも、僕はまだこんな可愛らしい女の子は見なかつた。』と甲蟲は感心しにやうに言ひました。

『娘たちがつけあがりますから。』と母親は甲蟲の顏を眺めながら言ふのです。『どうぞ、そんなお世辭はおつしやらないで下さい。ですが、あなたのおつしやるのは、笑談でもなささうですから、若しお氣に入りましたら、どれでも差上げませう。』

すると其處にゐた甲蟲の仲間が、一度に聲をあげて、

『萬歲！』

と叫びました。これですつかり約束がきまつて、若い甲蟲は、直ぐに此家のお婿さんになり、娘の一個と結婚しました。

その翌日は何事もなく暮しましたが、三日目になると、そろそろ自分のお嫁さんになつた甲蟲や、その同胞の甲蟲に、何か食物を捜して來てやらなければならないことが分つて來ました。

『これは一杯食はされた。』と若い甲蟲は、始めて覺つたやうに言つて、じつと考へてゐましたが、『今度は、あべこべに、こつちから一杯食はしてやらう。さうだ、こんなところにゐてはたまらない！』

かう言つて、そつと溝の中を出ると、すんずん歩き出しました。そして若いお嫁さんを置去りにして一日一晩歩き續けました。

その後で、他の甲蟲は、いい婿を取つたと思つたら、とんだごろつきであつたと話し合ひました。

そのうちに、甲蟲は水のある處へ來たので、玉菜の葉へ乘つて、溝の上へ浮び出しました。その時には、もう夜が明けてゐましたが、丁度溝の縁を通りかかつた二人の子供が、ふと甲蟲の流れて來るのを見つけて、何か言ひながら、摘みあげました。そして掌へのせたまま、何かしきりに講釋をして居ましたが、甲蟲は、隙を見て、いきなり手の中から飛出しました。いい鹽梅に、翅はもうすつかり乾いてゐたので、甲蟲は一飛びに、近くの溫室のところまで飛んで行つて、硝子屋根の隙間から、中へ舞ひ込みそつと草の葉を分けて、溫かな土の中へ潜り込みました。

『まあ、これで安心だ！』と思ふと、甲蟲は氣がゆるんで、そのままぐつすりと寢込んでしまひます。その間に、天子樣の馬が死んで、自分があの黄金の靴を穿かせられた夢を見ました。

甲蟲は何もかも氣持のいいことばかりなので、目が覺めると、直ぐに土の中を這ひ出して、四邊を見廻しました。まあ何といふ立派な處だらう！大きな大きな、棕梠の木が、天井まで成長がり、日の光を受けて、きらきらと光つてゐます。その下には色々な草が綠色の葉を重ねて、火のやうに眞紅なのや、琥珀のやうに黃いのや、雪のやうに白いのや、色樣樣の花を咲かせてゐました。

『こんなに澤山草のある處はありやしない。』と甲蟲は目を丸くして言ひました。『これがみんな腐り出したら、どんなに旨いだらう！豪勢な食物庫だなあ！仲間だつて、少しは居さうなものだ。どうれ一つ探してやらうか。話相手がなくつちや、淋しくつてたまらない。まあ、何しろ偉いことになつたぞ、有難い、有難い！』

甲蟲は、馬が死んだり、黃金の沓が自分のものになつたりした、嬉しい嬉しい夢のことを思ひ出して溫室の中を歩いて行くと、不意に、人の手が、自分の體へ觸つて、ぐつと押へつけられました。

それは一人の友達を連れて、溫室へ入つて來た植木屋の子が、甲蟲を見つけて、惡戲の種に捕へて行かうとしたのでした。

甲蟲は葡萄の葉へ包まれて、溫かなズボンの衣嚢へ押込まれました。その中で、甲蟲は一生懸命に身をもがいて、逃げようとしましたが、子供はズボンの上からじつと握りしめて、大急ぎで庭續きの大きな池の方へ駈け出して行きました。

甲蟲は毀れた木沓の上へのせられて、沓の眞中には、一本の棒を立てて、帆柱の形にし、甲蟲を其の帆柱へ縛りつけて、恰度この船の船長といふ恰好にして、水の上へ流されたのです。甲蟲の目には、大變大きな潮水のやうにも、本當の海のやうにも見えたので、怖ろしさに身をもがいて、仰向けになり、六本の趾をばたばたさせてゐました。

船は沖へ沖へと流れて行きます。が、流れの早いところまで出ると、子供は、ズボンを捲りあがて、水の中へ入つて、船を元の岸へ戻すのでした。

最後に、船が丁度また流れの早い所まで出かかつた時に、子供は、庭の方で呼ばれたので、船をすつぽかして、行つてしまひました。

船は岸を離れて、次第々々に大洋へ乘り出して行きます。甲蟲はどんなに怖かつたでせう！けれども身體はしつかりと帆柱へ縛りつけられてゐるので、飛ぶことも出來ないのです。

その時、一匹の蠅が來て、帆柱へとまりました。『好い天氣ぢやないか！』と蠅は小さな翅を動かし

て話しかけました。『僕も少し休ませて、日向ぼつこをさせて呉れたまへな。君はひとりでうまいことをしてゐるよ。』

『何を言ふんだ。』と甲蟲は悲しさうに言ひました。

『此通り縛られてゐるのが、君には見えないのか？』

『おやおや！だつて、僕はまだ縛られちやゐないよ。』と言つて、蠅はあわてて飛んで行きました。

蠅の飛んで行つた後を、怨めしさうに見送つて、甲蟲は、胸の中でかう思ひました。

『ああ　これでやつと世の中が分つた。世の中といふものは、つまらないものだ。世界中で正直なものは、僕ばかりなんだ。初めには、黄金の沓で耻をかかせるし、次には濡れた布片の上で寢たり、窮屈な穴倉へ潜つたり、そしてお終ひには、女房と二人で乞食をするやうな目にあはせる。やつと又廣い世界へ出て、世の中の樣子を見たかと思ふと、子供に捕まつて、縛られて、こんな怖ろしい海の中へ流される。僕がこんな苦勞をしてゐる間も、あの天子樣の馬は、黄金の沓をはいて、威張つて歩き廻つてゐるに違ひない。それが何よりも癪にさはる。けれども蟲といふものは、決してこの世界で、他の慈悲を受けてはならない！僕のやつて來た事は、確かに面白い經驗であつた。併し誰れも知らなかつたら、何の役にも立たない！世の中なんてものは、本當につまらないものだ。』とひとりで言ひながら、甲蟲は池の上を流れて行きました。けれども、まだ最後ではありませんでした。恰度その時、二三人の少女を乘せた小舟が、溯つて來ました。

『あら、木の沓が流れて行くわ。』と一人の少女が言ひました。『まるで舟のやうだわ。』

『おやおや小さな蟲が縛られてゐるわ！』と他の少女が言ひました。

小舟は木の沓の方へ寄つて來ました。そして一人の少女が水の上から摘み上げると、他の少女は、袂から小さな鋏を出して、甲蟲に傷をつけないやうにそつと絲を切りました。それから岸の方へ舟を寄せて、蹠へ上ると、少女は甲蟲を草の上へ置きました。

『さあ、歩いてごらん！飛んでごらん！』と少女は言ひました。さあさあ好きな處へ飛んでおいで。』

甲蟲は翅を擴げて、ぶうんと飛び上ると、いきなり、眼の前にあつた大きな建物の窓の中へ舞ひ込みました。少時して四邊を見廻はすと、そこは以前の廐で、自分は天子樣の馬の、綺麗な、柔かい、長い鬣の中へ、すつぽりと埋まつてゐるのでした。

甲蟲は馬の鬣の上へ坐りながら、ひとりでかう言ひました。『僕は天子樣の馬に乘つてゐる、――恰度人が乘るやうに乘つてゐる。ああ、さうだ。その通りだ、全くだ。「あの馬は何故黄金の沓を穿いてるのか？」――かういつて尋ねたつけ、あの鍛冶屋が。今になつてすつかり解つた。馬は僕のために黄金の沓を穿いてゐるのだ！』

この時、甲蟲はすつかり機嫌が直つて、いい心持になりました。

『旅をすると、頭がよくなるのだ。』とひとりで呟くのでした。

太陽は頭の上からかんかんと照らして、四邊の物が、みんないきいきと輝いてゐます。

『世の中といふものは、大きく考へれば、さう惡いものでもない。』と甲蟲は言ひました。『本當に氣の持ちやうだ！天子樣の馬は、黄金の沓を穿いてゐる。併し黄金の沓を穿いた馬に乘るのは、自分だと思へば、世の中は中々愉快なものだ。よしよし、降りて行つて、仲間を搜してやらう。そしてみんなにこの事を話してやらう。』と甲蟲は馬の背中で言ひました。『旅行中に出會つた事を、殘らず話して、そしてあの馬が黄金の靴を光らしてゐるうちは、僕はもう何處へも行かないと言つてやらう。』

（をはり）

親指姫

齋藤佐次郎

或ところに、小さな家と小さな花園を持つた女の人がゐました。この人は大層不仕合せな人でした。私はこの女の人のことを、皆さんにお話したいと思ふのです。

女の人は魔女のところへ行つて、

『私は子供が一人ほしくつてなりません。子供がゐてくれたら、笑ひ聲が部屋中にひゞくでせうし、花までが子供がゐるために綺麗に見えるでせう。』と、いひました。

すると、魔女は女の願ひをきいて、

『あゝ、それ位のこと何でもない。こゝに大麥が一粒あるから、これを植木鉢に植ゑて、大事に育ててご覽。それからどうなるか、まア樂みに見ておいで。』

と、いひました。

女の人は急いで家へ歸つて、一粒の大麥を植ゑて見ました。しかし、急いで歸つたからといつて、魔女にお禮を云ふことは忘れませんでした。そればかりか、六ペンスの銀貨さへ置いて來たのです。

さて、それからどうなつたと思ひますか。大麥を植ゑたところが、たちまち大きな、美しい花が咲いたのです。それは未だ蕾でした。花びらがかたくくつついてゐましたが、チューリップの花のやうでした。全くきれいなチューリップでした。赤と黄色の混つたチューリップでした。

女の人は花を可愛がりました。かゞんで美しい蕾に接吻しました。ところが、唇が花瓣に觸れた刹那、ぱつと花が開いたのです。何といふ不思議でせう！そこに、花のまん中に、ちひちやな子供が坐つてゐたのです。まア何て小ちやな可愛い女の子なのでせう。

みんなはこの女の子のことを、親指姫と呼びました。大きさが、女の親指ぐらゐしかなかつたからです。

親指姫の眠るところは何處だと思ひます？　藍色の筋のついた胡桃の殼が親指姫の搖籃ですよ。

眠る時には、搖籃の中に、小ちやな菫の花を敷いて、それからうす桃色の薔薇の花びらを上から掛るのです。

次にどこで遊ぶのだと思ひますか。テーブルが運動場なのです。女の人は、テーブルの上に水を入れたお皿を置いてくれました。可愛いゝ親指姫は、それを湖だといつてゐました。お皿のまはりには、花の香りがぷんぷんとしてゐます。いろ〳〵の花がお皿の縁に垂れ懸つて、うす綠の莖が水ほしさうに水面に垂れ下つてゐました。

湖の中には大きなチューリップの花びらが浮んでゐます。これが親指姫の小さなボートでした。親指姫は、そのボートの中に坐つて、二本の白い馬の毛の櫂を巧みに操つて、湖の岸から岸へと漕いで行くのでした。親指姫はあつちこつち漕ぎながら靜かに歌をうたひます。女の人は耳を傾けてそれを聞きますが、こんなに氣持ちの好い歌は聞いたことがない

と思ひました。

ところが、ふいにこんな悲しい事が起つたのです。

窓硝子の壊れたところから、大きな蟇が跳び込んで來ました。それは大きな、醜い蟇でした。蟇はぴよんとテーブルの上に跳びのりました。そこには、親指姫が、ちつちやな搖籃の中で、うす桃色の薔薇の花びらをかけて、夢を見てゐたのです。

蟇は親指姫をちらと眺めました。このみつともない蟇の婆さんがです。

『この娘は何て美しいのだらう。この娘はうちの綺麗な息子の嫁に恰度いゝ。』と、蟇は嗄れ聲でいひました

それから蟇は親指姫の眠つてゐる小さな搖籃を抱き上げて、窓硝子の壊れ目から花園の中へとび下りました。

花園の下を川幅の廣い小川が流れてゐました。このぬかるみの岸の下に、年寄りの蟇の婆さんと息子が住んでゐるのです。

親の蟇は自分の息子をどんなに綺麗だと思つてゐるのでせう。しかし、實は、親蟇そつくりのみつともない奴なのです。

蟇の息子は、ちつちやな搖籃の中に親指姫がゐるのを見て、喜んで咽喉を鳴しました。

『そんなにはしやぐもんぢやないよ。この子が目を覺すぢやないか。よく氣をつけてゐないと、逃げて

行かれちやふかも知れないよ。それにちよいと風が吹いても、持つて行かれてしまふのだからね。この娘はかげらふのやうに輕いんだもの。』と、親蟇がいひました。

それから親蟇は、河の眞中へ親指姫を運んで行きました。

『ここなら大丈夫だらう。』と云つて、親蟇は、大きな睡蓮の葉つぱの上に、そつと親指姫の搖籃を乘せて、それからぢやぶ〳〵泳いで、息子のところへ戻つて來ました。

『泥の下へ一番立派な部屋をこしらへるんだよ。それからお前と、あの娘と夫婦になるんだよ。』と親蟇がいひました。

可哀さうに、ちひさな親指姫は、未だ醜い親蟇も見たこともないし、醜い息子の蟇も見たことがないのでゝ。

朝早く、目を覺した時、親指姫はどんなに泣いたでせう！ 周圍はどこもかしこも水なんです。どうして岸へ着くことが出來ませう！ ほんとに可哀さうな親指姫です！

泥の中では親蟇が花嫁の親指姫を喜すために、一生けんめい金鳳花や睡蓮の花の蕾で、部屋を飾つてゐました。

『さあ、これから行つて、あの娘の小さな寢床を持つて來て、ちやんとこゝへ置くやうにしよう。』

かう云つて、親子の墓が揃つて親指姫のゐる葉つばのところへ泳いで來ました。

『こゝにゐるのが私の綺麗な忰です。これがあなたのお婿樣になるんです。』

かう云つて、親墓は水の中で丁寧にお辭儀をしました。といふのは、親指姫に對して出來るだけ禮儀深くしなければいけないと思つたからです。

『があ、があ。』

息子の墓は、綺麗な小ちやい花嫁を眺めた時、これだけしか口がきけませんでした。

それから親子の墓は、ちひちやな可愛い寢床を運んで行きました。そして親指姫を一人殘して行きました。

親指姫の綺麗な小さい顏が、涙でどんなに汚れてゐたでせう。涙がとめどもなくボタ〳〵河の中へ落ちました。あちらこちらと泳ぎ廻つてゐた魚でさへ、『今日はどうしてかう雨が降るのだらう。』と思つた程はげしく落ちて來たのです。

魚たちは頭をもちやげて、一人置きざりになつてゐる親指姫を眺めました。

『あの娘を、醜い墓なんかと、夫婦にしてはいけない。あの娘を、醜い墓なんかと夫婦にしちやいけない。』と口々にいつて、魚たちは親指姫を見守つてゐました。

さて、小さな魚たちが、親指姫を助けるために何をすることが出來たでせう。

ところが、この小さな魚たちは、何といふ利口ものでしたらう。

親指姫が坐つてゐた葉つばには綠色の莖がついてゐました。魚たちは小さな鋭い齒でそれを嚙みました。いつまでも嚙んで、とう〳〵綠色の莖を嚙み切つてしまひました。葉つばは親指姫を乘せたまゝ河を流れて行きました。

『助かつた！助かつた！』と河を流れて行きながら親指姫はうれしさうに歌ひました。その聲は、仙女の鐘の音のやうにほがらかに響きました。そしてもう醜い親墓と子墓が、追ひつく事の出來ない程遠くへ來てしまひました。

水に浮んで親指姫が流れて行くと、小さな野の鳥が周圍に來て歌をうたひました。岸の上では釣鐘草がお辭儀をしてゐました。

蝶がお日樣の照つてゐる中でひら〳〵と舞つてゐます。一羽の白い、きれいな蝶は、親指姫の乘つてゐる葉つばの上へ來て飛びました。蝶は、親指姫がすつかり好きになつて、傍へ來て止りました。

親指姫は美しく仕合せでした。周圍には小鳥がゐます。近くには花が咲いてゐます。水は夏の日に照されて、黃金のやうに輝いてゐました。可愛い〻親指姫に、この上、何の望みがありませう？

親指姫は着物の帶をひとつ解いて、その片々の端を蝶に結びつけ、もう一つの端を葉つばに結びつけました。葉つばと、親指姫と、蝶は、水に浮んで流れて行きました。

すると、不意に、一匹の大きな黃金蟲がぶんぶん唸りながら飛んで來て、ちらと親指姫の姿を見ました。可哀さうに、黃金蟲は親指姫のところへ飛んで來て、そのちひちやな腰に爪を引つかけて、ふうと木の上へ連れて行つてしまひました。

可哀さうな、親指姫は、どんなにびつくりしたでせう！　また小さな友達の蝶を失つたことをどんなに悲しんだでせう。蝶はとび去つたかしら、それとも帶で結れて、うごくことが出來なかつたかしら、と親指姫は案じました。

黃金蟲は、親指姫にすつかり魂を奪はれてしまつて、一番大きな木の葉を見つけて、それへそつと親指姫を乘せました。黃金蟲はいろいろの花から蜜

を取つて來ました。親指姫がそれを吸つてゐると、黄金蟲はそばに坐つて、お前さんは何て綺麗なんだらうといひました。

ところが、木の上には外にも黄金蟲がたくさんゐて、みんな親指姫を見に來ました。そして『この娘はちつとも綺麗ぢやない。』と、云ひました。

『足が二本きりしかないぢやないか。』といふ者もあるし、

『觸角もないせ。』と、いふものもありました。

また中には、痩せ過ぎてゐると云ふものもあれば、肥り過ぎてゐるといふものもあつて、やがてみんなが寄つてたかつて、『何て醜い娘なんだ。何てみつともない娘なんだ。』と、ぶんぶんわいわい、惡口をいひました。かうは云はれたものゝ、小ちやな親指姫は、一番綺麗で、一番上品な娘であつたのです。

みんなが惡口を云ふものですから、親指姫をつれて來た黄金蟲までが、この娘を賞めるのは馬鹿げたことだと考へました。

そこで黄金蟲はもう一度親指姫を眺めました。

『綺麗なのかしら？　いゝや、そんなに綺麗ぢやないんだ。』

そこで黄金蟲は、もう親指姫をどうしようとも思はなくなつて、外の黄金蟲と一緒に、みんなで飛んで行つてしまひました。ただ、親指姫を木の上から降して、雛菊の上へ置いて行つてくれました。親指姫はおい〳〵泣きました。自分は大そう醜いのだ——黄金蟲が自分と一緒にゐてくれないほど醜いのだと思つたからです。けれども實は、親指姫は世界ぢうで一番美しい娘であることは、皆さんが御存知の通りです。

親指姫は、今では、まるつきりひとりぼつちで、森の中に暮してゐました。ですが、ちやうど夏でしたので、悲しいとも、淋しいとも思ひませんでした。暖かな、黄金色のお日樣は優しく照つてゐて呉れますし、小鳥は歌をうたつて呉れますし、花はみんなお辭儀をします。どうして淋しい事がありませう？

まつたく、親指姫は仕合せでした。花の蜜を食べて、黄金色の金鳳花で露を飲んで、一日ぢう、踊つたり、歌をうたつたりして暮しました。

そのうちに、夏も過ぎて、秋が來ました。小鳥たちは暖かな國へ飛んで行かうと囀き始めました。花も凋れかけて、首をうなだれました。秋も過ると、冬が來ました。寒い、寂しい冬が來ました。

親指姫は寒さにふるへました。着物は薄い上に、古くなつてゐました。きつと凍えて死ぬに違ひないと考へて、親指姫は萎れた木の葉で、身體をくるみました。

やがて雪が降りはじめました。一きれの雪でも親指姫の息をとめるかと思はれました。それほど親指姫はちひちやいのでした。

森の直ぐそばに畑がありました。もうとつくに黄金色をした穀物の收穫もすんで、今では、干からびた短い切株が殘つてゐるばかりでした。しかし、その切株が、ちひちやな親指姫には、大きな森のやうに思はれました。

親指姫は凍りついた畑を通り抜けました。親指姫は寒さのためにぶる〳〵震へました。すると、不意に、直ぐ目の前に小さな扉があるのに氣付きました。もう一度よく見直しましたが――たしかに、それは扉でした。

野鼠が切株の下に小さな家を造つてゐたのです。そして、そこでたいさう幸福に暮してゐました。大きな部屋には穀物が一杯はひつてるし、臺所もあれば、食器棚さへ持つてゐました。

『多分ここなら少しは食物が貰へるだらう。』と、思つて、可愛い〻親指姫は、寒さに震へながら、お腹をすかして、扉を叩きました。親指姫はこの二日間何にも食べずにゐたのです。どんなにひもじかつたでせう！

『お前さんは何てちひちやいのだらう！　さあおはいり、そして一緒に何かお食べ。』と、野鼠は扉を開けて、親指姫を見ていひました。

親指姫はどんなに喜んだでせう！　そして、野鼠と一緒に、どんなに旨しく食事をしたでせう！

野鼠は親指姫の動作が立派なので、冬中自分と一緒にゐてはどうだと云ひました。

「ねえ、わたしの部屋のお掃除をして、綺麗にして置いて呉れ〻ばい〻のだよ。それから面白い話をいろ〳〵聞かしておくれよ。』と、野鼠がいひました。

こんな譯で、親指姫は野鼠と一緒に暮すことになつて、土龍君とも會ふやうになつたのです。

野鼠がいひました。

『直きにお客さんが見えるよ。お隣りの土龍さんは毎日、家へ遊びに來るんだよ。あの人の家は大變大きくて、黒い天鵞絨の立派な服を着てゐるんだよ。ところがお氣の毒なことには、盲目なんだよ。だから、お前さんが面白い話を聞かせて上げたら、お前さんをお嫁に欲しいと云ふに違ひないよ』

なるほど、土龍君は大層賢くつて、利口ものでした。ですが、可愛い〻親指姫がどうして土龍なんかを好きになるでせう。なぜかつて、土龍君はお日樣を愛さないし、花も好かないし、そして、土の中の家にばかり暮してゐるんですもの、親指姫は、土龍なんかと夫婦になりたいと思ひませんでした。

ですが、土龍がお隣りの野鼠の家へ訪ねて來た時には、親指姫は厭でも歌をうたつて聞かせなければなりませんでした。

甄蟲、てんとうむし
巣に歸れ

子供が表へ
遊びに出るぞ。

と、親指姫が歌つた時、土龍君はうつとりしてしまひました。こんない〻聲を持つた娘なら、是非お嫁にほしいと考へました。

そこで土龍は、大層お世辭よくしてゐました。土龍はこの頃、自分の家と野鼠の家との間に自分がこしらへた地下のトンネルを通つて、是非野鼠と親指姫に遊びに來てくれといひました。土龍君は地の中を掘ることが大好きなのです。トンネルの中が暗かつたので

土龍君は口に腐つた木を咥へて、案内に立ちました。この木は、暗闇のトンネルの中で炬火のやうに光りました。

ところが、途中に小鳥が倒れてゐました。花が萎れてしまつて、もう冷たい風が吹きはじめたのに、暖かい國へ飛んで行かなかつた小鳥です。

『死んでるんだ。』と、土龍君が云ひました。

小鳥の死骸のあるところまで來ると、土龍君は立ち止つて、鼻をぴよんと突立てて、天井を突ッついて穴を開けました。そこからお日樣の光が射し込んで來ました。

そこには燕が倒れてゐたのです。翼をかたく胴につけて、小さな頭と足は、羽根の中へ入れてゐました。寒さのために凍え死んだのです。

『ちひちやな、可哀さうな燕だこと！』と、親指姫は思ひました。野の小鳥たちは、みんな親指姫の友だちでした。あの長い愉快な夏中、小鳥たちは親指姫のために歌をうたつたり、周圍をくる〳〵飛んで廻つたぢやありませんか。

しかし、土龍君は短い足で燕を蹴飛しました。

『こいつはもう歌もうたへないだらう。小鳥に生れて歌ふことと、飛ぶことときりか出來ないなんて、慘めなことだ。俺は鳥の子供は持ちたくない。』と、土龍が荒々しくいひました。

それから土龍君は、得意さうに、自分の天鵞絨の上衣を撫で廻しました。

『全くさうですとも、鳥に何が出來るもんですか、歌をうたふだけです。寒くならうものなら、からきし駄目なんですからね。』と、野鼠が合槌を打ちました。

親指姫は何にも云ひませんでした。土龍君や野鼠が向うへずんずん行つてしまつた時、屈んで、ちひちやな手で、やさしく鳥を撫でてやつて、それからその閉ぢてゐる眼に接吻してやりました。

その晩、親指姫は眠ることが出來ませんでした。

『わたしもう一度、可哀さうな燕を見に行つて上げよう。』と、親指姫は思ひました。

それから起きて、ちひちやな寢床を出て、乾草で敷物を編みました。それを持つて親指姫は、長い地下のトンネルを通つて行きました　そして漸く燕の死骸のあるところまで來ましたので、その周圍に靜かに敷物を擴げました。それから暖い綿をもつて行つて、鳥のからだの上へ載せてやりました。

『かうして置いたら、いくら地面の中でも暖かになるだらう。』と、親指姫は思ひました。

『さやうなら。』と、親指姫は悲しさうに云ひました。『さやうなら、小鳥さん！　あの長い夏の間中、木の葉が綠色をしてゐて、空が靑かつた間中、あなたもわたしの爲めに歌をうたつて呉れたんでせうね？　さやうなら、可愛いゝ燕さん！』

親指姫は身を屈めて、自分のちひちやな頰を燕の柔かな羽根に押しあてました。

すると、その時、ドキ、ドキ、ドキ、ドキ――といふ微かな音が聞えました。一體何の音でせう？

鳥が生きてゐる筈があるでせうか？　可愛い親指姫はじつと耳を澄しました。さうです、親指姫の耳に聞えたのは、小鳥の心臟の鼓動でした。燕は寒さに凍えただけで、死んでゐたのではなかつたのです。親指姫が持つて行つた敷物と綿の布團が、鳥を溫めたのでした。燕はだん〳〵快くなるでせう。

親指姫には鳥がどんなに大きく見えたでせう！

親指姫は自分が小さいので、何んだか恐くなりました。

しかし、親指姫は身體は小いけれど、勇氣がありました。可哀さうな燕のからだに布團をもつとしつかりとかけてやつて、自分の小さな枕まで持つて行つてやりました。燕を安らかに寢かせてやりたいと思つたからです。

親指姫は翌晩もまたそつと出かけて行きました。

『燕は私を見ることが出來るやうになるかしら。』と親指姫は案じました。

ところが、燕は眼を開いたのです。そして、腐つた木の小さな炬火を持つて立つてゐる、可愛いゝ親指姫を眺めました。

『ありがたう、ありがたう、親指姫さん。間もなく私は丈夫になつて、もう一度、明るい日光の中へ飛び出します。ありがたう、ありがたう、お孃さん。』

と、燕は微かな聲で云ひました。

『だけれど、寒過ぎるぢやありませんか。雪が降つてゐて、凍りついてゐますよ。今は冬なんですね。ここにゐて、溫つてゐらつしやい。わたしが、お世話をして上げますから。』と、親指姫がいひました。それから木の葉に水を汲んで來て、燕に飲ませたりしました。

すると燕は、身の上話をすつかりしました。——燕は、暖かい國へ行かうとして、どんなにか骨折つたといふ事や、どうして茨の藪で翼を破つて、地面に落ちたかといふ事などを話しました。けれど、どういふ譯で、地下のトンネルの中へ來たかといふことに就ては、話しませんでした。

冬ぢう燕はそこにゐました。親指姫は始終腐つた木の炬火を持つて長いトンネルを通つて、訪ねて行きました。けれども土龍君も野鼠も、親指姫が燕の世話をしてゐることを知りませんでした。

とう〳〵春が來ました。地下のトンネルの中の燕が寢てゐるところまでも、お日樣は暖かみを送つて來ました。親指姫は、いつぞや土龍君が、天井にこしらへた穴を開きました。すると、日の光が、燕と親指姫の上に、さつと流れて來ました。

燕は空高く飛ぶことをどんなにか思ひ憧れてゐたでせう。高く、高く、青い、青い空を、見えなくなるまで飛んで見たかつたのです。

『親指姫さん、私と一緒に行きませう。私と一緒に青空と綠の森へ行きませう。』と、燕が云ひました。

けれど、親指姫は、自分が寒さに震へながら、お腹をすかして訪ねて行つた時に、野鼠が親切にして呉れたことを忘れませんでした。で、野鼠の小母さんに別れたくないと云ひました。

『では、さやうなら、さやうなら！　お孃さん。』と燕は云つて、囀りながら飛び立ちました。そして、日の輝く中を高く高く飛んで行きました。

親指姫は燕が大好きでした。燕がだんだん見えなくなつて、しまひには一つの黒い點になるまで、眼に涙を一杯ためて見つめてゐました。

野鼠の家の上では黄金色の穀物が、また實をつけて日光をあびてゆらゆらとゆらいでゐました。ですが親指姫は、穀物の中で迷兒になつては大變ですから、外に出る譯には行きませんでした。

明るいお日樣が照つてゐるところへ行かれないと

は、何といふ可哀さうな親指姫でせう。

『お前さんはこの夏の内にお嫁入りの支度をこしらへて置かなければいけないよ。お前さんにリンネルと毛絲をたくさん買つてあげなければならないね。お隣りの土龍さんは、立流な衣裳のお嫁さんが欲しいんだらうからね。』と野鼠がいひました。

土龍君は、寒い冬の來ない内に、親指姫と結婚したいといつてゐたのです。

そこで親指姫は長い夏の間中、絲取り車の前に坐つて、手傳ひに來る四匹の小さな蜘蛛と一緒に、絲を取つたり、機を織つたりしました。

夕方になると、土龍君は親指姫を訪ねて來ます。

そして、

『夏も間もなく過ぎるから、さうしたら結婚しませうね。』と、云ひました。

しかし、可愛い〻親指姫は、夏が過ぎてしまはないことを願ひました。

感じが鈍くて、お爺さんで、日の光りが嫌ひで、小鳥の歌にも耳を傾けようとしない土龍と、地の下で暮すことになるんですもの！　親指姫はどうか夏が終らなければ好いがと思ひました。

絲を取ることも、機を織ることも、もう濟みました。お嫁入りの晴衣の仕度も、すつかり出來ました。

もう秋が來たのです。

『あともう四週間で、お嫁に行く日になるんだよ。』と、野鼠が云ひました。可愛い〻親指姫は泣きました。

『わたしあんなのそ〳〵した年寄りの土龍さんなんかの、お嫁になるのはいやです。』と、親指姫が云ひました。

『お前さんがそんな馬鹿なことをいへば、わたしの白い齒で嚙みつくから。』と、野鼠が云ひました。『わたしの知つてる限りで、土龍さんのやうに立派な天

鵞絨の上衣を着てゐるものは、一人だつてありはしないよ。穴藏は一杯物がはひつてゐるし、家の中の部屋だつて大いし、お前さんが喜んでお嫁に行かなければならない筈だがね。』

かう野鼠がいひました。

『この地面の下の家から逃げ出す工夫はないかしら。』と、親指姫は考へました。

とう〳〵結婚の日が來ました。土龍君はちひちやな花嫁を引取りに來ました。一生涯美しいお日樣の光と別れることが、どうして親指姫に出來ませう？

『さやうなら、さやうなら！』と、親指姫は泣きながらいつて、光り輝くお日樣に向つて小さな手を振りました。

『さやうなら、さやうなら。』と、親指姫は泣きながら云つて、脚下の赤い小さな花に腕を投げ懸けました。

『懷しいあの燕さんが來たら、よろしく云つて下さいね。』と、花に囁きました『わたしは決してあの人のことを忘れないからと云つて下さいね。』

『チービー、チービー』親指姫の耳に聞えたのは何でせう？

『チービー、チービー。』あゝ燕かしら。

親指姫のまはりに翼の音が聞えました。可愛いゝ親指姫はそれを眺めました。親指姫はどんなに喜んだでせう。長い間世話をしてやつたあの小さな鳥が來たんです。親指姫は泣きながら燕に、こゝにもうゐられない譯を話しました。土龍と夫婦になつて、地の中で暮さなければならない事や、お日樣も、あの光り輝いたお日樣も、見ることの出來なくなることなどを話しました。

『私と一緒に行きませう。ねえ、私と一緒に行きませう。親指姫さん。』と、燕が囁りました。

『あなたは私の背中に乘ることが出來ます。そしてあのの、そ〳〵した土龍の爺さんなんかの來られないほど遠くの、暖かな國へ飛んで行きませう。山や海を越えて、年中お日樣が照つてゐる常夏の國へ飛んで行きませう。』

そこで親指姫は、やさしい燕の背中に坐つて、それから燕が擴げた翼の上にちひちやな足を乘せました。親指姫は帶を解いて、燕の一番強い羽根に、自分の身體をしつかりと結びつけました。

燕は青空高く飛びました。森や湖の上や、雪を頂いた大きな山々の上を高く、高く、飛で行きました。

親指姫は空氣が冷いのでぶる〳〵顫へました。けれども、直ぐに燕の暖かな羽根の下に這入つて、ちひちやな頭だけ出してあたりの美しさを眺めました。

二人は暖かな國へ着きました。ここではお日樣も一きは美しく輝いてゐますし、花も眩ゆいほど咲き亂れてゐました。

燕はずんずん飛んで行つて、白い大理石の御殿に着きました。御殿は半ば壞れてゐて、葡萄の葉が長い細い圓柱に卷きついてゐました。廣い、綠色の葉の間に、燕がたくさん巣を作つてゐます。この中の

一つが、親指姫　乘せて來た燕の巣でした。

『これが私の家です。ですが、あなたはこゝにある花の中で一番綺麗な花の中にゐても好いんです。』と燕が云ひました。可愛いゝ親指姫はうれしくつて〳〵手を拍きました。燕は親指姫を乘せたまゝ、大きな向日葵のところへ飛んで行つて、その大きな黃色い花瓣の上にそつと降しました。

ところが、親指姫がどんなに驚いたと思ひます。花のまん中に、水晶のやうに美しい、可愛いゝ王子がゐたのです。頭には黃金の冠を頂き、肩には二枚の美しい羽根が生えてゐました。恰度親指姫のやうに小さな姿をしてゐました。それは花の精でした。

どの花にも、小ちやな男の子か女の子かの花の精のゐることは皆さんご存知でせう。しかし、この小さな王子は、あらゆる花の精の王樣だつたのです。

可愛いゝ王樣は、親指姫をこれまで見た娘の中で、一番美しいと思ひました。そこで王樣は自分の黃金の冠を取つて、それを可愛いゝ親指姫の頭に置いて、銀のやうな聲で、

『可愛いゝ親指姫さん。あなたは私の花嫁になつて呉れませんか。そして花の精たちを私と一緒に治めて呉れませんか？』と、いひました。

親指姫はどんなに喜んだでせう可愛いゝ王樣が、親指姫と結婚したいとねがつたのですもの。親指姫は喜んで可愛いゝ女王樣にならうと思つたでせう。

やがてどの花の中からも、ちひちやな、可愛いゝ子供がひよこ〳〵と出て來ました。親指姫に敬意を表しに來たのでした。

みんな親指姫に贈物を持つて來ました。贈物の中で一番立派だつたのは、陽炎のやうに薄い一對の翼でした。それを可愛いゝ女王樣の肩に結びつけると親指姫は花から花へと自由に飛ぶ事が出來ました。

燕は自分の巣にとまつて、可愛い親指姫の結婚の爲に、一番いゝ聲でお祝の歌を歌ひました。（をはり）

赤い靴

馬場孤蝶

(一)

ほんとに可愛い、小さい赤い靴でした、ぴか〳〵光る程光澤のいゝモロッコ皮でできた。

ですが、氣の毒なことに、それを穿いてゐた小さい少女のカアレンは虚榮心の強い、我まゝな娘だつたのです。

皆さん、カアレンとカアレンの赤い靴のお話をしませう。

カアレンはほんとに可愛いゝ少さい娘でしたが、ほんとに貧乏でした。夏は何時も跣足で驅け廻つた程、此の少さいカアレンは貧乏でした。それは、穿く靴も靴足袋もなかつたからだつたのです。

冬になると、大きい木靴を穿きました。ですが、可愛さうに、それはほんとに恰好が惡るくつて、堅かつたのです。その上に、その木靴はカアレンの足の脚目のところをひどくつめるので、其所が赤くなつて痛いのでした。

ところで、その村にゐる靴師に、母親がありましたが、その母親は少さいカアレンをよく知つてゐて、カアレンが大きい木靴を穿いて躓き〳〵歩いてゐるのを度々見てゐました。

其所で、その靴師の母親は、仕事場に坐つて、あり合せの赤い布片を取つて、靴一足分だけを切りました。それで、手ぎはよく縫ひ合せて、靴を拵へてそれを小さいカアレンに遣りました。

その靴も恰好が惡るいと、カアレンは思つたのです。けれども、ゴツ〳〵した木の靴よりは餘つぽど好く足に合ふのでしたし、カアレンはそれを穿きますと、それが柔で暖いことを知りました。

カアレンの母親は死んで、カアレンは此の世の中で獨りぼつちになつてゐました。けれども、やがて金持ちの年老つた奥さんがその孤兒の娘の少さいカアレンを可愛さうだと思つたので、村の牧師さんにかう云つたのです。

『その兒を私にくださいまし、私が世話してやりますから。』

カアレンは、

『あの奥さんはあたしの赤い靴を見たんだわ、それで、あたしに親切にしてくれるんだわ。』

と、獨りで云ひました。でも、本當は年老つた奥さんは、カアレンの赤い靴を見たには見たのですが、それをば恰好の惡るいイヤなものだと思つたのです。それで、それは燒いてしまはなければいけないと云つたのでした。

それで、カアレンはもうほんとに小ざつぱりと着物を着せられ、讀み書きも敎はるやうになりました。人々からは一寸可愛いゝ顏立ちだと云つて聞かせられたのですが、カアレンは自分だけでは、鏡を見ては、

『あたしほんとに綺麗なんだわ。』

と、獨りでさう小聲で云ふのでした。

（二）

或る夏のことでしたが、その國の女王さまが、カアレンの住んでゐる村をお通りになりました。女王さまはその娘さんの少さいお姫さまをつれておいでした。

女王さまを拜みにと、人の集まつて來たといふのはありませんでした。カアレンもその人群のなかに入つてゐて、少さいお姫さまを見たのでした。

『何てまアあつさりしたお裝だらう。』

さうカアレンは思ひました。カアレンはお姫さまの小さい白い上衣を見ました。あら、まア、その上衣には總縁さへ附いてゐないんですもの、勿論長い裾なんか引いてゐるのではありませんでした。

それから、お姫さまの小さい亞麻色の毛のお頭——カアレンは定めし冠をめしておゐでだと思つてお姫さまのお頭を見たのです。イヤ、何うして冠なんぞはめしてゐませんでした。

其所で、カアレンの眼は下の方へ向きました——カアレンはお姫さまのおみ足を見ました。お姫さまは、ほんとに恰好の好い、ほんとに綺麗な小さい靴を穿いておゐでゞした。カアレンはまだ生れてからそれ程綺麗な靴を見たことはありませんでした。それは赤い、ぴか〳〵光る程光澤のあるモロッコ皮でできた靴だつたのです。此の世の中にそれ程綺麗なものがまたと一つあらうとは思はれなかつたのです。

（三）

ところで、カアレンが堅信禮を受ける時がやつて來てゐるのでした。年老つた奥さんは、カアレンには新しい上衣を拵へ、新しい靴を買つてやらなければならない、と云つたのです。

カアレンは奥さんと一緒に馬車に乘つて、靴屋へと行きました。カアレンはほんとに澤山の恰好の好い光る靴の列んでゐるのを見て、何といふ喜びでしたらう。けれども、眼が惡くつて、物がよく見えない年老いた奥さんの方は、靴なんぞを見たところでさう年老つた奥さんは云ひました。

『えゝ、ほんとに綺麗に光りますわよ。』

と、カアレンは云ひました。で、その靴がカアレンの足にぴつたりよく合ふのでしたから、それを買つたのですが、年老いた奥さんは、眼が惡いのでそれが赤い靴だつたことはちつとも知りませんでした。

赤い靴なんて飛んでもないことです。さうと知つたら、年老つた奥さんは、堅信禮の式に出る爲めに赤い靴は、何うしたつて買ふのではなかつたのでし格別嬉しいとも何とも思ひませんでした。

所が、その靴屋に赤い靴が一足あるではありませんか。お姫さまが穿いておいでした靴と少しも違はないやうな赤い綺麗な靴だつたのです。カアレンはそれが欲しくてしかたがありませんでした。

『これはみがいたモロッコ皮のに違ひない。まア何んてよく光ることだらう。』

た。けれども、カアレンは靴が赤いのを知つてゐまして、教會堂へ出るために、それを穿きました。

カアレンは自分の可愛い〻小さい足を何んなにか自慢に思つたことでせう。カアレンは自分の足のことよりほか何も頭のなかにありませんでした。

それで、人は皆誰も彼もカアレンの赤い靴を見るのでしたから、カアレンはそれが分つて嬉しくつてしかたがありませんでした。

教會堂の庭へ入つて行きますと、墓石の上の石像が、カアレンの赤い靴を見ました——その石像はカアレンの靴を見るなり直ぐ顏をしかめたのです。

カアレンは、神樣の神壇の前に跪づいた時でも、牧師さんがカアレンの洗禮のことを云つてゐる間でも、監督さんの手が祝福を授けるためにカアレンの頭へ置かれてゐる間でも、さういふ大切な時でさへも、カアレンはやつぱり自分の赤い靴のことばかり思つてゐたのです。風琴の神々しい音が會堂ぢうへ鳴り渡つて、小兒等の好い澄みわたつた聲が神の讃美を歌ひだしました。けれども、カアレンは自分の靴のことしきや思はなかつたのです。

午後になると、カアレンが赤い靴を穿いて會堂へ出たことが、カアレンの世話をしてゐる年老つた奥さんの耳へ入りました。奥さんは大へん怒りました。

『それはほんとにいけない事ですよ。』

奥さんはさうカアレンに云つて聞かせたのです。幾ら古くつても、會堂へは何時でも黑い靴を穿いて行かなければならないといふのでした。

(四)

そのうちに、日曜がやつて來ました。それは、聖餐拜受の日曜でした。

カアレンは、最初の赤い靴を見、次に黑い靴——古い見すぼらしい黑い靴——を見ましたが、やがて直ぐ赤い靴へと眼をやりました——で、その赤い靴

を穿いてしまひました。

それは、天氣の好い、日のよく照つた日でした。年老つた奥さんとカアレンは麥畑の間を通つて會堂へと行きました。路はひどく埃が立つので、赤い靴はもうちつとも光りませんでした。

會堂の入口には、年老つた兵士が立つてゐました。その兵士は撞木杖にすがつてゐました。何といふ不思議な見事な髯をその兵士がもつてゐたことでせう。それは白くはなくつて赤いほんとに長い長い髯だつたのです。その兵士はその髯の爲めに如何にも威かつい恐ろしい顏に見えました。

その年老つた兵士は、年老つた奥さんが會堂の戸口へと近寄りますと、頭が地面へつくかと思ふ位に低くおじぎをして、奥さんの靴の埃を拭かうかと云つたのです。カアレンは小さい足を出して、その年老つた兵士に埃を拭いて貰ひました。

『何とまア美しい踊靴でせう。だが、踊る時には滑

つて轉ばないやうに氣をつけなさいよ。』

さうその年老つた兵士は云つて、カアレンの赤い靴を手でポン〳〵と叩きました。

年老つた奥さんは兵士に小錢を一つやつて、カアレンをつれて、會堂のなかへ入つて行きました。

誰もが皆カアレンの赤い靴を見ました。會堂の中の木像や石像が皆カアレンの靴へと眼を向ました。

カアレンは神壇の前に跪づきました。けれども、やはり眼の前には赤い靴の形が浮んでゐるのでした。カアレンは自分の靴より外のことは何も思ふことができませんでした。

讃美歌の聲が會堂ぢうへ響きわたつても、カアレンの耳へはそれが入りませんでした。カアレンは自分の靴のことばかり思つてゐたのです。

『吾等の父』――『主の禱』――が始まつても、カアレンは祈るのを忘れてゐました。カアレンは自分の靴のことばかり思つてゐたのです。

到頭禮拜式がすんで、人々が皆會堂を出ました。

年老つた奥さんは待たせてあつた自分の馬車へ乘りました。カアレンもそのあとから乘らうとして、足を擧げました。

カアレンがさういふ風に足を擧げた丁度その途端に、まだ入口に立つてゐた年老つた兵士が、

『まアちよいと見なさい。何といふ美くしい踊靴だらう。』さう高い聲で云ひました。

（五）

すると、カアレンはもうこらへてゐられませんでした。カアレンは何うしても踊らなければならない氣がして來たのです。そして、一度踊り出すや否や何うしても、やめることができませんでした。カアレンが何う思つたにしろ、足がひとりでに踊るのでした。それは、まるでカアレンの方が自分の小さい赤い靴の云ふ通りにしなければならなかつたとでもいふ風だつたのです　カアレンは會堂の庭や墓場ぢうを幾度もぐる〳〵踊り廻つたので、奥さんの馬車の馭者がその後を追つ駈けて行つて、やう〳〵捉へて、馬車へ乘せてしまひました。さうなつてさへ、カアレンの足はじつとしてはゐませんで、やはりバタリ〳〵と踊り續けるのでした。

家へ歸り着きますといふと、人々はカアレンの靴を脱がせました。それで、カアレンの足は少し休むことができたのでした。

靴は戸棚へとしまひこまれました。けれども、誰も見てゐませんといふと、カアレンは廊下をそーつと歩いて行つて、押入のところへ行き、戸を開けて可愛い〻小さい靴を何時までも見てゐるのでした。

ところで、そのうちに、年老つた奥さんが病氣になつて、直きにひどくわるくなつてしまひました。お醫者は奥さんはもう餘さり長くは生きてゐないと云ひました　確に、十分氣をつけて看病しなければならない容體でした。小さい孤兒の身を拾ひ上げて、さうまで親切に世話をしてくれた恩があるのですから、これは何うしても、カアレンが何處までも看病しなければならなかつたのです。

けれども、その時、村に大舞踏會があるのでした。カアレンもそれに招かれてゐました。

カアレンは年老つた奥さんの方をちよいと見ました。成る程奥さんはひどくわるさうでした。

そこで、カアレンは、戸棚へと行つて、戸を開けて、赤い靴を見ました。唯見るだけならば何も惡い事はない筈だ、とカアレンは思つたのです。

カアレンはとうとう靴を穿きました。さうしたところで誰も叱る者はなかつたのです。

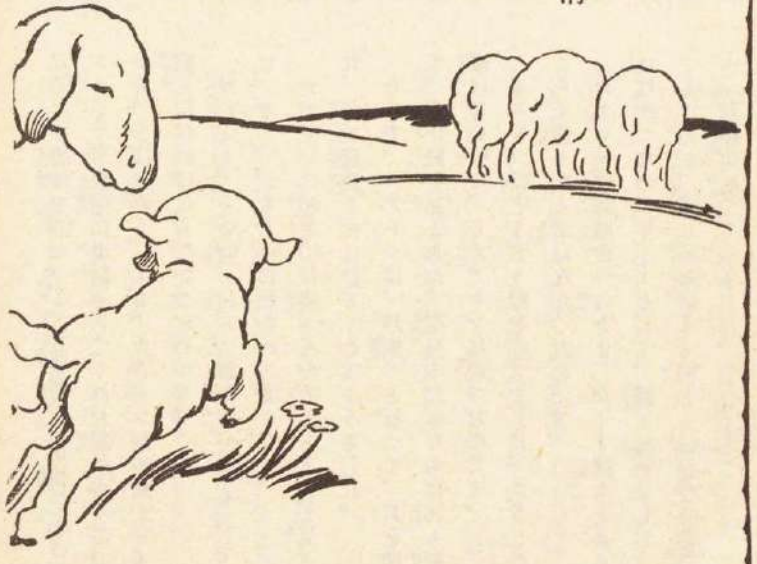
カアレンは舞踏會へ行きました――誰もとめる者はなかつたのです――そして、踊り初めました。

ところが、實に不思議とも何とも云ひやうのないヘンな事が起つて來ました。（つゞく）

羊よ來いく

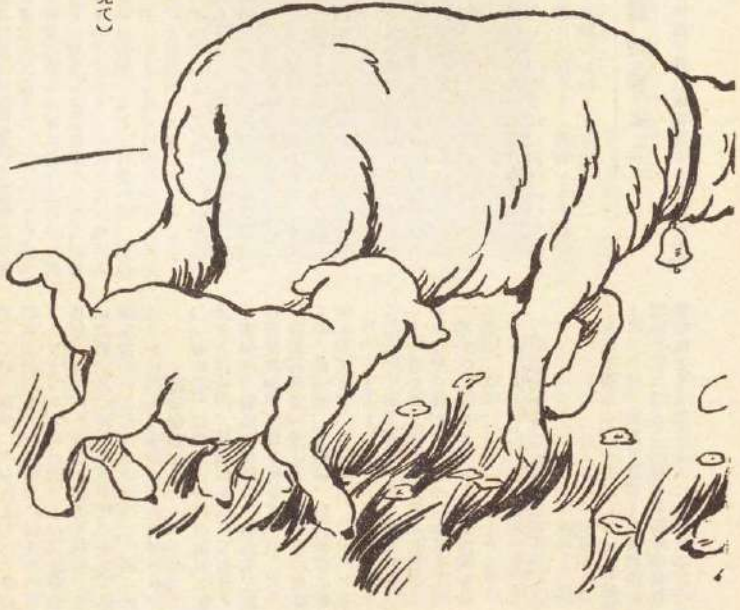
野口雨情

ひつじ　來い
來い
牧場は
遠い
小い　ひつじは
くたびれる



ひつじ
歸れよ
牧場は
暮れる
かけて歸れよ
トツトツと

（本誌前號の表紙「羊よ來いく」の繪を見て）



編輯室より

通信

▽いゝ氣候になつて來ました。編輯所の庭にも梅がほころびかけてゐます。ガラス戸にかこまれた編輯室一ぱいにポカ〳〵と暖いお日樣の光が射込んで來て、この頃では仕事もはかどります。皆樣お變りもありませんか。

▽四月號は御覽の通り『アンデルセン傑作童話號』として發行しました。世界第一の童話作者の作だけに、面白いもの揃ひです。この號に集められた作だけを讀んでも、アンデルセンがどんなに偉い作家であつたか、おわかりでせう。

▽しかし困つたことには、アンデルセンのお話は長いものが多いので、そのために頁をとられて、是非のせなければならないものが次號に廻りました。讀者文藝欄や、附錄の『どちらが偉い？』なども、頁の都合上、止むなく次號に廻つたことをお詫びします。

▽次に楠山正雄先生の『孫悟空と牛魔王』の事に就て一言書添へて置きたいのは、この作は楠山先生が非常な苦心の末に書き上げられたもので、支那の原作を直接に參考にしてお書きになつたものですから、これまでに他の人人が書いた『西遊記』などとは違つて、面白くもあり、筋としても非常に新しいところが多いのです。まだ數回つゞきます。

▽また沖野先生の『どちらが偉い？』に先生が數年間の苦心をこゝに發表されたものですから、愛讀者の方々から大評判をもつて迎へられてゐます。ある學校の校長先生などは、かういふお話こそ兒童に是非讀ませたいものだから、早く一冊にまとめて本にして出版してくれ、課外讀本として使ふからといつて來られました。

▽また、水島先生獨特の童話しと、『ホシローヒルムし』も大評判です。ホシローの名を皆さんにごひろうして置きませう。ホシローとはキンノホシローでして、本字で書くと、金の星郎です。

▽まだ〳〵澤山書きたいことはありますが、今月は先づ〳〵これ位でおしまひにして置きます。五月號はすばらしく面白いもの揃ひです。どうぞ次號をお待ち下さい。

講演部より

○今月も、沖野、野口兩先生とも各地の御招聘をうけて講演に出られました。野口先生の講演旅行に就ては、別項に同先生の報告が出てゐますから御一讀下さい。沖野先生は但馬國の城の崎小學校、京都で數回、それから山梨縣大月の廣里東小學校の主催で數回の講演をなさいました。いづれこの事は次號で同先生がくはしく報告なされます。

◇講演部規定◇

○『金の星』は新しい時代の童話と童謠を普及するために、講演部を設けてあります。

○講師は、童話は沖野岩三郎先生、童謠は野口雨情先生がくはしく報告なされます。

○講演御希望の方は金の星社宛にお申込み下さい。出張費、その他、お問合せに從ひ御返事申上げます。—（終り）—

▽正誤　三月號掲載若山牧水先生の童謠「梅の花のお土產」は、第三行目が「五つ附いた小枝の花が」となつてゐましたが、「五つ附いてた小枝の花が」の誤りでから、こゝに訂正します。

若柳校の新校舍より

野口雨情

全國小學校中、一番はじめに「童謠教育」をとりいれて、童謠と教育との實際的一致な具體的にこゝろみた茨城縣若柳小學校が、童謠振興校として知らるるに至つたのは、兒童の創作童謠が鄉土的色彩に富んだ優秀な作品の多かつたことも一つではあるが、一方には全校の兒童に童謠を奬勵して以來、教育的に著しい効果をあげることが出來たからである。この點については久保田老校長（同校長は本年で三十二年間勤續の模範的校長である）と栗野訓導の直接の努力と、同村長吉田氏の理解ある間接の力にまつところが多かつたのであつた。

私が若柳校をたづねてから今年で三年になる。その後三年の間、若柳校をたづねる機會が一度もなかつた。久保田老校長にも栗野訓導にも村長吉田氏にも全く逢ふ機會がなかつた。二月十七日、茨城縣下館町講演の歸途、偶然に若柳校をおとづれることが出來た。若柳校は高等科を併置して臨波ノ江校と改稱され新築の校舍が建てられてある。私は今、新校舍の一室に前記三氏並に鈴木校長と共に火鉢を圍んで教育上の感想を語り合つたところである。（二月十七日夜、若柳新校舍にて）

最近の寺内萬治郎先生

金の星新誌友名簿

柴崎和子樣（神奈川）　堺小學校兒童文庫　（兵庫）
中村　秀雄（長野）　水草　哲一（滋賀）
石井　克巳（廣島）
川越　俊六（宮崎）
和田夏男樣（青森）
五十嵐優樣（東京）
松井多門樣（靜岡）
櫻塚正夫樣（埼玉）
森田不一樣（埼玉）
杉町綾子樣（長崎）
吉田　直衞（埼玉）
山口俊子樣（三重）
友澤武彦樣（東京）
畠山忠雄樣（秋田）
山本正男樣（群馬）
久保田正文樣（長野）
田中善二郎樣（埼玉）
菅崎三郎樣（大阪）
中村信行樣（愛知）
雨宮恒之樣（山梨）
高澤傳四郎樣（石川）
九香文庫（山口）
高坂清治樣（青森）
前田孚四郎樣（東京）
伊藤小三郎樣（秋田）
井上こと子樣（山梨）
西村　勇樣（東京）
阿部咲子樣（樺太）
倉田太一樣（香川）
岩田修子樣（埼玉）
池上平助樣（愛知）
右田秀子樣（沖繩）
入澤京子樣（島根）
原　龜吉樣（京都）
前田惠吉樣（和歌山）
岡田千加早樣（岡山）
山口秀子樣（兵庫）
早川彦吉樣（東京）
脊野正二樣（宮城）
武藤　泰樣（山梨）
土田彦生樣（福井）
菊地君平樣（宮城）
伊藤邦夫樣（東京）
大串　章樣（茨城）
永積安明樣（大分）
原田有恒樣（廣島）
川村君子樣（青森）
桜井榮三樣（靜岡）
松永弘人樣（熊本）
江川金吾樣（大阪）
服部良子樣（新潟）
鶴岡春吉樣（宮城）
佐治亮次郎樣（水戸）
伊藤光子樣（高松）
山山谷子樣（大阪）
安村　修樣（朝鮮）
島田義雄樣（山口）
（以下次號）

金の星誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜がございますから、御希望の方は本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。

金の星社 出版だより

四月號

『家なき子』のスバラしい責行

三宅房子先生の『家なき子』は實にスバラシく賣れます。賣れる譯です。作が無類の面白いもので、一度讀み出したら止められないといふ程のものですから。また本としても、これ程美しい本は、如何に裝幀術が進歩した現代でも、他に餘りないと信じます。なにせ、寺内萬治郎先生が苦心に苦心を重ねたものだけに、實に立派なものです。表紙も口繪も十數枚の挿畫も、面白い美しいもの揃ひです。金の星社もこの本の裝幀のために

しかし、苦心は空しからず、初版再版忽ち賣切れにならうとして今三版印刷の準備中です。震災後印刷が間に合ひ兼れるので、いつ品切れになるかも知れません。お讀みになりたい方は、どうぞ大至急にお申込み下さい。(四六判箱入美本　定價金壹圓八十錢　送料十五錢)

は非常に努力して、表紙のクロースなどは日本に適當なものがないので、わざ〳〵外國から取よせた程です。

野口雨情先生著「青い目の人形」に就て

雨情先生の滿四年間の傑作ばかりを集めて、スバらしく美しい本となつて出る事になつたのです。大震災後は全國の書店に、大家の童謠は一册も影が見せない時に、この大收穫をひつさげて出版するのですから讀者の希待の程が察せられます。雨情先生は人一倍自重する人だけに、童謠集としては以前に一册『十五夜お月さん』を出したゞけです。それだけに、こゝに會心の作ばかりを集めた『青い目の人形』の尊さも知られます。雨情先生自身も、『自分の童謠を眞に愛して下さる方はこの本を見てくれ』と强い自信を持つていはれてゐる位です。以て、この本の價値が知られる譯です。裝幀には、蕗谷虹兒畫伯が非常な努力をはらつて作られただけに、これまでの童謠集には見られない程美しいものになりました。挿畫には寺内萬治郎畫伯、武井武雄畫伯、蕗谷虹兒畫伯の三大家が苦心の作を發表して、一層この童謠集を立派なものとしてゐます。(四六判箱入美本　定價壹圓六十錢　送料十五錢)

金の星社編

世界少年少女 **名著大系**

▽第一篇『ロビンソン漂流記』
▽第二篇『ナポレオン物語』
(三月中に發行)▽定價金八十五錢
▽送料金十五錢

金の星社の大計畫の一つとして此の叢書の刊行を發表します。わが國には少年少女が是非讀んで協かなければならない世界の名著が、あまり發行されてゐません。

殘念なことですが、僅かにあつても非常にお粗末ないゝ加減なものか、さもなくば頗る高價のもので、たやすく手に入れることが出來ません。本社は此のことを深く殘念

に思ひ『世界少年少女名著大系』の發行に着手した次第です。最も理想的ないゝ本をごく安い定價で發行いたします。しかも、作物はいづれも世界的傑作ばかりを嚴選の上發行します。尙、裝幀なども、最も新しい形式を發揮した頗る立派なものです。發行の上は熱狂的歡迎を受ける事を信じます。第一篇『ロビンソン漂流記』第二篇『ナポレオン物語』共に讀まずにはゐられない面白いものです。『ロビンソン漂流記』は金の星の新年號の双六になつて出たことがありますが、如何なる少年少女でも、この本を讀んで感動を受けずにはゐられないでせう。一度讀んだら一生涯忘れることの出來ない名作です。また『ナポレオン物語』はナポレオン大帝の生ひ立ちから遂にセレナヘレナの孤島で、はかない最期をとげるまでのスバらしい物語を書いたのです。金の星社はこの叢書を日本の少年少女諸君に自信と誇とを以て捧げます！　どうぞ是非お讀み下さい。三月中には發行になります。(四六判一七〇頁　表紙三色版入美本)

沖野岩三郎先生作・長篇童話

山六爺さん (近刊豫告)

『金の星』誌上でヤンヤといふ人氣を博した作は澤山にありますが、『山六爺さん』などは最も大評判だつた作の一つです。發表の當時は實に偉い評判でして、雜誌が書店に現れると、『ソレ、今月は山六爺さんがどうなつたか見ろ』といつて雜誌屋さんへ行つた愛讀者がどんなにあつたか知れない程でした。實に驚いた好評でした。

そこで、愛讀者の方々から是非一册の本にまとめて出してくれといふ御希望が澤山に〳〵來てありましたが、つい機會がなくて今日まで、延び〳〵になつてありましたが、今度いよ〳〵沖野先生にお願ひして、本にして出させて頂く事になりました。一册の本もいゝ加減には出されない沖野先生は、出版するに就て、新に書かれる程の苦心をなさつてすつかり書直されました。そこで、以前よりはもつと面白い立派な作となつた譯です。沖野先生の長篇童話の第一篇は『父戀し』で大評判を受けましたが、この第二篇の『山六爺さん』はもつと大評判になります。定價金壹圓卅錢(送料十五錢)の豫定です

金の星童謠曲譜增版出來!!

▽第一輯　人買船 (第三版)　定價金六十錢　送料四錢
▽第二輯　一つお星さん (第三版)　定價金六十錢　送料四錢
▽第四輯　青い空 (第三版)　定價金八十錢　送料六錢

野口雨情先生著

◆『童謠十講』普及版發行

石井鶴三畫伯裝幀　▽定價金壹圓卅錢　▽送料十五錢

『童謠十講』は第三版印刷中大震災に出遇ひ紙型と共に全部を燒かれてしまつたので、長い間品切れになつてゐましたが、修訂の上普及版を發行する事になり、目下印刷を急いでなりますから、三月中には出版されます。本書が童謠の研究書として最高の權威ある事は何人も許してゐますが、裝幀には石井鶴三畫伯が特に苦心をこらされました。清楚極りなき美本です。

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものな、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號〆切は三月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は六月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名に少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢
三ケ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四十錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五九六番

〔注意〕
▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割增しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年三月九日印刷納本（毎月一回）
大正十三年四月一日發行（二日發行）
東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人　齋藤佐次郎
東京市小石川久堅町百八番地
印刷人　大橋光吉
東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

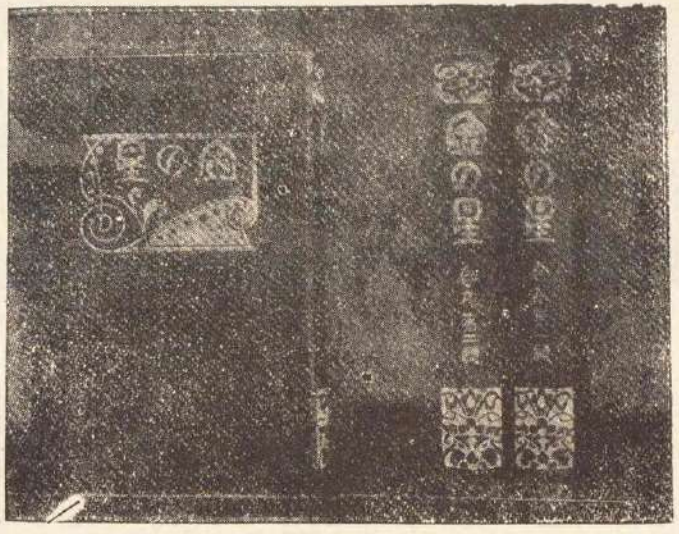
世界少年少女大系

日本には世界の名作著書を紹介した本があまりありません。それが爲めに、少年少女時代に是非讀んで置かなければならない本も、遂に讀み得ないとは、何といふ嘆かはしい事でせう。また僅かにあつても、餘りに高價であるとか、或は餘りに御粗末な譯で、一般の少年少女に推薦することが出來ない有樣です。

金の星社はこの現狀を悲しんで、『世界少年少女名著大系』の出版に着手しました。本社の志すところは、安價にして、しかも內容裝幀共に高雅充實せる書籍を發行する事にあります。世界の代表的名作は全部本叢書に網羅されますから、この叢書を讀めば世界の名作はことくくわかる譯です。是非本社の意圖を汲んで御愛讀下さい。

第一篇　ロビンソン漂流記　四六判百七十頁　新式裝幀美本
第二篇　ナポレオン物語　定價八十五錢　送料十四錢

東京市外田端三百五十一番地　金の星社　振替東京五九五九六番　電話小石川五三八七番



美しい『金の星』の合本第三輯が出來ました!!

▽水島雅保先生裝幀△

總クロースへ麗しい金箔を置いたそれは〳〵美しい裝幀ですから皆樣の書棚にお飾りになつたら、どんなに見事でせう。そしてこれが幾冊にもなつたら、一段と皆樣のお書齋を美しくする事でせう。賣切れませんの内至急に御申込み下さい。

第一輯（絶版）
定價金一圓八十錢
送料十四錢

第二輯（第五卷一號ヨリ同六號マデ）
定價金一圓八十錢
送料十四錢

第三輯（第五卷七號ヨリ同十一號マデ）
定價金一圓五十錢
送料十四錢

東京市外田端三五一　金の星社　振替東京五五九六番　電話小石川三五八七番

金の星童謡曲譜集

本居長世先生作曲
野口雨情先生作謡

沖野岩三郎先生著	父戀し（五版）	▽定價金壹圓 ▽送料十五錢	沖野先生の長編傑作童話。父の行方をたつね歩く姉と弟のあはれにして、勇しい物語。	
同	赤い猫（五版）	▽定價金九十錢 ▽送料十三錢	クス〳〵笑はずには讀めない面白い〳〵作であつて、しかも尊い教訓を與へるものばかりです。課外讀本として最上の本です。	
同	山六爺さん（近刊）	▽定價壹圓卅錢 ▽送料十五錢	山の奥の〳〵一軒家の山六爺さんが、狼や鹿や猪を相手に面白い〳〵事をやる長篇物語	
第一輯	人買船（三版）	▽定價金六十錢 ▽送料四錢	（目曲）	人買船、青い口の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
第二輯	一つお星さん（三版）	▽定價金六十錢 ▽送料四錢	（目曲）	一つお星さん、七つの子、鵙〻雀、鷄さん、象の鼻、四丁目の犬。
第三輯	青い空（三版）	▽定價金八十錢 ▽送料六錢	（目曲）	青い空、燕、雨夜の傘、でん〳〵虫、雀の泣盛り、呼ふ鳥。
第四輯	山彦（近刊）	▽定價金八十錢 ▽送料六錢	（目曲）	山彦、胡鮮飴屋、三ヶ月さん、姥捨山、眠り龜の子、長柄の橋。

東京市外田端三五一　金の星社　振替東京五五九六番　電話小石川三五八七番

K2A-26

ライオンねりはみがき

四月の野邊に咲く花は
たんぽぽの花
さくら草、
ちらり
ちらりと
雲のかげ
ゆふひが山に
かくれれば、
わたしは
ライオンねりはみがきで
きれいにきれいに歯をみがき
母さんのそばにねむります。

『金の星』第六巻第四號（大正十一年六月十三日）大正十三年一月九日印刷　新潟本
（第三種郵便物認可）大正十三年四月一日發行（毎月一回一日發行）

（定價金四十錢　送料一錢）